596
229

0049602000

0049602-000

596－229

省労抄

五十嵐力・監修

早稲田大学出版部

巻１０

昭１１

AHJ

五十嵐力監修

勞抄

卷十

純正女子國語讀本參考書

早稻田大學出版部

昭一・六・一 文部省圖書

196-229

目次

一 忘我、遊神、同化……坪内逍遙…一
二 幻住庵記……松尾芭蕉…三
三 芭蕉の事……島崎藤村…七〇
四 老の姿はかはるとも……近松門左衛門…一〇七
五 智恵の振賣……井原西鶴…一二九
六 旅ところ〴〵……編者…一六六
七 菅公の左遷……(大鏡)…一七九
八 天然の恵……千家元麿…二〇五
九 かぐや姫……(竹取物語)…二二五
一〇 ギリシャ思潮(一)……金子馬治…二四九

一一　ギリシャ思潮(三)……金子馬治・二四九
一二　枕の草子から……編者・二七七
一三　紫式部と源氏物語……編者・二九三
一四　須磨の秋風……(源氏物語)・三〇五
一五　庭園と我が國民性(一)……本多靜六・三二六
一六　庭園と我が國民性(二)……本多靜六・三三六
一七　法成寺の造營……(榮華物語)・三六三
一八　倭漢朗詠集……三八八
一九　本阿彌光悅(一)……野口米次郎・四〇六
二〇　本阿彌光悅(二)……野口米次郎・四〇六
二一　生活の中心……阿部次郎・四四七
二二　愛……綱島梁川・四六二
二三　萬葉集に現はれた純眞愛……編者・四八〇

省勞抄　卷十

一　忘我遊神同化

要旨　藝術の人に及ぼす作用を、恍惚境に置く時間の長短と感化力の淺深とにより、忘我、遊神、同化の三段に分けて說いたのである。忘我とはその當座暫らく陶然として醉つたやうな心地になること。遊神とは藝術に接した瞬間の當座のみならず、時としては其の後二三時間、長い時は日一日、夜一夜、更に長ければ三日も四日も、それ以上も夢見心地にぼうッとなつて居ること。而もて同化は更に根强く與深き恍惚境が更に長くつゞくので、その藝術に接した人が、さながら別天地に旅行するやうな心地し、其の旅行から歸つて後も、どうやら我が性癖が一變したやうな感じがし、更に時としては狹い現實界以外、若しくは以上に、一つの常住の別な世界が出來て、何となく我が心に餘裕が生じたやうな心地がすることで、とにかく是れらが藝術本

格の作用であり、殊に同化が無上至極の作用であることを說いたものである。吾々は本課に於いて、作者の文章が、よく解つて、面白くて、趣致貫祿のあることを悟らしめ、謂はゆる三段作用の意義をよく理解せしめ、また言語文字に卽しつゝ、同時に言語文字以上に出でて文藝の本領を看取し、翫味すべきことを敎ふべきであらう。

解題

坪內逍遙　愛知縣の人、安政六年五月二十二日に生れた。もと勇藏と云つたが、後に雄藏と改めた。また初めは春廼舍朧と號したが、小羊ともいひ、後には柿叟と號した。明治十六年東京大學文學部卒業、三十二年文學博士の學位を受けた。東京專門學校卽ち今の早稻田大學の創立當初より英文學を敎授し、早大文科を育て上げた文學敎育家として、且つ雅量と親切と周匝なる常識とを以て後進を誘掖した先輩として、現代文壇最大の恩人である。更に文學者としては、新らしい小說、新らしい脚本の提唱者、英文學の大家で、殊に沙翁研究の第一人者、卓拔なる文藝批評家、劇壇の最高權威であつて、その業績の範圍は頗る廣く、明治より昭和に亙る文藝史を代表する人である。

その業績の大要は明治十八年頃『小說神髓』、『當世書生氣質』の二書を出だし、之れによつて明治新文學の基礎を築いた。明治二十六年十月には「我が國の史劇」といふ論文を發表して、翌年『桐一葉』にこれを具體化し、二十九年には『牧の方』を、大正六年には『名殘の星月夜』を、同七年には『義時の最期』を發表して三部曲を完成し、明治三十年には『桐一葉』の續篇『沓手鳥孤城落月』を、大正期に入つては『法難』、『役の行者』等を公にして、劇壇の一方に新史劇を打ち立てた。明治三十年代には『新樂劇論』を公にし、やがてこれを具體化した『新曲浦島』、『新曲かぐや姬』を出だし、最近には家庭劇、兒童劇、戶外劇を創案し、同時にその脚本を新作して新しい方面を開拓した。昭和三年七十歲にして沙翁全集四十卷の飜譯を完成し、昭和七年より更に勇を鼓して、同じ全集飜譯の改刪を企て、十年の一月に本文の三十九卷を完了したが、最後の「研究栞」の加筆半ばに、病革つて永眠した。享年七十七、十年の二月二十八日である。衆議院は院議を以て哀悼を捧げた。福澤翁と唯二つの例である。尙ほ敎育家として の博士については、本抄卷一第七課「小野の道風」の餘訓を參照されたい。

本論は選集所載の本文を縮約したものである。

釋義

【趣味性】 興味ある事物に引きつけられて、それに趣き、それに味はひ入る性質といふこと、或ひは事物のおもむき、味はひを知る性質といふこと。昔の漢語にもあるが、近來は專ら英語のテースト taste を聯想して用ゐられる。嗜好ともいふ。美醜を味はひ分ける性質、即ち自然美や藝術美に對して、感情の反應する天性の謂ひである。趣味性の美に對する關係には、美を愛賞し醜を忌避する情的方面と、美醜を判斷批判する知的方面とがある。この趣味性は普通個人個人によつて異つた傾向をもつてゐる所から、趣味といふ語は個人的な好惡といふ意味に用ゐられるが、その中には自ら共通性が求められるので、自然に美の標準が打ち立てられる。

【藝術】 美術と同じ。それに接する者に美感を懷かせる人工の作品で、建築、彫刻、繪畫、音樂、詩歌、舞踊を六大藝術といふ。昔は支那でも日本でも、「術藝」と云つたものであるが、今は「藝術」が流行語となつた。

【陶然】 酒に醉うたやうな、ウットリした氣持になること。

【刹那】 セッナ。極めて短い時間。一瞬時。梵語のクシャナ (Ksana) で、印度に於ける時の最小單位(時の最大單位は劫)で、男子の一彈指に六十五刹那があるといはれる。

【忘我】 バウガ。自我意識の稀薄になつた心持で、我れを忘れて恍惚となること。哲學的又は宗教的には、Ecstasy とか大歡喜といふやうな

法悅の心境をいふのであるが、ここはそれほど強い意味ではない。

【生得、趣味性】 其の人の生れつき、趣味性が鈍い、といふこと。生得的に趣味性が鈍いといふので、「生得的趣味性」とつゞくのではない。即ち生得は副詞である。

【鑑賞】 普通英語の appreciation の譯語として用ゐられる。原意は事物を趣味的に値ぶみすることで、對境の自然美、藝術美を、我が藝術眼、趣味の鏡にうつして愛で味はへるといふので、鑑賞と云つたのであらう。

【聯想】 英語の association にあてられる語。觀念聯合ともいつて、或一つの觀念に隣接して他の觀念を想ひ浮かべること。例へば硯から墨を、墨についで槌を、路傍で見た老人から故郷の老祖父を、といふやうに。

【見馴れ聞き馴れてゐぬ爲めに聯想が起こらず】 藝術の趣味の解るといふのは、一つは馴れ親しむ事により、一つはそれに附隨する聯想によるのである。例へば、和歌を面白いと思ふのは、一つは和歌は五、七、五、七、七の三十一文字に作るものと、チャンと心得て馴れてゐる爲め、又一つはその歌に現はされた自然や人情や、似通つた古人の名歌やらを想ひ浮かべる爲めである。若し何等の親しみも準備も無くして、五、七、五、七、七、七といふ形式の文字群を見、また其の文字の上に現はされてゐる事柄を思ふならば、和歌は一向つまらぬものと感ぜられるであらう。能樂や歌舞伎芝居を見るのも同じ事で、「能」といふものは、能舞臺で、役者が面をかぶ

り、古代な裝束をして、大鼓、小鼓、笛、太鼓に囃されて演ずるもの、「羽衣」や「鉢の木」はしか〳〵の事を書いたものといふ事を知り、あれが寶生九郎だ、梅若實だ、櫻間左陣だ、といふ事などを豫め知つて、幾らかでも見馴れて居り、又觀る間に、文句や藝風や他の名人役者達の演じぶりの事などを聯想するので、面白くもなるのだが、何の親しみも準備もなく、突然あの不思議なお面を冠つて、妙なうなり聲を立てて、ピイ〳〵ドン〳〵に囃されて、立ち騒ぐのを見聞する丈では、全く何の興味も起こらぬであらう。こゝの前後は、かういふ意味あひの事を述べたのである。

【曾て何等の面白味をも感ぜぬといふは自然でない。……それは名のみの藝術である】

先づ藝術を見る人間の性質から觀察し、次ぎに見られる藝術品の方から觀察した、用意周到なる論じぶりである。即ち藝術美を全く感じないといふのは、人間として本物でなく、全く感じさせないといふのは、藝術として無價値のものであるといふこと。

【遊神】 精神を遊ばせるといふこと。「忘我」とほぼ同じ事であるが、時間に於いて長く、感じに於いて深く、語義に於いては「忘我」の唯だ忘れるといふだけの消却的なのに對して、神を遊ばし、理想世界を逍遙するといふ積極的の味がある。出典は馮衍の文に「遊二神于經書之林一」とある。

【惘となつて】 「ぼうッと」と振假名をしてあるが、これは俗語の味を主として書いたので、明

の字は、字づらをよくする爲めに、似通つた意味の漢字をあてがはれたのであらう。善い意味で、ウツトリとした夢見心地になること。

【能の後三日】 能が純な高い藝術であるので、それを一日觀ると、卑吝な心持が洗ひ流されたやうになつて、あと三四日は、その善い心持がつづくといふこと。劣等な劇などを見ると、或は利欲の念を刺戟され、或は肉慾を挑發され、よしんば美しく同情するにしても、其の同情同悲が強く激しきに過ぎ、身を痛め魂を惱まして、一種の苦痛が暫らくつゞくといふ氣味のあるものだが、能は萬事が大まかで、理想的で、實際ばなれがしてゐて、善美を主とし、暗示を旨としてゐるので、刺激に機械的の直接な強さがなく、從つて穏かに暗示的に受けた恍惚感が數日も亡せないといふのである。無論これは能好きの云ふことで、又比較的の沙汰であり、公平にいふと、能にも一向よい感じをあとに殘なさいのがあり、芝居や他の藝術にも三日以上よい感じの餘韻を殘すのがあるであらうが、しかし、大體から見て、能には特に此の傾きがあると云へるであらう。能はもと幕府の式樂であつたところから、尊んで「お能」と云つた。また「猿樂」「申樂」「能藝」とも云つたが、今日普通に云つてゐる「能樂」といふ言葉は、明治の十三四年頃から用ゐ始められたので、もと久米邦武博士の發言を岩倉右府が取り用ゐられたものであるといふ。鎌倉時代に萌し、室町の初め應永の頃に大成されたもので、その大成に與つて大いに力のあつたのは觀阿彌、世阿彌の父子、殊

に世阿彌であつた。能は建築、彫刻、繪畫、音樂、詩歌、舞踊の六つの主要藝術から成る綜合藝術で、能舞臺といふ特殊の舞臺で、大鼓、小鼓、太鼓、笛に伴つて歌はれ舞はれ、演ぜられるもの、これに觀世、寶生、金春、金剛、喜多の五流がある。

【三月肉の味はひを知らず】 論語述而第七に「子在レ齊聞レ韶三月不レ知二肉味一」とあるのを隱し引きに引用したのである。韶は舜の德業を象徴したもので、善美を盡くした樂であるが、孔子の時代には廢れて、唯だ齊の國にのみ殘つてゐた。それを孔子が齊に居られた時に聞かれたといふのである。此の「三月」のつゞきについて二說があり、或は「韶を聞くこと三月」とし、或は「三月肉の味を知らず」とし、而して多くは史記に「韶を聞いて之れを學ぶこと三月」とあるのによつて、三月の間韶を聞いて稽古し、研究した事と解してゐるが、しかし少なくとも論語の此の文は「三月肉の味を知らず」と取る方が穩かなやうに思はれる。それは必ずしも一度聞いて高尙な樂しい氣分が三月もつゞいた、といふ意味に取るのにも及ぶまいが、とにかく何度か聞いて三月の間といふもの、全く食物の興味を感じなかつたといふのであらう。坪內博士もその意味に取つて「三月肉の味を知らず」と云はれたのであらう。

【藝術が供する感興の筏】 藝術は知識で理解すべきものでもなく、又意志で支配して修養の資料にすべきものでもなく、情で以て味はひ樂しむべきもの、即ち情の世界のものである。そし

てその特別な香氣、感化力によつて一種の恍惚たる感興に入らしめて、不斷とは丸で違つた世界に遊ばしめるものである。その意味を譬喩で行つて、藝術の世界を情の海といひ、その特別な氣分を案內者と見て筏に譬へたのである。

【屑々】 セツ〳〵。枝葉末節に拘泥する貌。こせつくこと。

【營々】 エイ〳〵。あくせくといそがしがると。國語のイトナムは暇無ムの意であるといふ。さうすると漢語の營々と全く同義である。

【現實界】 現に在る吾々の眼前脚下の實世界のこと。此の實世界は、周圍との關係や生活事情により、多くは日常の煩瑣な事情に惱まされるものであるからいふ。

【理想的な空な世界】 理想は本來、實現し得ると信ぜられた最高の希望境をいふのであるが、こゝは空想的、假構的といふやうな意味で用ゐられたのであらう。即ち藝術家が空想して作り上げた想像の世界、自分の思想趣向を現はすにはこれ以上のものが無いと、藝術家の考へて創造された世界、事實には無い拵へた世界に遊ぶといふこと。

【同化】 讀者看客たる者が、藝術の魅力により作中の人物や事柄に引き込まれて、自分を忘れて作中の人物になつてしまふこと。而してその淺く暫時なるを、深く長い遊神と區別して「同化」とは呼んだのである。

【力ある藝術とは稱し難い。……しかしながら】 遊神に比して忘我はまだ〳〵低い、力ある藝術とは云へぬ。(言ひ換へると、忘我程度の藝

術に比べて、遊神殺の藝術は、大分高く、力はあるが）しかしながら、同化作用を有つものになつて始めて藝術の至境に達する。といふ風に文脈が連絡するのである。

【腰がすわらない】落ちつかない、大丈夫でないといふ事を、目に見えるやうに面白くする爲めの譬喩。

【飄逸な、高尚な、乃至美麗な世界】飄逸は一寸飜譯説明の出來ぬ趣味的通語であるが、飄は風に吹かれたゞよふ意、逸は常軌をそれるこゝろ。即ち世間離れ俗ばなれした一癖ある高尚さのこと。「乃至」は「飄逸な、高尚な、美麗な」とひたつゞけに並べると單調になるから、「乃至」で腰を折り、關節をつけて句の形を面白くしたのである。英文で同じ形の名詞や形容詞を列擧する時に、最後の一つの前に and をつけるのと同樣な修辭の味。

【元の木阿彌】再び以前の平凡境にぶり返つてしまふといふこと。天正軍記に「南都の市中に木阿彌といふ盲人あり。筒井順昭病篤くなりし時、老臣どもを枕上に召していふやう、嗣子なほ幼し。我れ死なば敵國直ちに來り攻めん。盲人木阿彌、其の音聲酷だ我れに似たり。宜しく彼れを延きて我が寢所に置き、我れの如くに事へて、とざまのものに見しめよと。順昭歿して後、木あみを召し、すべて遺言の如くせしが、嗣子長ずるに及んで、木あみ又もとの市人となりぬ」とあり、これが種となつた話であるといふ。

【水に書いたお題目】「ゆく水に數書く」などいふのと同じ意味で、駄目な事のたとへ。水の上に書けもしないが、書けると想像しての譬である。「お題目」は南無妙法蓮華經の七字、法華經の標題といふこと。

【時勢の必然】此頃の世界が機械的に、理窟ッぽく、せち辛くなり、うつとりした夢見心地などを樂しんでゐる者が、少なくなつたといふこと。

【現】ウツツ。夢に對して覺めてゐる時の心の狀態のこと。正氣。死に對しては世に現在してゐることをもいふ。

【自意識】自己意識、自覺ともいふ。英語の self-consciousness. 自分 ego. といふものを中心として統一された心作用の事。平たくいへば「おれが〳〵」といふ考が强くなつて、何でも自分を中心に考へるやうになるといふこと。

【高が夢を見させる…藝術】讀者看衆に現實を忘れて恍惚境に入らせ、夢を見るやうな氣分にならせる事を、此の上なしの成功と心得てゐるやうな藝術では、遊神程度の氣分を長くつゞけさせる事すらも出來ないので、深切な永續的同化の實を擧げるには、寧ろ空想的に作られた世界を、現實だと思はせるやうでなければならぬといふこと。

【偏に技巧や空想に依る藝術】事實らしいか、自然であるか、無理が無いかといふ事を考へないで、人物をも、自然をも、趣向をも、文章をも、唯だもう面白をかしく、美しく、賑やかなやうにと心掛ける藝術といふこと。曲亭馬琴の如きが其の好い例であらう。

【自然派の作品】我が最近の自然主義者等の作

のみならず、歐洲の自然主義者、寫實主義者等、すべて有りのまゝを寫すことを主張する作家等の藝術を指したのであらう。本抄卷九、第二十課の「現代の文學」參照。

【仔細】 細かな事情。

【隱約の間に】 あらはではないが、何とも云はれぬ微妙な間に。ちら〳〵と影のやうに。

【せせこまし】 狹くして細かしいこと。

【世智辛し】 世わたりの苦しいこと。

【やがて見さめのするやうな】 一寸は面白いと心を惹かれるが、すぐに淺薄さが目について、愛想の盡きるやうな。

【人生は短し、藝術は壽し】 英國の諺 Life is short, art is long.「壽し」はイノチナガシと讀むのであらう。老子の「壽則多恥」を「いのち長ければ恥多し」と讀むたぐひである。ヒサシとも讀むが、やはりイノチナガシの方がよい。坪内博士が用語に苦心される例の一つである。

【槿花一朝の榮】 白樂天の詩句に「松樹千年終是朽、槿花一日自爲榮」とあるなどに據つたので、むくげの花が朝咲いて夕方は凋むやうに、人の榮華のはかないことの喩に用ゐられる。

【空しく山丘と化し…長へに日月を懸く云云】 李太白の詩句に「屈平詩賦懸日月、楚王臺榭空山丘」とあるのによつたもの。屈平字は原、楚の懷王、襄王に仕へ、讒によつて流され「離騷」以下の名文辭を作つた。彼れは悲しみの極汨羅の淵に投じて死んだが、その文は不朽の名篇として永遠に傳へられてゐる。これに反し楚王の覇業を飾つた壯大なる臺榭も、今は空しく

山丘のみとなつて、もう偲ばるべきものが何もない。英雄の壯圖も亦はかないものと云はねばならぬ。英のカアライルは「ナポレオンも七日にして忘れらる」と云つてゐる。

【宗教】 神佛その他、何等かの超人間的存在を信じ、その絶大な力を尊崇して世を救はうとする教である。それには、唯一の神佛を崇拜する一神教もあり、二つ以上の神佛を崇拜する多神教もあれば、又自分の努力に依つて解脱安住しようとする自力宗教、神佛の加護によつて、解脱安住しようとする他力宗教などもあつて、必ずしも一樣でない。

【育英】 英才を育てることで、即ち教育のこと。教育を育英事業ともいふ。

【社會】 共同生活をなす人類の團體又は組織をいひ、又は同一種類の仲間をもいふが、こゝは前の意。

【文學】 廣義には言語、文字によつて表現された精神的產物の一切を含み、狹義には、その中特に空想及び感情に訴へる藝術的產物をいふ。更にこの狹義の文學の中には、形式內容共に全くこの條件に合致する純文學と、形式的方面のみがこの條件に添ふもの、例へば哲學、歷史、倫理等の內容に藝術的の形式を與へたものとがある。こゝは勿論純文學の意で、詩や小說、戲曲などを指したのである。

【性癖】 性質上のかたよつた傾向。くせ。

【催眠術】 人の意識を、ある一點に集注せしめて、人爲的に一種の睡眠又は喪心の狀態に入らしむる術。獨逸人メスメルの發明にかゝるので、又

の名をメスメリズムともいふ。この狀態に入ると、人格の統一が消滅して、聯合作用ばかりが殘る。暗示の反應が頗る强いので、催眠術を誘起する觀念を暗示すること、卽ち暗示法が催眠術の生命とされる。

【精神療法】 精神のはたらきにより、人の有する被暗示性を利用して病氣を治療する方法。催眠療法、信仰療法などがそれである。

【めいる】 元氣がなくなり、意氣が銷沈して、淋しく考へ込むといふやうな消極氣分になること。「滅入る」と書く。

【心廣く體胖か】 心がひろ〳〵となり、身體がのび〳〵となつて、何等の障礙、壓迫をも感ぜぬ、自由な氣持になること。胖はユタカと讀む。『大學』に「心廣體胖、故君子必誠二其意一。」とあるのを踏まへたのである。

【强ひて勸化門を開いても】 クワンゲモンと讀む。勸化は他をすゝめ感化して、宗教的理想境に入らしむること。「强ひて」と云つたのは、道德家、宗教家が、身を殺して仁を成し、捨身懸命の努力によつて衆生を濟度しようとするのに反して、藝術家は唯だ優秀なる作品の創作に努力するだけで、其の鑑賞批評は讀者看衆に任せるのを普通とするが、偉大なる藝術品の同化作用の尊いことを痛感すると、己れ獨り樂しむに忍びず、衆人が無感覺なるを坐視するに忍びなくなつて、こちらから一所懸命に働きかけ、世間の大衆を大藝術の醍醐味に參せしめようと努めるやうになるといふこと。「勸化」はまた轉義して僧侶などが堂塔、佛像などの建立修復に要する

財物を信者にすゝめて出さしめることや、金品の寄附をすゝめること等の意にも用ゐられる。

【同化作用は、或は高く或は卑く……善化の用、惡化の用】 善い感化を及ぼすことも出來、惡い感化を及ぼすことも出來るといふこと。同じ雄辯術も、善人に善用されると、人を善道に導くが、惡人に惡用されると、甘言に油をかけて人を邪道に引き入れることになるであらう。名文で面白く書いた風俗壞亂文學や、常道破壞の左道文學などが人を迷はすのは、その爲めで、こゝに「善化の用」「惡化の用」と云つたのは、その邊の意味である。

【風を移し俗を易へる】 藝術の感化力の偉大なる事を云ふに用ゐ慣らされた名文句。『禮記』に「移レ風易レ俗天下皆寧」とあるのに據つたのである。隆引法の味。

【樂の正雅を貴び、淫哇を惡んだ】 正雅はセイガ、正しくみやびなること。淫哇はインアイ、淫も哇も共にみだらなこと。主として性の濫用のこと。諸藝術の中でも、音樂の感化力が特に偉大なることに目をつけ、正しき樂を興し、みだらな樂を抑へて、民情を正しきに導かうと骨折つたといふこと。三味線樂に對する世人の思はくを考へる丈でも、この意味が解るであらう。

【人生原是一傀儡】 第二頁なる坪内博士筆蹟寫眞の說明である。「人生もと是れ一くわいらい、只だ根蔕手に在り、一線亂れず、卷舒自在、行止我れに在り、一毫も他人の提撕を受けざるを要す。さすれば便ち此の場中に超出せん」と讀む。傀儡は「くゞつ」であやつり人形のこと。

大意は、人生はあやつり人形の芝居のやうなもので、一番大切な事は、大本を手中に統べ括つて、一筋も亂るゝことなく、卷くも伸べるも我が自由、行くも止まるも我が一存、ホンのぼッち

りとも他人の指圖干渉を受けないことで、さうさへすれば、此の偶人劇といふ舞臺の上の優者として傑出することが出來るのだ、といふのである。『菜根譚』の中の一章。

批評

先づ組織段切の方からいふと、大まかに見て、四つの大段から成るといふことが出來る。第一の大段は「忘我」即ち「刹那の忘我」の説明で、冒頭から第二頁の十行目「例が多い」まで。その中初めの一節は「忘我」に對する抽象的及び具體的の簡單な説明で、第二節は假想された反對説に對する辨解かたゞ〳〵、藝術の持つ最低處の作用を「忘我」に見出だす事の説明である。

第二大段はその次ぎなる「忘我以上の作用を遊神といふ」から、第三頁の九行目の「稱しがたい」までで、專ら「遊神」の説明である。前と同じやうに、具體的の例證や、譬喩や、諺や、古語などを引きつゝ面白く、初心者の腑にも落ちるやうに説いてある。

第三大段は、その次ぎの「しかしながら藝術の作用は同化に至つて極まる」といふところから

第六頁の一行目までで、こゝは同化作用の説明の起首とも見られ、同時に遊神作用の餘波とも見られるが、その内容についていふと、遊神に即しつゝ同化の説明の準備をしてゐるので、正しくは遊神、同化共領の地帶と見るべきであらう。それは最初に「藝術の作用は同化に至つて極まる」といひ、而して飜つて「作用の遊神に止まるうちは」と云つてゐる所を見ても解ることで、斯樣に、境目にこだはらず、角を立てずに、二つを綯ひまぜて説明しつゝある間に、遊神をよりよく理解せしめ、同時に同化をも暗示的に理解させて、さて後に同化の本格的説明に入つたのは、老熟の筆といふべきである。また此の段の初めに、

しかしながら藝術の作用は同化に至つて極まる。

と書いてあるが、かういふ所を、初心者が氣の利かぬ筆で書くと、

次ぎに同化とは遊神以上に恍惚境の繼續するもので：

といふ風に、法律學か動植物學かの説明のやうに、まざ〳〵と境目を立てゝ殺風景にする所であるが、それを前節の最後に「忘我作用に止まるうちは力ある藝術とは稱しがたい」といひ、それを受けて「しかしながら藝術の作用は同化に至つて極まる」といひつゝ、いつの間にか同化の

説明に滑り込んだ所など、一寸したことながら、非常に巧みな、凝つた、枯れた筆といふべきである。

最後の第四大段は殘りの二節の全部で、時々忘我、遊神にも言ひ及ぼしてはあるが、主として同化作用の説明である。例の例證や譬喩に富んだ趣味のある説明で、殊に大丈夫兒が懸命努力の目標とするに足るべき藝術の本領を論じた所の如き、讀む者の意氣を昂揚せしむべきものであらう。また同化の大作用を讃美しつゝ、同時に此の大作用が惡用された場合の恐るべき結果を擧げて、讀む者を警醒したのは、尊い教育家的態度と云はねばならぬ。

此の段分けは編者が自由に試みたもので、無論別樣に見ることも出來るであらうが、要するに此の文の段取は實に自由なもので、段分けの境目を劃然とつけるなどいふ事には少しの關心もないかの如く、唯だ知り切り、信じ切り、而して熟し切つた考を、それこそ前の軸物の寫眞の文句に於ける卷舒自由、行止我れに在り、一毫も他の文章法などの提援を受けずに、考の浮かぶまゝ、筆の運ぶまゝに書き進んで、一線亂れずに、大磐石の落ちついた論文を成したかのやうに見える。初學の漫りに學ぶべきものではないが、法格を超越した一種の名文として見て

置くべきものである。

趣意としては、本文にも「今は目的を論ずるのではない、只だ其の作用に於いて、忘我、遊神以上に幾段を進めて是非とも他を同化せしむる云々」ともいつてある通り、專ら藝術の作用を説いたもので、その本質を論じたものではない。隨つて忘我、遊神、同化の三つは、必ずしも本質的に相違があるのではなく、專ら作用の程度の相違であり、いはゞ效果を標準とした便宜上の分類で、「忘我」に「遊神」がまさり、「遊神」に「同化」がまさるといふのであるが、しかしながら、斯樣な作用をもつことが一面藝術の本質の一部分ともなるわけで、殊に藝術に携はる大丈夫兒の本領を此の大同化の作用に見出だし、同時に其の作用の惡用を警戒したるが如きは、此の文章に異常な重々しさと奥床しさとを加へたものである。

また第四大段に「狹い現實界以外に、若しくは以上に、一つの常住の別世界が出來て、何となく我が心に餘裕が生ずる。所謂心廣く體胖かなどいふ心狀態で、さうして時を經るうちには自然の勢ひで、其の心狀態を自分以外の者にまで及ぼしたくなる。今度は逆さまに、現實界を件の藝術界で經驗する其の味はひと同じものにしたくなる。いやさうせねば殆んど安心がなら

ぬやうにもなつてゆく。」とある。即ち文藝の主要なる概念の中に「教化」といふ事、「世の爲め、人の爲めといふ事を含めたので、此の論は一面人生の爲めの藝術論である。之れを相反する見方、藝術の爲めの藝術論、例へば夏目漱石氏等の鑑賞を重視する極端な餘裕的態度と比較するのも面白いであらう。

要するに、藝術の最も大切なる作用に忘我、遊神、同化といふ事があること、その中で最も重要なのは同化作用であること、此の同化といふ堂々たる作用が文藝にあればこそ、命がけの努力をする甲斐があること、從つて此の同化に惡用を警戒する必要のあること、かういふ事々を親切に解りよく、品よく、面白く言ひ表はしたのが、此の文の價値である。

餘訓

本間久雄

文學の特質

文學の特質は、第一にその「恒久性」を有するところにあり、第二に「個性的」なる所にあるが、今一つ文學の特質として擧ぐべきものは、普遍的といふことである。

感情や情緒は瞬間的であり、且つ個性的ではあるが、それは又同時に普遍的でもある。例へばこゝに「親が子を愛するといふ情緒がある」とすると、この愛の情緒は、個人の氣質又は個々人の境遇等によつて、程度の差はあるが、洋の東西を問はず、時の古今を問はず、その性質に於いて變はりのないものだといふことが出來る。單に愛の情緒ばかりではない。悅びでも、悲しみでも、慰めでも、怒りでも、驚きでも、怖れでも、凡べての情緒は時の古今と洋の東西とを問はず、その性質に於いて同じものである。であるから、太古原始民族の歌謠を、今日の吾々が讀んでも、そこに寓されてゐる情緒の如何によつては、今日の人の作を讀むのと同じやうな感興を覺えるのである。「藝術は永遠である。」といふ事が、昔から云はれるのは、このためで、この意味で文學はたしかに時と所とを超越してゐる。ウィンチェスタアは說をなして、ホオマア時代の學問は既に廢れたが、ホオマアの廢れないのは、ホオマアは人間の不滅の情緒に訴へたからであると云ひ、更に「個々の情緒は瞬間的ではあるが、人間情緒の一般的性質には、非常な變化のあるものでない」といふことを、「連續してゐる各感情の浪は、一寸の間起こつて、破れて消え失せるが、浪の大洋は幾時代に亘つて絕え間なく渦卷いてゐる」と云つてゐるが、面白い比喩である。實際ウィンチェスタアが云つてゐるやうに、愛情を基とした樣々の情緒や、樣々の感受性や、感情の全分野は、時代と共に進展はするが、しかし、人類の基本的情緒は、その性質上、殆んど變化するものではない。變化するのは情緒ではなくて思想である。ウィンチェスタアも云つてゐるやうに、ホオマア時代の思想や、學術は、今日ではすつかり別なものとなつたが、アキレスの怒りや、ヘクトルとアンドロマーキーの戀や、パリスとヘレンの熱情やは、今日猶

ほ人を感動させるに充分である。個々の感情、情緒は瞬間的であり個性的ではあるが、人類一般の感情、情緒には永久的な、共通的な不變的なものがあるので、それらを題材とした文學は、時と處とを超越して、誰人も共感することが出來るのである。この普遍的といふところに、確かに文學の重大な特質の一つがある。事實この情緒の不變といふことがなければ、決して優れた文學は生れないのである。（『文學概論』より拔萃）

二　幻住庵記

要旨

元祿三年四月、芭蕉はこの幻住庵に移つて住むこと約半歲、「幻住庵記」はこの間に於ける彼れが佗住居の狀を記したものである。閑寂を極めた簡素な生活、優悠自適の心境を極度に花やかにして、同時に極度にさびた文章に現はしたもので、俳文の上乘とすべきものであり、また芭蕉が此の種の文章の中で、最も長い、最もすぐれたものである。

吾々は之れに於いて、俳文の味、芭蕉が特殊生活の味、及びその生活と文章と、卽ち內容と形式とが誂へたやうに合致し調和した趣を味はふべきであらう。前章に對する聯絡關係については、俳諧は俳人に取つて一種の忘我でもあり、遊神でもあるが、芭蕉の如きはまさしく同化の至上境に入つたもので、そのかゝりの大小廣狹はとにかく彼れが俳諧に生きた巨人であること、彼れの一生が俳諧卽生活の一生であつた事等に緣を見出だすべきであらう。

解題

芭蕉は正保元年を以て伊賀國阿拜郡柘植莊に生れた。松尾儀左衞門の二男で、幼名は金作、後に甚七郎と改め、十七歳で元服して忠左衞門宗房といつた。「芭蕉」の外に風羅坊、桃青、羽扇、釣月、羊角とも號した。十歳頃より、伊賀國上野の城主藤堂良精の嫡子良忠(俳號蟬吟)に仕へたが、良忠早世の後、家を遁れて京に出で、北村季吟に和歌、俳句を、伊藤坦庵に詩を學んだ。次いで江戸に下り、季吟門なる小澤卜尺、杉山杉風等の許に身を寄せ、小石川關口水道工事の小吏となつたが、一年ばかりにして辭し、西行、宗祇の風格を慕つて諸國を流浪し、天和元年三十八歳、上京後十年にして深川六間堀なる杉風所有の別墅に居を定め、庭前に芭蕉一株を植ゑて、之れを號とした。有名な「枯枝に烏のとまりけるや秋の暮」、「古池やかはづ飛びこむ水の音」等は、この庵での作である。

天和二年の冬芭蕉庵が燒けた。これより一所不住の決心堅く、漂泊の志止みがたくして、長き東西南北の旅に上つた。その四十一歳より四十六歳に至る間の旅の記錄が、『野晒紀行』、『鹿島紀行』、『芳野紀行』、『更科紀行』及び『奥の細道』等である。奥の細道の旅を終はつたのが元祿二年九月で、それから本課の名題なる「幻住庵」に移り住んだのが元祿三年四月であつた。居る

こと約半歳、「幻住庵記」は此の時の作である。元祿四年の冬また江戸芭蕉庵の人となつて閑居することと二年餘り、その後元祿七年五月、四國より長崎への旅を志して、まづ伊賀より京都に向ひ、九月奈良を經て浪花に出でたが、痢病にかゝり、十月九日、

旅に病んで夢は枯野をかけまはる

の句を遺し、同十二日遂に花屋仁左衞門の離れ座敷で、五十一歳の生涯を終へた。遺骸は門弟に守られ琵琶湖畔義仲寺に葬られた。そこに「木曾殿とせなか合せの寒さかな」の句碑が立つてゐる。

釋義

【幻住庵】近江國滋賀郡石山村の奥なる國分山なる八幡宮の傍らにあつた。九尺四方に三尺の下屋をつけた、鴨長明が方丈記を思はせるやうなもので、芭蕉はこゝにゐて長明に似た生活をもしたのであらう。庵は其の後、この山麓を少し隔たつた別保府の尼寺の一隅に移されたが、不思議な女人に保護されて今も昔の面影をとゞめてゐる。幻住庵の額も掲げられてはあるが、掲げられたのは擬製の第二號で、一如子が筆の本物は奥に丁寧に保管されて、特別の人の外には觀覽を許さぬことになつてゐる。本讀本のは無論その本物である。八幡宮の傍らなる舊跡には、今三基の碑が立つてゐる。一つは蝶夢の建

てた「芭蕉翁幻住庵舊趾」と刻んだ長方形をなした竿形の碑である。一つは勢田の雨橋が建てた「芭蕉翁經塚碑」で、もう一つは梅室の筆に成つた「まづ頼む椎の木もあり」の句碑、共に自然石に散らし書をしたのである。「幻住」の意は此の世を幻と觀じつゝ、暫らく之れに住するといふのであらう。而して住する間は我が趣味に合つた理想的の生活をなしつゝ、やがて之れを棄て去る日のあることを豫想したのであらう。

【石山】 滋賀郡石山村。こゝには有名な石山寺の觀世音がある。石山寺は仁和寺の屬院で天平中良辨僧正の開基、勢多川に臨み近く琵琶湖を控へて名高い景色である。「源氏の間」といつて紫式部が源氏物語を草したと傳ふる部屋がある。

【岩間】 石山村大字内畑にある。石山寺の南一里半、石山寺から山つゞき、醍醐寺に至る山中で、そこに理性院正法寺、俗に岩間寺といふのがある。岩間寺は石山寺と共に西國三十三札所の一である。

【國分山】 コクブヤマ。石山村大字國分にある山で、石山寺の北西に接してゐる。

【そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし】 「そのかみ」は「その昔」の意で、昔のある一時を指していふ詞。當時。「國分寺」(コクブンジ)は聖武天皇の天平十三年に、國家平穏の祈禱所として諸國に建立せしめられた官寺で、それに國分僧寺、國分尼寺の二種があつた。『類聚三代格』に「毎國に造る僧寺には必ず二十僧あらしめ、其の寺名を金光明四天王護國之寺とす。尼寺は十尼、その寺名を法華滅罪之寺とす。」とある。東

大寺を總國分寺として、その管理の下に國中の僧尼を監督せしめたのである。こゝに謂ふ近江の國分寺の址は、石山寺大字國分に在る。『輿地志略』に、「國分寺は今國分村にあり。塔ありし處とて、大なる礎存在せり。今存する礎を、或は塔の礎といひ、或は門の礎といへり。石と石との間、八間許りあり」とある。

「そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし」は、普通の文體ならば「そのかみの國分寺の名を傳ふるなるべし」といふべきであるが、例の俳家一流の文法で、特に俳文にのみ許された文體ともいふべきものである。奈良朝の昔、此の山近くに國分寺が建てられた、その折の寺の名を負うて今日に及んだのであらう、といふこと。

【翠微に登ること】 「翠微」は『爾雅』に「山未レ及レ上曰二翠微一」とあり、その疏に「謂レ山未レ及二頂上一、近旁陂陀之處一名二翠微一。一説、山氣青縹色、故曰二翠微一」とあるのによつて、普通には山の八合目邊の傾斜をなした所とし、時には薄緑の山の色の事と解してゐるが、こゝは決く後者の意で、つまり、先づ谷川を渡り、緑の茂みを分け登ること二百歩といふのであらう。それは、此處は麓の流れを渡つて進んだといふ、山麓本位の記事で、又二百歩といへばわづかに六七十間の一町そこ〳〵で、どうしても山頂本位に見て八合目九合目などいはるべき處ではないからである。思ふに翠微の語源は、頂に近い部分を遙かに見上げると、謂はゆる遠山のうす緑で、草木の翠色も麓のよりは微かに淡く見える所から翠微とは云つたので、即ち此の語は距離本位の語

ではなくして、色彩本位の語であつたのであらう。(從つて赭ちやけた禿山は、たとひ八合目でも翠微とは云はぬのであらうと思ふ) 即ち色彩本位である所から、山頂に近い部分ならずとも、微翠の色を帶びた處は、麓でも之れを翠微といひ、轉じては山の樹林の茂みをもおしなべて翠微と云つたのであらうと想像される。とにかく此處は「麓の小流れを渡り、翠の茂みに分け入つて登ること一町餘りの處に八幡宮が立たせられた」といふ意味に相違ない。「翠微に登る」は普通ならば「翠微を登る」といふべき處であるが、向うの翠樹層に重きを措いて、「茂みの中に分け入つて登る」といふ味を、此の「に」で利かしたのである。芭蕉が言葉を大切にして片言隻句に味をもたせたことは、これでも解るであらう。

【三曲二百歩】 俗語でいへば「三度曲つて二百足ばかり行くと」といふ所、普通文ならば、「道三たび屈折して進むこと一町ばかり」などいふべき所であるが、それを「三曲二百歩」と云つた爲めに、漢和俗の三語の味、簡潔な味、通な意氣な味、凝つた曲味が現はれたので、そこに斯翁の私淑した老杜子美が「語人を驚かさずは死すとも休まじ」と云つた意氣が見えて、何とも云はれぬ面白さである。文章に對して詞遣や句作りなどの形式のみをいふのは穩かでないが、一面から見ると、國語國文の最要義は言葉といふものの擇び方、使ひこなし方にあるので、かやうな「三曲二百歩」などいふ句が、實は文章に大切な味と命とを與へるのである。婆言を作文上の

一參考として下されば有難く存じます。

【八幡宮立たせ給ふ】 「八幡宮あり」といへば平凡につまらなくなるのだが、「立たせ給ふ」と云つたために、尊んだ味、活かした味が現はれて面白くなつたのである。

【神體は彌陀の尊像とかや】 八幡は應神天皇を菩薩の化身として唱へ出した名であるが、本地垂跡說によつて佛者が我が神道の神々を佛に附會した所から、神體が僧形の八幡となつてゐるところが諸處にある。これも其の神佛混淆の現はれである。彌陀は阿彌陀、梵語(Amitabha)で無量壽又は無量光と譯する。西方淨土にいますといふ如來の名。

【唯一】 ユヰイチ。唯一神道で神道の一派。儒佛の敎旨を混へない純粹な固有の隨神の道を主張するもの。後土御門天皇の朝に吉田祠官の卜部兼俱の創めたもので、天兒屋根命から傳はり、中臣鎌子が祭官意美麻呂に授けたのに起こるといふ。宗源神道、唯一宗源、元本宗源神道などともいふ。

【兩部】 リヤウブ。兩部神道。眞言の金剛界、胎藏界の兩部の曼陀羅の諸尊を我が國の神祇に合同して、本地垂跡說を立て、天照大神を大日如來、八幡宮を阿彌陀如來など稱して、神佛二道を習合したもの。兩部の語は金胎の兩部に取つて、神佛二道に應用したのである。

【光を和げ利益の塵を同じうす】 老子の謂はゆる和光同塵を踏まへた文。和光同塵は神や佛は、その持前の智德をそのまゝ現しては、餘りに尊くて俗衆には近づき難く思はれる所から、

わざと赫々の光を和らげ、俗人と下賤の習俗を同じうして、彼等の間に親しみつゝ多數の人間を感化清度して下さるといふこと。「利益」は衆生のさゝげる信仰に對して神佛の授けて下さるお蔭のこと。つまりは資本を入れる事に對するリエキの意味ではあるが、神佛の授け給ふものをば、宗教的には呉音でリヤクと讀むのである。「利益の塵を同じうし給ふ」は、例のひねつた俳家の句作りであるが、つまり俗衆の仲間になり、同塵して、廣く利益を施さうとなされる、といふこと。

【神體は彌陀の尊像とかや・・・又たふとし】「唯一」「兩部」などいふ語はむづかしさうで、實は、辭典を引けば何でもないことだが、全體の意義趣味を引きつゞけて理解するのは一寸むづかしい。大體はかういふ事であらう。八幡宮ならば御神體は御鏡ででもありさうなものだが、この御社のは阿彌陀樣の尊い御姿だといふことである。吉田家一流の、儒佛を交へぬ純粹生一本の神道の方では、神社に佛體を齎くなどいふ事は、ひどく忌み嫌ふことであるが、しかしそれは考へ方次第で、世界をしろしめす尊い御本尊が、廣く衆生を救はうとて、神ともなり、佛ともなり、えらい御威光を和らげて俗人の仲間になり、彼等と賤しい穢い生活を一緒にしつゝ、夥しい御利益を與へて下さると、かう解釋すれば、これも亦誠に難有いことである、といふこと。

【物しづかなる傍らに住み捨てし草の戸あり】桑門人が無いので御社がシーンとして靜かに

立つてゐる、その傍らに、誰れかが、曾ては住んだのであらうが、今は住み捨てられて無住になつてゐる一つの草庵がある、といふこと。「草の戸」は草葺きの小さな家。「戸」は家の一部分によつて全體を暗示した修辭、擧隅法。

【狐狸ふしどを得たり】正面からいふと、狐狸の棲所(すみか)となつてゐるといふことだが、「臥戸を得たり」といふと、人間が住んで居ると、寄りつけないのだが、人間が退却して空にしておくので、狐たぬきめ、立派な寢どころを、まんまと手に入れたといふわけだ、といふ洒落れた譬喩味、俳諧味を見せたのである。

【幻住庵といふ】庵の名の深い意味は、此の一篇の文章全體が、現はして居るのだが、文章としては、此の六字一章の短文句が、前後の長文句の間に挾まつて、變化をつけてゐるところを味はひたい。

【主の僧何がしは勇士菅沼氏・・・】「主」はアルジと讀む。頭註にある本多八郎左衛門、探山居士のことであるが、僧としての名を明らかにせぬので「なにがし」とは云つたのであらう。或は知つては居るが、わざとぼかして、奥床しくしたのであらう。「勇士」以下は、「主僧は武勇の士菅沼氏、俳號を曲翠と云つた我が弟子の伯父さんであつたが、八年ばかり前に歿くなられ、今は幻住老人の名が記憶されてゐるばかり、姓名來歴すべて忘られて了つてゐるのである」といふこと。「菅沼氏、曲翠子」のつゞきは一寸をかしいが、「菅沼氏卽ち我が弟子曲翠君」の意である。「子」は敬愛の意の添へ詞、「勇士」は

武勇の士の意であるが、此の人膳所藩主本多侯に仕へ、享保五年七月二十日、奸臣曾根權太夫を斬つて自殺したので、特に「勇士」とは云つたのであらう。「侍りし」は本來「仕る」と同じやうな卑下の詞で、この場合には相應はしくないが、鎌倉以來の敬語の亂れを、そのまゝ襲つたのであらう。「今は八とせ」は、一つは次ぎなる「予また：十とせ」を誘ひ出す爲めの句である。此の老人が歿くなつて、早いもの、もう八年になるが、此の老人の見捨てたは娑婆の憂世、私はまた都會に交はる俗生活を見すてゝ、もう十年、五十歳近き身になりながら云々といふこと。

【十とせばかり・・・・五十年やゝ近き身】 天和二年芭蕉三十九歳の時、深川の芭蕉庵が燒け失せた。彼ればやうやう身を以て遁れたが、それより一所不住の心が起こつて甲州に遊び、半歳ばかりを經て歸つた。「市中を去る」とは、これを起點としたので、それより元祿三年の四十七歳までを概算して、十歳ばかりとは云つたのである。

【蓑蟲の蓑を失ひ】 住むべき所を失つたことの譬。元祿二年三月奥の細道の旅に上る時に庵を人に讓つたのを、家無しになつたと見て、蓑を失つたとは云つたのである。蓑蟲は鱗翅類の昆蟲、その幼蟲が絲を吐き、木片などで蓑の形の嚢狀の巢を作り、身を包んですむ故に、この名がある。

【蝸牛家を】 「かたつむり、家を」と讀む。小さい家、むさくるしい家といふ意。支那では、小さい家を謙遜しながら風流めかして昔から蝸牛

廬、蝸廬など云つて來た。尙ほ此の「蝸牛家を」を「蝸牛の家を」とした本もあるが、これは前の「簑蟲の」に調子を合はせて、「蝸牛の」としたのであらうけれども、實は「みのむしの、みのをうしなひ、かたつむり、いへをはなれて」と、五七調に疊んだので、「かたつむり、家を離れて」といふのがよいのである。

【奥羽象潟の暑き日に面をこがし・・・・】 元祿二年、芭蕉四十六歳の三月二十七日、江戸を立つて奥羽の旅に出た。『奥の細道』はその時の紀行である。その足跡の大體は、千住より奥州街道を北に取つて日光に詣で、那須野を横切り、白河の關を越えて、四月二十二日須賀川に着き、福島に出で、五月一日飯坂溫泉に泊り、白石を經て岩沼に着いた。それから仙臺に入り、鹽釜、松島を巡つて石卷に出た。そこから北の方二十里、一路平泉へと急ぎ、更に道を南西に取り、陸前羽前の國境を越えて新庄に出で、大石田より最上川の急流を下つた。六月三日羽黑山に登り酒田に出で、北に進むと十二里、象潟の勝を探つて再び酒田に歸り、越後路を取り直江津を經て加賀國に入り、七月十五日金澤に着いた。それより山中溫泉に浴し、福井に出で、八月十四日敦賀に着き、九月三日大垣に入つた。この間五ケ月を越え、旅程六百里に餘つた。それから九月六日には、伊勢に向つて旅立ち、神宮に詣でて伊賀に歸り、後程なく京都に上り近江の膳所で越年し、翌元祿三年春伊勢、伊賀に行き、四月を以て幻住庵に入つたのである。

象潟は羽後國由利郡鳥海山の西北麓なる海岸

で、松島とも並べられた風光絶勝の地であつたが、文化元年鳥海山の噴火の爲めに埋没して全く昔の面影を失つた。「奥羽象潟」のつゞきは一寸をかしい。「奥羽及び象潟」の意味では無論あるまいが、さればとて、象潟は「奥羽の半ばなる出羽」の、更に限ると「出羽の一部なる羽後」の一部であるから、奥羽の象潟の意味にしても穩かとは云はれぬ。察するに芭蕉は、象潟前後の旅程が、六月の十六七日頃(陽暦の七月中旬頃)の梅雨(つゆ)あがり、やがて土用に入らうといふ酷暑の折であり、又本文の「暑き日に面をこがし、高砂子歩み苦しき北海の荒磯に踵を破りて」は、主として『奥の細道』の「酒田の湊より東北の方、山を越え、磯を傳ひ、いさごを踏みて、其の際十里、日影やゝかたぶく頃、潮風眞砂を吹き上げ、」のあたりを匂はして居るやうに見えるので、此の炎天の日焼けを、象潟だけの事とするのも事實に合はず、また「出羽の象潟」とか「羽後の象潟」とするのも何となく調子がわるいので、一つは象潟の前後の事情をも含めたいといふ關心から、つい「奥羽象潟」とは書いて了つたのであらう。そして當代及び後世の讀者が祖翁の名に怖ぢて、一圖に讃讃して了つたのであらう。

また思ふに、此の「奥羽象潟」は、「羽の象潟」即ち「出羽の象潟」といふ意で、「奥」の字は唯だ調子を成すために添へられた帶字であること、たとへば國家の「家」の字、一且緩急の「緩」の字の類ひでもあらうか。とにかく普通に解釋しては無理な句であらうと愚考する。

【高砂子歩み苦しき】 タカスナゴ。砂の高く盛りあがつた所。砂丘。『夫木抄』なる「須磨明石浦の見わたし近けれどあゆみ苦しきたかすなごかな」を踏まへたのであらう。

【北海の荒磯】 鶴岡と象潟との間なる砂磯傳ひをも含めて、越後から越前まで、日本海に沿うた北陸の旅路を指したのであらう。

【湖水の波に漂ふ】 琵琶湖畔にさまよひ着いた、といふ事を、湖水の緣で、面白く「漂ふ」と云つたのである。そして鳰(にほ)といふ水鳥が、『古事記』『萬葉』の大昔以來此の湖水の名物となつて、此の湖の別名を「鳰の海」ともいふ位になつて居り、また此の鳰といふ水鳥の巢の作り方が、蘆の莖を中に取り籠めて水に流されぬやうにし、また莖との接觸面に隙間を作り、水の干滿に隨ひ、上下の移動を自由ならしめて、水より離るる憂もなく、同時に水に溺るゝ氣遣ひも無いやうにしてある所から、是等の類似に事よせて、流浪生活中に於ける一時の安全地帶的滯留所といふ意味の譬喩に用ゐたのである。「流れとゞまる」「一本の陰たのもしく」など云つたのは、そのためで、總じて此の邊は修辭學に謂はゆる隱喩の味を利かせ、普通の直喩にすれば「蓑蟲の蓑を失ひたるが如く」、「蝸牛の家を離れたるが如く」、「波に漂ふ如く」、「鳰の浮巢が蘆の莖にすがり止まる如く」、「一本の蘆を頼もしがる如く」といふべき所を、打つて一丸となして、蓑蟲、蝸牛、鳰の事を、直ちに芭蕉自身の事にしたといふ簡淨の味である。

鳰は鴨に似て小さい水禽。色は蒼黒くして斑が

ある。胸は黄色で紫斑があり、腹は白く、尾は短い。巧に游泳しよく水中をもぐる。「鴉」の字は水中に入る鳥なるより入鳥の二字を合はせたので、ミホともいふ。また俗にはカイツムリ、ムグリなどいふ。

【卯月】陰暦四月の異稱。

【やがて出でじ】新古今集卷十七に西行法師の歌として、「芳野山やがて出でじと思ふ身の花散りなばと人や待つらん。」とあるのを踏まへた隱し引きの味。ほんの一寸のつもりで入つた山ではあつたが、そのまゝ長く居ようかとまで思ふほど、染み〳〵氣に入つて來たといふこと。

【さすがに春の名殘も遠からず……】「さすがに」は「しかしながら」の意。前段「卯月のはじめ」を承けたので、陰暦では四月、五月、六月の三月を夏の領分とした、而してこれは夏の節一月なる四月の、しかもその初めだから、「夏とはいふものゝ、然しながら、まだつゝじの咲き殘りもちらほら見え、山藤なども見えて面白い」といふこと。「春の名殘も」はつゝじから山藤までかゝつてゐるので、時鳥からは夏の本部のつもりで書いたのである。

【宿かし鳥、木つゝき】『風俗文選』によると、「宿かし鳥」は燕のことである。「かし鳥」はカケスのことであるが、燕は、人が軒下、店頭などに、巢を營むべき宿の下地を作つて貸し與へるので、「宿かし鳥」とは、しやれて言つたのであらう。こゝは例の引喩で、幻住庵を修復して貸すといふ親切な便りさへあるものを、たゞ貸して貰ふ家だ。破壞專門の啄木鳥が來て、つゝいていたづらする位、何の氣にかけるに及ばうかと、上機嫌に洒落などいひつゝ、といふこと。「木つゝきのつゝく」はそのまゝでも面白く解るが、『源平盛衰記』卷十、「守屋啄木鳥と成る事」の條に、

「昔聖德太子の御時、守屋は佛法を背き、太子は之を興し給ふ。互に軍を起こしゝかども、守屋遂に討たれけり。太子佛法最初の天王寺を建立し給ひけるに、守屋が怨靈かの伽藍を滅ぼさんがために、數千羽の啄木鳥と成つて、堂舍をつゝき亡ぼさんとしけるに、太子は鷹と變じて、かれを降伏し給ひけり。されば今の世までも天王寺には啄木鳥の來ることなしといへり」とあるのに思ひ寄せて書いたのであらう。こゝの「宿かし鳥」と「啄木鳥」とは、唯洒落の材料に使つたので、是等の二種が來るとか來たとかいふのではない。啄木鳥は攀禽類の一、嘴は眞直で堅く、舌は細長く、先が逆鉤となり樹をつゝいて皮下の昆蟲を引き出して食ふに適する。趾は四本で、二本づゝ前後に向つて木を攀づるに都合よく、尾は強くて、樹の幹の上にてよく體を支へる。

【そゞろに】「すゞろ」に同じく心の自然にすゝむこと。何となく勢強く引かるゝこと。

【魂吳楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ】前の句は杜甫が「上岳陽樓詩」に、

昔聞洞庭水。今上岳陽樓。吳楚東南拆。乾坤日夜浮。親朋無二一字。老病有二孤舟。戎馬關山北。憑レ軒涕泗流。

とあるにより、後の句は宋の詩人黃山谷が惠宗の蘆雁の畫に題した詩に、

惠宗煙雨歸雁。坐我瀟湘洞庭。欲ノ喚扁舟歸去。故人道是丹青。

とあるのによつたのである。

瀟と湘とは共に河の名で、洞庭湖の南を流れる。湘水は永州府の北を流れ湖の入口で瀟水と合流する。此の二水の附近には「平沙落雁、遠浦歸帆、山市青嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、煙寺晩鐘、漁村夕陽」といふ謂はゆる「瀟湘八景」があつて、風光の絶佳を以て聞え、殊に八景一組の風景美の模範的先例として名高い。

洞庭は長さ三十里、幅二十三里、支那第一の大湖で、湖南省の北部にある。湘江の外に沅江、資江等を入れて岳州府の北より揚子江に注ぐ。湖中には君山・明山・石門山等の小島が散在し、その中君山が最も名高い。

このあたり、例の簡潔な、洒落な、主客をごつちやにした、俳諧的、隠喩的の筆致で、説明しにくいが、大體は此の幻住庵から琵琶湖畔の名勝を見はるかす事に於いて、自分は杜子美が岳陽樓から洞庭瀟湘を望み、黄山谷が惠宗の同じ湖江を寫した名畫に見とれた二大風流を、ほしいまゝにすることが出來るといふ事で、それをば、芭蕉自身と杜甫、山谷と、琵琶湖と洞庭湖とを、主客ごつちやにして、極度の勝手ながら、又極度に面白く書いたのである。も少し委しくいふと、杜甫が上三岳陽樓二詩には「吳楚東南に拆け」、とあつて、東南の方面にあたつては、吳楚の二國が相分かれ相並んで、遙かにつゞいてゐる遠景を賞することが出來ると云つたが、此の名湖に沿ふ準岳陽樓ともいふべき幻住庵に立つ

て眺めると、魂がそゞろに浮かれて大杜甫と共に、東南につゞく吳楚の遠景を幻に見るやうな心地がする。また黄山谷は惠宗の煙雨歸雁の圖を見て、すつかり瀟湘洞庭のほとりに立つた氣持になり、いざ歸らうとして、舟に喚びかけると、惠宗が笑つて「オイ〳〵とぼけちやいかんよ。その舟人は畫だぜ」と言つた、と書いてあるが、私も此の庵で近江八景に取りまかれてゐると、まるで黄山谷が現をぬかした瀟湘洞庭に立つて居る氣になるのだ、といふ味である。かういふ文章は、わが王朝や唐宋の古典趣味と元祿俳人の瓢逸な諧謔趣味との面白く調和した、—といふよりは寧ろ立派な古典を自由に使ひこなして、我が藥籠中のものとした俳諧風流を味はゝばねならぬので、試みに此處だけを現代文式に譯して見ると、まづかういふのであらう。こゝに移つたのは四月の初め、夏とはいへど、まだ春の面影が相應に殘つてゐて、咲き殘りのつゝじや、松の枝に垂れた山藤などの味な眺めがあり、それに時鳥が折知らせ顔に、時々啼いては過ぐるといふ、初夏新緑の選まれたる好い時節である所へもつて來て、「宿貸さう〳〵」と啼いて呼ぶ親切な鳥が音信れて來るのに、啄木鳥のつゝく位何の氣にかけるに及ばうか、家を貸さうとて招く人さへあるのに、破れ、つくろひの心配は無用のことなどと、好い氣分で洒落などいひつゝ來て見ると、住んで見ると、遠望は吳楚の分岐連亙を思はせて岳陽樓に立つた杜甫の風流を分前し、近景は惠宗が煙雨歸雁を偲ばせて、身

は宛ら瀟湘洞庭に立つ心地がするではないか。といふので、是れは洞庭瀟湘に綻り合はせての譬へ話だが、さて今度は此の幻住庵から見る四方の形勝を列べ記すとかうだ、と云つて、周圍の記述に移つたのである。

【山は未申に峙ち…北風潮を浸せり】 例の俳諧的風流の文であるが、「山」は國分山のことで、即ち此の庵の立つてゐる山は西南の方角に峙つてゐるといふこと、言ひ換へると、國分山の東北麓に此の庵が立つてゐるといふことである。「人家よき程に隔たり」の人家は國分村の家並で、翁は此の村との距離が氣に入り、此の家並の遠望を愛したと見えて、彼れが「よき程」と云つたのはどれ程の距離で、どんな工合の隔たりかと、それを研究する爲めに、東京からわざ〳〵近江まで出掛けて行つた好事家もある。

とにかくこんな事に於いても、俗塵を離れた幽邃な自然を愛すると同時に俗世間を懷かしんだ芭蕉の趣味が偲ばれるであらう。「南薰峰よりおろし」は、時しも初夏なので青葉を吹く、薰りのよい、暖かい南風が、此の山の峰から吹きおろして來るといふこと。峰は同じく國分山で、一つは西南に峙つてゐるから南薰とは云つたのであらう。薰風は夏の風、新緑の香りよい風で、我が古典語の「青嵐(あをあらし)」にあたつてゐる。『史記』なる舜の歌に「南風之薰兮、可以解吾民之慍兮」とある、又朱熹が四時に於ける讀書の樂を詠じた律詩の夏の結句に、「讀書之樂樂無窮、援琴一奏來薰風」とある等を見て察せられる。「北風湖を浸して涼し」は、初夏の季節に因んで、

湖水越しに吹いて來る北風の涼しさを悅んだので、句作りとして、「南薰峰より」に對して「北風湖を」の對偶を悅んだのである。

【日枝の山】 ヒエのヤマ。比叡山のこと。近江と山城との間にある名山。高さ二八六〇尺、略して叡山といひ、天台宗に屬する所から台嶺ともいひ、南都に對して北嶺ともいひ、又鷲の御山、都の富士などと稱せられる。山上に延曆寺根本中堂がある。

【比良の高根】 近江國滋賀郡木戸、小松二村の西に聳え、琵琶湖の西岸にある。海拔二九〇〇尺、この邊では最も高く、雪の降ることも最も早い。その暮雪の景は近江八景の一である。

【辛崎の松】 唐崎とも書く。滋賀郡滋賀里の東の湖岸にある。そこに一本の老松があつて、千餘年を經たといはれたが、近年全く枯れてしまつた。この地の夜雨は八景の一。

【城あり】 膳所(ぜぜ)城で、慶長六年德川氏が關西諸侯に課して築いたもので、湖岸の一美觀である。本多氏の城府であつた。

【橋あり】 瀨多橋のこと、謂はゆる瀨多の長橋で、唐橋ともいはれる。俵藤太秀鄕が百足蟲退治の傳說で名高い。昔は宇治、淀と共に我が國の三大橋と稱せられた。

【笠取】 カサトリ。笠取山で山城國宇治郡にある。醍醐山の東に聳え、近江の國境に接してゐる。歌枕で名高い。

【早苗とる】 苗代田の苗を取ることだが、「取る」は拔き取るのではなく、手に取るの意で、手に取つて田に植ゑはさむこと。挿秧といふ。「さ」

は早の意かといふ、稲の苗に限る一種の美稱である。

【水鶏のたゝく】 その鳴く音が戸をたゝくやうに聞こえるので、此の鳥の鳴くことをたゝくといふ。水鶏（クヒナ）は涉禽類の一種、體は長さ七八寸、幼い鶏に似てゐる。體は黄褐色で白い斑があり、腹は少しく灰色で、脚は長く赤褐色である。水邊に棲んで小魚を食ふ。

【三上山は士峰の俤にかよふ】 三上山は近江國野洲郡にある山で、俵藤太の傳説の蜈蚣の棲んでゐたといふ山。姿が富士山に似てゐるので、近江富士とも呼ばれる。士峰は富士山の略名。

【武藏野のふるき住家】 實は大都會なる大江戸の一部を、風雅めかして武藏野とは云つたので、江戸深川の芭蕉庵のことである。芭蕉庵からは富士が眺められたので、近江富士を望むと深川の舊棲が偲ばれるといふこと。

【田上山に古人をかぞふ】 田上山（タナガミヤマ）は近江國栗太郡田上村にあつて、そこに猿丸太夫の墓がある。その墓の苔を掃つて古の名歌人を偲ぶといふと。「かぞふ」と云つたのは猿丸太夫の他にも名のある古人の墓や傳説などが殘つてゐるので、それを指折りかぞへて古を偲ぶといふのであらう。『方丈記』にも此の山に猿丸太夫の墓を音づれたことが書いてあるから、鴨長明も偲ばれた一人であるかも知れぬ。

【笠取に通ふ……】 此の邊、名詞だけを拾つて解くのは何でもないが、事と味とを考へると相應にむづかしい。總じて此のあたりの景物は、幻住庵の眼前脚下から可なりな距離の遠望にまで

及んで居るので、それらを叙述の都合本位に、面白をかしく組み合はせ、言ひ做したのであらう。例へば「笠取に通ふ木樵の聲」は、文法的には笠取山に行く樵夫の話聲のことのやうで、それが笠取ならぬ何處の里での話聲でもよいわけであるが、こゝの眞意は、多分、笠取山に於ける樵夫の木を伐る音及びそれに伴ふ樵歌のことであらう。又「木樵の聲」と云つたので、その聯想から「早苗とる歌」と對させたので、この「聲」は國分山、笠取山、その他近傍どの山の麓でもよいのであらう。又「早苗とる」から田の縁で「螢飛びかふ」といひ、「水鶏のたゝく」と續けたので、凡ては俳諧連歌の心持で、卽かず離れずに轉々したのであらう。そして前の「城あり、橋あり、舟あり」の目本位なるに對して、伐木樵歌、早苗歌、鳥の音と、耳本位の趣味を竝べたのであらう。また三上山に富士を偲ぶと云つた緣にちなんで、田上山に古人を思ふとはつゞけたのであらう。

【さゝふが嶽、千丈が峰、袴腰】 その界隈の山といふだけで、いづれも詳しい事が解らない。

【あじろ守にぞとよみけむ】 黒津の里は、田上山の麓にあるといふ。「あじろ守にぞ」といふ歌は『萬葉集』に見えないので、寄せの味は解らないが、（萬葉に「宇治川は淀瀨なからしあじろ人舟よばふ聲遠近きこゆ」といふのがあるが、無論それではあるまい。）黒津の里はいと黒うなど洒落れて居るところを見ると、黒津の里が杉や檜などの常磐木で眞黒に茂つて居るのが、宇治の網代の番人が日やけして、眞黒になつた顏に

ぞ似たりける、といふやうな古歌があつた、それが萬葉にあつたと覺え違ひしたものでもあらう。あじろ守は網代の番人、網代は川瀬に網を引いたやうに竹木を編みつらねて、魚を誘ひつつ、その流れの末に簀をあてゝ魚を捕るもの。

【なほ眺望くまなからんと】クマは物の隅、屈折して入り込んだところ。轉じて隱れたところ、奥まつたところをいふ。こゝは後者で、尙ほ好い眺望は隅々に隱れてゐるのをも、殘さず見ようといふので、といふこと。

【這ひのぼる】「這ひ」は手を使ふやうにして登るので、山路の急なる事を匂はした筆致。

【松の棚つくり、藥の圓座を敷きて猿の腰掛と名づく】山の峰の高い上に、更に少しでも高くして遠くを見はるかさうとて、松の枝の間へ持つて行つて、空中高く鳥の巢の樣な腰かけの棚を作つて、戯れに「猿の腰掛」と呼んだといふと。「松の棚つくり」は、曖昧ではあるが、地べたに松の木で棚を構へしつらへたことではあるまい。此の「腰掛と名づく」の次ぎに、餘りに故事の引用がやゝこしいので左の

かの海棠に巢をいとなび、主簿峰に庵を結べる王翁徐佺が徒にはあらず、たゞ睡辟山民となりて孱顏に足を投げ出だし、空山に虱をひねりて坐す。

の數句を省いたが、この「海棠に巢を營び」といふのは、徐老といふ隱者が、道を樂み、藥屋となつて市中に隱れ住んだが、家に數株の海棠があつたので、其の枝の上に巢を營み、そこに坐して地上の人と談話を交はしたといふ故事があ

る、それを取り入れたのである事に連想すると、是れは必ず松の枝の間の空中に鳥の巢の樣な座を構へて、そこにわらうだを敷いては、かうやつて枝の間に尻を掛けた所は、さながら山の猿同樣ではないかなどと、飄逸に笑つて、その圓座を「猿の腰掛」と名づけたといふのであらう。サルノコシカケは胡孫眼など書いて、大きい、固い、鳶色の木の子の事をいふが、こゝはあの茸の聯想で書いたのではなく、木の間に腰かけた恰好を、木の上にしやがんだ猿に見立てゝの滑稽であらう。圓座はワラウダ（藁蓋の音便）とも讀むが、こゝではエンザと讀んだのであらう。藥や菅や蘭などで渦まき形に圓く編んだ敷物である。子供になり、猿になつたつもりで、すつかりおどけて書いてゐるが、それでゐて何とも云はれぬ品位を見せてゐる所が、斯翁の俳諧上乘のユーモアである。

【たま〳〵心まめなる時は】「心まめ」は氣の進むこと、物うくないこと。こゝは多分、長明が『方丈記』に「讀經まめならざる時は、みづから休み、自ら怠るに、妨ぐる人もなく」とあるのに思ひ寄せ、其の逆を行つて一種の俳諧味を見せたのであらう。そして文章聯絡のほんとの味は（省いておいて濟まないが）、すぐ前に「空山に虱をひねりて坐す。」とあるのにつゞけて、不斷は概して坐り込んで、不精をきめてゐるが、氣が進んで、動的氣分になつて來た時は、谷へも下りる、と云つたのであらう。この「谷清水」は庵の後の崖を少し下つた處にある。

【とく〳〵の雫をわびて・・・・】此の邊文字の表

はあつさりして造作もなささうだが、味の説明はなか〳〵難い。まあ斯ういふ事であらうか。

「と〳〵〳〵の雫」は、西行法師が『山家集』の

　　と〳〵〳〵と落つる岩間の苔清水
　　くみほすほどもなき住居かな

にちなんで、吉野山なる西行庵の苔清水を思ひ寄せたのであらう。同時に、その苔清水で吟じた芭蕉自身が四十一歳の折の作なる「露とく〳〵試みにうき世すゝがばや」をも思ひ寄せたのであらう。「と〳〵〳〵の雫」は少量の泉のとツく〳〵と滴り落つる撰態の形容で、今ならば「ぽツたり〳〵と落ちる」といふところである。「雫」とある所を見ると、これは地下から滾々と湧き出でて、凹所に湛へる所の形容ではなく、苔のむした崖などから滴り落つる趣であらう。

「わびて」は、乏しきを淋しみ果敢なむ味と、それに趣味を見出だして安んずる味と、も一つ更に、それに無上の高き意味を見出だして大愉悦を感ずる味と、此の三義の重つた味の語で、一語意義重疊、この一センテンスの鍵ともいふべきものである。即ち「わびしいと思ひつゝ、その侘びしさを懷かしみ、同時に誇りを感じて」といふことで、言ひつゞけると…「ぽツたり〳〵と雫のやうに滴りおちる乏しい清水をば、嗚呼さびしいな！　しかし面白いな！　いや〳〵天下無二の味だな！　と、深い悦びを感じつゝ、汲みためて來ては、たつた一つの小さい爐で、茶を煮、飯を炊ぐ業みの心輕さよ」といふことであらう。「いと輕し」は業々しからず、負擔を感ぜしめず、細くして深い簡素至極の味をもつ

てゐること。王侯富豪が金に飽かして、多量の水を汲み、大きな鍋釜を用ゐ、すばらしい設備をした臺所で、山海の珍品を料理つては、滿堂の賓客をもてなすといふが如き貴族、政治家、實業家などに見るやうな分量本位、積極本位の趣味を向うにおいて、その反對を考へれば、此の「わびて」の本意がわかるであらう。

【はた昔住みけむ人の…】「はた」は又といふこと。「昔住みけむ人」をば、諸註概ね、前の住人、卽ち幻住老人のことと解してゐるが、さうではない。「けむ」は過去の想像で、この「人」は想像された人である。大意は、偉い人が、高尙な心を以て、風雅に住んで、屋作り什器などに數寄を凝らした後を引き受けると、先住が風雅の跡を傷けまい、後住は段劣りだ、さすがに先住は偉かつたなどと比較されまい、などいふ心配があつて、安心の出來ぬものだが、此の庵は、裸一貫の小茅屋で、さういふ先住に對する遠慮や、氣づまりや心配が更に無い、といふこと。前段からつゞけると、周圍が侘び住居に適し、家の歴史にも、窮屈な思ひをさせる分子が少しも無くつて氣が樂だといふことである。

【さるを】「然るを」で、「ところが」といふ程の意。

處はよし、遠慮のある歴史はなし、家も便利なり、此の上の慾には、此の庵の名刺標札ともいふべき額でもあればと思つてゐる所へ、願つたり、叶つたりで、名書家の扁額を得た、とつゞく味である。

【持佛一間を隔てゝ夜の物納むべき…】持佛は持佛堂の義で、持佛堂は持佛又は父祖の位

牌を安置する部屋。持佛は居室に安置し又は身に副へ持つて信仰する佛。持佛堂が一間あり、そのかげに夜具を納れるしつらへなどがあつて、一通り便利に出來てゐるといふこと。

【筑紫高良山の僧正】 高良山は筑後國三井郡府中驛の東方にある山で、山頂に式内高良神社が齋いてある。祭神は玉垂命、中世以降此の國の一宮として諸社の上に立たれた。又例の兩部混淆で、こゝに神宮寺があつて、僧正が住してゐたのであつた。僧正といふのはその神宮寺の僧正である。此の社今は國幣中社である。僧正は僧官の第一で、最初は一人であつたが、後には大、正、權の階級が出來て、その定員も十餘人となつた。

【加茂の甲斐何がし】 加茂神社の祠官藤木甲斐守敦直、能書家で書博士となつた。藤木流第三十五世。慶安二年六十八歳で歿した。

【嚴子】 子の尊稱。嚴父、嚴師などの類。

【洛に上りいまそかりけるを】 京都に上つて居られたのを の意。いまそかりは「在り」の敬語。います、おはす、などと同じ意。

【やがて草庵の記念となしぬ】 「記念」は「かたみ」と讀む。思出草といふのである。但し此の思出草は、芭蕉が、此の庵に移り住む早々、折よくも九州高良の僧正なる高德能書の上洛あり、この筆蹟を掲げたのはうれしい事であつたといふ、自分の想出草にしたといふので、曾て芭蕉が住んで此の額を掲げたぞといふ後世の記念にしたといふ意味ではない。また文致からいふと、「草庵にかゝげたり」などいへば、それッ切りで

面白くもない處を、「まんまと長い想出草となし了せた」と云つたから、風情を增したので、かういふ一寸した處に文章の妙味のあることを知らせたいものである。で、「さるを」からの大體のつゞきは、「ところが九州高良神社なる神宮寺の一如僧正、この人は加茂神社の祠官、名高い能書家なる藤木甲斐守の子息で、これも能書の聞こえ高き高德であるが、此頃丁度上洛して京都滯在中であるのを幸ひ、人を介して扁額の揮毫を願つた所、早速快諾、苦もなく達筆を揮つて、「幻住庵」の三字を書いておくられた。うれしやと、そのまゝこの草庵に於ける形見の想出草とはしたのである、」といふ意。「人をして額を乞はしむ」は翁の原文「乞ふ。」とあるのを、教科書式に合法化した他の案に從つたのであつたが、調子の方からはやはりもとの方がよいのであつた。また「人をして乞はしむ」は無論文法に合つて居るが、「人をして乞ふ」も「人して乞ふ」とほゞ同じく、「人を介して乞ふ」の意で、文法的にも別に差支なき筈である。「額を乞ふ」に改めることにしたい。

【すべて山居といひ、……さる器貯ふべくもなし】 あつさりと書いてあるが、意味深長な名文である。「之れを要するに、山中獨處のわび住居ではあり、旅行中の、少し長びいた草枕といふだけではあり、これと云ふべき由緒の調度什器などを貯ひ得る筈がない、」といふこと。「すべて」は、總括していふとの意で、「要之」といふこと。「さる器」は然るべき道具といふこと。

【木曾の檜笠、越の菅蓑】 翁は元祿元年、越人と共に名古屋を發ち、木曾路を經て信州に入り

姨捨の月を賞した。それは『更科紀行』に出でゐる。前者は其の旅の記念といふのであらう。翁はまた前に擧げた奥の細道の旅で、越後から越中越前を經て美濃についた。後者はその旅の記念であらう。二つとも前の句の「山居」「旅寢」を承けて非常に面白い。

【まれ〳〵とぶらふ人々に・・・】「とぶらふ」は訪問すると。弔ふ事ではない。「心を動かし」は悅びの爲めに動かすのか、迷惑の爲めにか、不明だが、多分遠來の疎い客の來訪に接して、またお客で安靜を妨げらるゝかと、はら〳〵するといふのであらう。而して、次ぎなる畀の無い里人の百姓話には、つい釣り込まれて、いつの間にか夕方になるといふのであらう。「宮守の翁」は八幡宮の神主のこと。

【里のをのこども】 村人達といふほどの意。近所の者の中、宮守だけを取出したのである。

【猪の稻食ひあらし、兎の豆畑にかよふ】 かういふ場合の「の」は、今の口語の「が」にあたる所で、「猪が稻を食ひ荒らしたとか、兎が豆畑にやつて來るとか」といふことである。

【農談に、日既に山の端にかゝれば】 此の「農談に」から、次ぎの句に移る味が、よくいへば微妙、わるく云へば曖昧だが、芭蕉の本意は、多分、前の「まれ〳〵とぶらふ人々に心を動かし」は、それ丈で打ち切つて「日既に山の端に」の句へは關係せしめず、唯だ宮守以下の句だけを、「日既に」以下につゞけたので、而して其の續き方は、

無邪氣な百姓話に聞き惚れてゐると、その中

に、いつしか日が西の山に沓づく・・・

といふのであらう。一寸無理のやうな續けざまではあるが、王朝以來の堂々たる大作にいくらもあるので、許さるべきことである。で、此のつゞきを現代語譯すると、かういふ事になる。

雲はまれ〳〵に遠方から訪ねて來る人があると、また安靜を破られるかとハラ〳〵することもあるが、しかし又神主や里人達が、「いやあ、コンチは！」など云つて、無造作に入つて來て、（前の疎遠な人には、「とぶらふ人々」と敬していひ、こゝには「翁をのこども」入り來りて」と馴れ〳〵しく呼びずてに云つて、隔てなき昵近さを見せてゐる。この語遣ひの微妙さに注意したい）いや、猪のしゝめが稻を食ひあらしたの、兎のやつが豆畑へ來て困るの、と、聞いたこともない、たわいの無い百姓咄に聞きとれてゐると、いつの間にか、御日樣が西の山の端近くなつてゐる・・・

【月を待ちては影を伴ひ、燈を取つては罔兩に是非をこらす】 遊び切つた、枯れ切つた、とても面白い名文です。「待ちては」「取つては」は、習慣を現はすテニヲハのつゞきで、「いつも」といふ味のついた意。「臍くりをねだつて駄菓子を買ふ」と云ふと、それ丈の意味だが、「ねだつては駄菓子を買ふ」といふと、「家の腕白め、お母アの臍くりをねだり〳〵しては、駄菓子を買ひくさる」といふ意味になつて、常習を現はすであらう。こゝも其の意。「夜座靜かに」は、前の猪、兎の世間咄の賑やかさに對照したこゝろ。「影」「罔兩」は、月に照らされて疊の上に平らに

横にうつる、比較的はつきりした影と、油火、蠟燭などの燈火によつて襖や障子に大きく薄く映し出だされた縱の微陰とを書きわけたので、その二つの陰影に別々の役目を分擔させて、月影に對しては、

たつた一人淋しく坐つてゐる中に、月が出ると、うれしや「影」といふ自分そつくりの道連れが出て來るのだ。

といひ、障子の朧影については、向ふが立つて、或ひは坐つてゐるといふポーズを活用して、

月無き夜には、燈をつけると、障子の面に、我れに好くも似た、ぼんやりした影坊子が坐り込む。こいつ怪しいぞ。一體自分が本物であらうか、影坊子が似せ物であらうか、ほんとの芭蕉桃青はこつちか、あつちか、是非如何などと、云つては無邪氣な、禪まがひの問答に思ひを凝らし考へぬくのだ。

といふこと。「罔兩に是非をこらす」は、罔兩に對して是非を考へぬくといふのであらう。まあ此の位の意味かと思ふが、また思ふに、これは或ひは芭蕉が好んだ莊子の「齊物論」の最後にある罔兩と影との問答を踏まへて、それを縮約したものでもあらうか。その問答の初には

罔兩問ㇾ景曰、曩子行、今子止、曩子坐、今子起、何其無二特操一與。

とあつて、「景」は光に照らされて生ずる人の影のこと、罔兩は其の影のまはりにちら〳〵して朦朧と見えるお供の薄影のことであるが、大意は、其の影の影なる朧影が、本影に問うて言つたことに、

「おい〳〵影法師さん。お前は今まで歩いてゐたと思つたら、もう止つてるね。今度は神妙に坐つてゐると思つたら、また直ぐ立つぢやないか。さう他の尻馬について騒いでばかり居ちやあ、仕樣があるまい。ちと特自の立前をお持ちよ。」

と、かういふと、影法師が答へて、

そんな認識不足を言ふのは止せよ。何もおれば かりが、何かに從屬してゐて、本尊の動くまゝに動くといふわけではないぢやないか。おらが本尊の人間とても同じこと、これも別に頼んだお方の主體に附きまはつてフラ〳〵するといふわけではないわな。輪を手ぐつて遡れば、おんづまりの造物主までが、その通りで、世の中は循環の相持だ。みんな自分々々各々の世界があるのさ。君、聞いた事があるだらう。昔、莊周つて奴が、夢の中で、蝶々に化つたとさ。さうすると、すつかり、あの金翅銀翼をひらめかす立派な胡蝶で、莊周が夢の中の一變體だなんてとは、少しも知らなかつたといふぜ。それがふッと醒めると、あの薄ぼんやりした哲學者づらの莊周だらう、そして今度は、今の今まで蝶々であつたといふことは、それこそ夢にも知らなかつたといふよ。さうすると、周の奴が夢に蝶々となつたのか、蝶々めが周となつたのか、更に解らないぢやないか。君はおれが本尊に使ひまはされて動く〳〵といふが、おれだつて一つの存在だ、おれの通りに人間が動くか、人間の通りにおれが動くか、そんな事が解るもんかい。

と云つた、といふことが書いてある。つまり、世間の知識者どもが、暇に任せ、知識に使はれて、何の彼のと、甲論乙駁、あつたら口に風引かせ、あつたら筆を、墨を、紙を臺なしにしてゐるが、天地同根、萬物一體、世間の物論ものいひなどいふものは、觀ずれば、みんな同じ物だよ、といふ趣意を說いたので、芭蕉は或は、此の趣意をこゝに暗示的に現はしたのでもあらう。さうだとすると、解釋にも少し手が込んで來て、月に照らされては、はつきりした影が生じ、燈火に照らされては朦朧たる薄影が出來る。その濃い影と淡い影との間にかはさるゝ齊物論式の問答に對して、罔兩の言ふ所と、景の言ふ所といづれが眞理であらうかといふ事に思ひを凝らす、といふ樣な事になるであらう。然しさう取るには大分文句に無理が有つて、これはやはり莊子流の趣意を微かに持たせつゝ、月を待ちつけると、影といふ同伴が出來て淋しさが慰められ、月無き夜には燈によつて障子にうつるぼんやりした影と對坐して、どつちが本物、どつちが似せ物、いづれが本體いづれが附屬等いふ事を考へて慰める、といふ事であらうと思ふ。

【かくいへばとて……人に似たり】こゝから一轉して、前なる「人家よき程に隔たり」の一句が暗示してゐるやうに、自分は閑寂以外には何一つ好むものがなく、俗世間とは全く緣を絕つて野の末山の奧にひた隱れに隱れようといふのではない、といふ事を說き、更に過去を懺悔して、實はそれどころではない、昔を想ふと、大冷汗の恥かしい事だらけ、一時は役人になつ

て立身したいと思つたこともあり、又一度は佛寺坐禪堂に入り込んで、天晴れ悟りを開かうなど、柄に無い事を考へた事もあつたが、みんな落第で、その揚句いつの間にか、花鳥風月の自然美に心惹かれ、同時にそれを吟詠する事に特別の興味を感じて來て、しかも、それを生活の身過ぎにして食べてまで行けるといふことになつたので、難有や〳〵と、能なし、才なし、學問なしの一浪人が、此の山水行脚風流俳諧といふ不思議な細々とした一つの業に從事して、生涯を送るといふ事になつたのです、と言つたのである。つまり單純な世捨人的の閑寂らしい事を說いた所へ、世俗道、官吏道、宗敎道といふ大きな反對の要素の數々を揚げ出だし、それを藥籠中に取り入れて、唯だの閑寂好みではない立派な風流俳諧の大道を大成したのだといふ事を歌つたので、思想趣向の進みからは、反對を取り入れた綜合の大成ともいふべく、また態度の上からは、無限の自卑抑によつて限りなき昂揚の誇りを見せたものともいへるであらう。

「やゝ、病身人に倦みて……」は、世間に心を惹かれながら世を捨てた心境を譬へたので、「やや」は「適確には譬へにくいが、まづ云はば」といふ程の味。まづ世間も面白いが、身は病む、人には飽きる、つい物くさくなつて、世間と交渉を斷つたといふやうな人の心境に似てゐるとでも云ひませうか、といふこと。

【拙き身の科】「拙き」は下手や鄙怯の意味でなく、「武運拙く」などの拙くと同じく、宿世の拙く劣れること、運命に惠まれぬことであらう。

「科」は愚昧の性を享け運命に惠まれぬ身とて、過去の長い間にやつた事とては、片端から、一種の罪とも科ともいふべき恥かしい事だらけだ、といふ謙遜の詞。

【仕官懸命の地を羨み】 官に仕へ役人となつて居る人達が、立身出世しようとては、阿諛、追從、髯の塵、袖の下、臺の上、僧侶の陷擠、眞先駈けての進出冒險など、あつたら命を的にかけて競つてゐる、その立場を羨ましい、けなるいと思つた事もある、といふ味。かういふ文句は詞の表面を美くしくして裏に恐ろしい皮肉を含んでゐるのだから、解釋に油斷されぬのである。

【佛籬祖室の扉に入らむとせしも】 佛は主として釋迦如來を指し、祖は主として禪宗の始祖達磨大師を指したのであらう。籬は土地屋敷の境に豐へ、室は特別なる居室に豐へたので、扉は籬に對して門のトビラ、室を承けてはドアや障子、襖になるであらう。佛の道を修行し、天晴れ悟りを開いて、釋尊や達磨大師に近づける程の覺者になりたいと心掛けたといふこと。「せしも」は「せしかども」の意に使はれてゐる。一種の俗に訛つた文法である。

【たよりなき風雲に身をせめ・・・】 「たよりなき」は大官高僧にならうなどいふ境涯に比べると、實に心細い、あてにならぬ風景山水の自然美にあこがれて、天下の景勝を見たい〳〵で、散々に無理をして身をせめる、又花が美しいの、鳥が可愛ゆいのといつては、その美しさ、可愛ゆさの藝術的表現に限りなく苦勞をして、といふこと。「たよりなき」その他すべて謙遜の自嘲

であるが、同時にひそかに高しとする意氣は天に冲るの概を見せて居るのである。

【暫らく生涯のはかりごと】 例の自嘲、謙抑。幸と、一寸は食つて行けさうにさへなつたので、といふ意。

【此の一筋につながる】 此の俳諧道といふ、かの細い仕事に離れかねて、生涯を送ることになつたといふ事を、簡單に味ひ深く表はしたのである。

【樂天は五臟の神をやぶり】 樂天は白樂天、名は居易、中唐の大詩人。「五臟の神を破り」は作詩に苦心して健康を害したといふと。彼れの句に「詩破二五臟神一。」とあるのを踏まへたので、微妙な詞遣であるが、無理を重ねて、多分五臟六腑の靈なる作用をすつかりそこねてしまつた、といふことであらう。

【老杜は痩せたり】 老杜は杜甫のこと。杜甫字は子美、少陵と號した。杜牧を少杜といふに對して老杜といふ。李白と並び稱せられる唐の大詩人。「痩せたり」は樂天と同じく、詩に苦心して痩せたといふこと。彼れは「語人を驚かさずば死すとも休まず」とも云つた。又彼れの友李白が、彼れに送つた詩に、

飯顆山頭逢二杜甫一、　頭戴二笠子一日卓午、
爲問緣レ何太痩生、　只爲二從前作レ詩苦一

といふのがある。李白が丁度正午時分に飯顆山のほとりで、杜甫がやつれた顏をして來るのに逢つて、「おい、どうしたんだ、馬鹿に痩せて了つたぢやないか」といふと、「何ッて極つてゐるわな、詩作の爲めに始終身をそぐやうな苦心をし

てゐるからさ」と云つたといふので、これでもえらい詩人の苦心といふものがわかる。

【賢愚文質】人の性質のそれ〴〵異なること。文は優美な性質、質は質樸な、野暮な性質。「文質」は多分論語に「文質彬々、然後君子」とあるのに思ひをよせたのであらう、而して論語のは飾りのあやと實質の素材と、といふ意味に使つてあるが、こゝはそれとは意味を異にして、樂天老杜は賢にして、我れは愚なり、樂杜の詩は詩藻豐富にして我が句は地味なり、といふ對照の意に用ゐたのであらう。文章のたちといふ意味でないことは勿論である。「ひとしからざるも」は、例の通り「ひとしくはないが」の意。

【いづれか幻のすみかならずやと】人は怪しまぬが、實は難解な面倒な句で「いづれか幻のすみかならざらん」「いづれも幻のすみかなるにあらずや」の二句を略し合ひ補ひ合はしめた變體の句作りである。かういふと怪しむ人もあるであらうが、これは『源氏物語』『枕の草子』以來、大古典に於いて慣用されてゐる句作りで、簡潔、多義、曲折を出來すための一種の省略法ともいふべきものである。大意は、かくして私は運命にあやつられ、無能無才ながら此の俳諧道に身を委ねて、花鳥風月の表現に情を勞して居るのだ、詩人歌人の此の道の苦勞は實に言語道斷なもので、白氏も老杜も、これが爲めに身を害ひ神を傷つけたと云はれる。無論、彼等は賢明、我れは愚鈍、彼等の作は華麗で彩に富み、我等のは樸々として野暮くさし、高下勝劣ひとし並には云はれぬが、しかしながら住める世は同じ

く、朝にして夕を知らぬ電光朝露夢まぼろしの世であらう、さうではないかと、いろ〳〵考へたが、結句幻の世に何の面倒な小理窟の詮索沙汰、世の煩鎖を厭うての山住みではないか、佛說禪問答のやゝこしさに失敗しての自然逃避ではないか、病身人に倦み果てた心持の昨今ではないか、さあ〳〵一切を放擲して、寢たり寢たり、といふので、

ごろり！

と横臥！　まあかういふわけだ。」といふ洒落れた心境、しやれた文句である。

【まづたのむ椎の木もあり夏木立】『源氏物語』の宇治十帖「椎が本」の卷なる薫中納言の歌、

立ち寄らむかげとたのみし椎が本
むなしき床となりにけるかな。

を踏まへたので、更に溯れば、此の源氏の歌が緣を引いた『古今六帖』の

うばそくが行ふ山の椎が本
あなそば〳〵し床にしあらねば。

にも、多少の緣はあるであらう。薫の歌は、彼れが佛道修行の先輩導師とも賴んでゐた、宇治の八ノ宮が薨ぜられて後、其の家を音づれて、宮が生前御修行の室の設備がすつかり取拂はれたのを見て詠んだので、大意は、「御無事におはさば、此の椎の木陰の御室に立ち寄つて、君を導師と賴み此の世から救つて戴かうと思つてゐた、其の椎の木陰の修行の御室が、もう主なき唯だの床となつて了つたわ」といふと。芭蕉の句は、此の歌を前受けに取つたので、おもなる含蓄は「我

が新たに住む庵のまはりには初夏の新緑が、こんもりと美しい木立を見せてゐる。殊にその中には行者が修行堂に附き物とされ、而して源氏の薫が立ち寄らむ蔭と頼んだ椎の大木も立ち交つてゐる。頼もしいことぢや。見れば第一に、有難いと頼もしく思はれる由緒の椎の木も交つてあり、我が庵をめぐるうれしい夏木立ではある、」といふのであらう。「まづ」は第一に頼もしいといふのと、暫らくはこゝで快く過ごせるといふのとの二義を兼ねたのであらう。

あつさりした句ではあるが、芭蕉の心では、之れを一番の眼目とも卷軸ともしたので、前に費した凡ての文句を此の一句で取りすべるつもりであつたのであらう。即ち此の句は、萬葉の長歌に於ける反歌の役目をなし、碑文に於ける銘の役目をなしてゐるのであらう。芭蕉は人に倦み、世を厭ひ、旅に疲れ、落ちついた安息を求めてこゝに來たのである。弟子達の親切をたのんでこゝに來たのである。來るや否やまづ周圍の初夏の景色をめでたのである。幻の世に於ける一時の安住を悦んで、「幻住庵」の三字を記念に掲げたのである。仕官、悟道といふ類の、春の花にも喩ふべき花やかな世に別かれを告げて、この黒ずんだ緑一色の淋しい夏木立の草庵に入つたのである。而して「まぼろし〳〵」と凡てを思ひすてゝ、ごろりと寢ころんだのである。

而して後

まあ〳〵此處で、暫らくは過ぐせさう。我が寂しい趣味に合つて、しかも頼もしい由緒の椎の木もある。あゝ〳〵うれしい夏木立の草

庵ではあるかな。

面白いではありませんか。

批評

以上局部々々の文の味について、委し過ぎる程委しく書いた。改まつての「批評」は、區切り段落の事を簡單に言ふ丈にとゞめて、あとは「餘訓」に讓りたいと思ふ。

此の「幻住庵記」は、想も文句も洗錬を極めてはゐるが、組織的の區切などは、極めて自由に、不即不離式に開展させてゐるので、明確に段落を切ることはむづかしい。が、大體上およそ七段位に分けて見ることが出來るであらう。

第一段は、冒頭から九頁第十行の「幻住庵と云ふ」といふあたり迄で、此の庵の場所づけ、localization. 即ち、庵の在りどころを斷つた部分である。

第二段は、「主の僧なにがしは」から、一〇頁六行目の「思ひそみぬ」迄で、住み着きの部、即ち庵の成立から此處に落ちつく迄の記事である。

第三段は、「さすがに春の名殘も」から、十一頁の六行目「萬葉集の姿なりけり」あたりまで、四方の眺めの美しい記事である。

第四段は、「なほ眺望くまなからんと」のあたりから、十二頁の四行目「草庵の記念となしぬ」までで、生活ぶりのあらましに、「附」として、生活精神の要約ともいふべき三字の扁額を掲げた記事の部分である。

第五段は、「すべて山居といひ」から「罔兩に是非をこらす」あたり迄で、主として對人、對世間の關係を記した部分である。

第六段は、「かくいへばとて」から最後に近い邊までで、いろ〳〵の境遇を經て、今の心境に落ちつくやうになつた迄の消息を約叙した部分である。

最後の第七段は、「賢愚文質」あたりから最後の發句にかけた結びの部分で、全生涯を夢幻と觀じつゝ、椎の老樹に護られた小草庵に、頼もしく一時を住まうと思つた悦びの告白である。

もつと概括すれば第一、此の庵に住むまでの由來記、第二、四方の眺望と生活ぶり、第三、草庵にゐての心境と、かう三部分位にも分けられるであらうが、七段分の方が面白く、また比較的翁の心を得たものであらうかと思はれる。

芭蕉の文章——彼れが創始したともいふべき謂はゆる俳文——の根本味が、どこに在るかといふ事は、相應に難儀な問題であるが、約していふと、二つの反對した要素を面白く調和結合させて、そこに新しい不思議な精神を吹き込んだ味である。（思ふに是れは元祿の時代精神であつたのでもあらう、西鶴の浮世草子に於ける、近松門左衛門の淨瑠璃に於ける、その根本味は皆同じ事である。）たとへば、和漢の大古典をつかまへて、それを時樣化すると同時に、現在の卑俗を捉まへてそれを古典化する。極度に花やかでありながら、同時に極度にさびてゐる。極度の簡潔味を見せながら、その間に悠揚閑漫ののんびりした味を見せる。わけの解らぬやうな文句を、勝手に切り、つゞけ、端折りながら、そこに何とも云はれぬ風がはりの味を見せる。人生を見捨て果てた、端錢にも値せぬやうな大遊びの閑文字をいぢくつて居りながら、人生の一大事以上の興味を以て人を引きつける。大卑下、大謙抑の裡に鬱然巍然たる大昂揚の存在を見せる。といふやうなわけで、とにかくいろ〳〵の矛盾した人生相、表現相が、芭蕉といふ大怪物の大手腕により、きりッと束ねられて、何とも云はれぬ、「俳」といふ特殊の風味に纏められる、といふ、これがこの翁の文の特別の味であると、私は思つて居るのであります。

餘　調

一　幻住庵記に就いて

元祿三年四月芭蕉幻住庵に入る。こゝにての獲物は「幻住庵記」なり。紀行文以外の文章として、最も長く最も力の入れる篇なり。

奥の細道の旅行の回想を、この庵にてしてゐるのは、あの旅の出發の折の浮かれ立ちたる心持にては無く、即ち旅の樂しかりし事を回想し得ずして、「奥羽象潟の暑き日に面を焦し、高砂子あゆみ苦しき北海のあら磯に躍をやぶりて」と、その絶苦のことを回想せり。あの病を冒し、遠き旅路を強ひて體を鼓舞し、又精神的には、到る所の俳席に、強ひて道の爲めと思ひて俳諧の相手をし續けし旅行なりき。

そのあと、芭蕉は身を靜地に置かむと欲せり。曲水など、彼れに問合はせて、この庵をすゝめ、その修繕もしたりし樣子なり。

來て見れば「鳥の浮巢の流れとゞまるべき蘆の一もとのかげたのもしく……いとかり初に入りし山の、やがて出でじとさへ思ひそみぬ」此の上なき滿足を感じてこゝに籠る。時はあはれ深き晩春初夏の交。芭蕉非常に上機嫌になり、「木つつきのつゝくともいとはじなど、そゞろに興じて、たましひ吳楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ」、ひろ〳〵と心遙かに一點のむすぼほれなく、解放されたる、所謂心ゆくといふ感その儘に、こゝに表はる。讀む者また湖上初夏の風に立つ感あり。

それより景を詳しく叙し來る。

「山は未申に……」と、先づ身のまはりの大體を叙し、そこを對句として、さて遠景、山々より、視線を地に落して「から崎の松」、それより「城あり」と膳所、「橋あり」と唐橋と、段々近く目をつけ來り、短句二句、稍長き句一句と、愈ゝ近く、なほ身に近く、今度は聲を寫し、最後に長き一句を置き、見るものと聞くものとを共に叙し、しかもその聞くものは歌聲の如く、稍ゝ隔たりて聞こゆるものならず、耳をすまさでは聞こえぬ水鷄を叙し、最も身近のこの叙述にて、美景の總てを終はる。こゝの調子、感興と全く併行、意到筆隨のところ、珍重至極なり。

それより更に東北に、最も目につく、特色ある三上山より、東の方へ弧を畫きて山々につきて叙す。例の最後に「黑津の里」と里を寫し、それを最長句とす。

而して山々を列ねたる勢を受けて、更にうしろの山にはひのぼり、といひ來つて、こゝより幻住庵の生活を寫し出だし來る。山に登ることより、谷に下ることをいひ、それは炊ぐ爲めといひて、それより庵内具無きを叙す。而してそれより庵の間取を一寸書き、幻住庵の額の由來を書く。具なし。中に僅に具あり。それは檜笠菅蓑なり。而して客は宮守、里の男、彼等との話に日暮ると記して、生活叙寫の結びとなす。「かくいへばとて」高くとまるに非ず。「やゝ病身人に倦て世をいとひし人に似たり」云ひ得て妙を極む。さて「つら〳〵年月の」よりの告白は、自然の愛の爲めに、悟りの道に行き得ず。風雲花鳥、それは「あ

らはれ」にて、その奥に物あり。その物ある事は我知る。所々は見たることもあり。されどそれに縋り行くことは如何にしてもまだ出來ず。「つながれ」て了ひたり。

そも〳〵歌の道たる、第二義第三義なり。その爲めに支那の歌人樂天も老杜も苦しめり。我れもしかなり。「賢愚文賢の・・・」これは歌につきて云へるか、或は佛籬祖室に入りて悟りぬく人も、さる方に行かぬ人も、と云へるか。前者の意味ならば芭蕉のいふ所一點の非難すべきなし。後者の意味とせば、不自然なる安心を自ら強ふることにはならずや。

奥の細道の、時に漢に偏したる所ある、とは異なりて、全篇漢に偏せず、撰古に偏せず、よく漢を驅使して、文の勢を引締め、よく和を體して文の流をゆるやかにし、紛々錯落、不朽の名文を成し得たり。目にて讀むべき文なるのみならず、朗々誦すべき文なり。

今、庵址を訪はむとする人は、「國分八幡」といひて尋ね行くべし。石山村大字國分なる八幡宮なり。その傍に庵址あるなり。勢田の唐橋の眞向ひを、右(西)に入る、田甫、人家少しある所を、だら〳〵上りに越え行けば、鳥居ある所に出づ。そこより暫く行きて山にかかる。まさに「三曲二百歩」なり。

椎の木はあまた茂れど、その爲めに今は眺望なし。されど庵前庵後の樣、今なほこの文の註釋とするに足る。(沼波瓊音氏)

二　庵の種々消息

幻住庵は、芭蕉翁が、元祿三年の春の末から秋まで住んでゐた所で、江州石山の奥にある。元祿七年の十月翁が大阪で歿した後、其角はじめ諸門弟が態々此の幻住庵を訪うて、

木がらしや何を力に吹く事ぞ　曲翠

腰打て木葉をつかむ別れかな　正秀

まぼろしも住まぬ嵐の木葉かな　其角

といふ如き句を詠んで、追慕の情を叙したのを見ても、翁がいかに此地を愛して居たかを察すべきである。翁の歿後七十九年に當る明和九年に、五升庵蝶夢が、此地に石を建てた時の記には次の如くしるしてある。

いにしへ祖翁の住み給ひし幻住庵は石山の奥、國分寺と申す宮山なり。國分寺を離るゝこと二町あまりにして、細き谷河をわたり翠微に上ると三曲二百歩の上に、八幡宮わたらせ給ふ。その宮の傍、左の方に平かなる地なんその庵の跡なりける。東は石山を打越して遙に田上山、さゝふが嶽聳え、黒津の里の網代守が家も名殘なく見え、南は岩間袴腰の山々ならび、北は三上山の富士の佛にかよひたるも、日枝比良の高嶺の湖水にうつれる影も、辛崎の松の霞こめたるも、膳所の城の斜なるも、勢多の橋の横はれるも、蜆とり鮒ひく舟の行きかふも、西に千丈が嶽の名に高きまでも、庵の記に書きつらね給ひけるにつゆ

たがはねど、その庵はいつの世にか破れうせにけん、一つ柱の朽ちも殘らず、三の徑の跡だにも見えねば、さだかに爰ぞと知れる人なし。たゞその世の形見とては、先たのむと口ずさみ給ひし椎の木立いと暗う、みづから炊きてとく〳〵の雫をわぶと書き給ひし清水の流れ絶えず、うしろの谷陰の木の葉の下に流る。また石をあつめて法華經を書寫し埋み給ひし經塚とて、かたはらの岨に小石の堆く殘れるのみ。さばかりやがて出でじとさへ思ひそみ給ひける因緣の地の、かたなくなりなんを見るに心憂ければ、その宮守の翁、里のふるき人をかたらひてその跡を尋ねとひ、かの峴山に碑を建てし心と同じく、一の石を建てその庵のあとを世に知らしめ、むかしを慕ふ後の好士に墮涙のおもひあらしむ。（饌夢和尚文集）

斯く風景絶佳の所であつたから、翁も久しくこゝに落ちついて居たいと思つたのであらうが、何分にも病身のことであるから、冷氣になると共に山奥の住居は堪へ難くなつたものと見える。されば門人牧童への書面の中にも、

拙者儀山庵秋至り候ては、雲霧痛み候て病氣に障り候故、近日出庵いたし名月過にはいづかたへなりとも風にまかせ可申と存候。去年遠路につかれ候て下血など度々はしり迷惑致し候て、遠境羈旅不叶候間、東の方ちかくへそろ〳〵とたどり可申とも存候。

といつてある。東の方とは江戸のことであらうが、久しく住んだ深川の地もさすがになつかしく思はれたことであらう。勿論最初に曲水と正秀とが骨を折つて幻住庵の手入れをした時にも、翁は正秀へ書を寄せ

て、

粟津草津之事先は御深切の至忝く奉存候。兎角拙者浮雲無住の境界大望故、如此漂泊いたし候間、其心に叶ひ候樣に御取持奉願候。必しもこれにつながれ心をつくし過ぎざるやうの事ならば、いかやうとも御指圖可忝候。しばらく足のとゞまる所は蜘蛛のあみの風の間と存候。

と云つた程であるから、此の草庵に久しく足をとめようとは誰れも豫期して居なかつたことであらう。しかし谷川の石を拾つて一石に一字づつ法華經を書寫し、これを埋めて經塚を築いたといふ事實によつて見ても、翁が此地の風光に深く心を惹かれたことは想像するに餘りあるわけである。

元祿三年の秋もすぐる頃は、石山の奥の冷氣に堪へ難くして幻住庵を去り、粟津の無名庵に移つた。此處は琵琶湖の南で頗る暖かい所であるから、秋冬を過すには至つて適當であつた。翁は元來虛弱であつた上に、持病の痔疾にいつも惱まされて居たので、五十に足らぬうちから鬢も髯も白く、全くの老人であつたやうである。「頃日寒氣故痔病散々、神以て氣分重く御座候」といひ、「此中に手しびれ候ゆゑ筆蹟を麁末に認候」とあるは元祿四年四十八歳の正月に伊賀へ遣はした消息の中の語である。老衰の狀まことに悼むべきである。此年の春は京都に遊び嵯峨の落柿舍（去來の別墅）に暫らく滯在し、又無名庵に歸つたが、十月に入つて江戸へ立つた。（小林一郎氏著『芭蕉句集評釋』）

三　芭蕉の事

要旨

芭蕉の發句を中心として、その人物や思想、趣味の中心部を說明しようとしたのである。本來隨筆的、斷片的に思ひ出づるまゝを書いたもので、要點は大體上欄に摘記してあるが、多少委しく纏めて見ると、

一、芭蕉は自身「漂泊の思ひやまず」といつてゐる。いかにも芭蕉の一生は旅行者、漂泊者の生涯であつたので、彼れを知らうとする者は、先づこの言葉の眞意義を摑まなければならない。

一、漂泊は芭蕉の心を活かした。彼れは漂泊に徹することによつて、一歩々々と動搖の上に靜坐する精神的の生活を創造した。

一、芭蕉は飽くまで日常生活に立脚して立派な發句を生んだ。そしてその句作が象徵的な境地にまで至つてゐるのは、幻想を抱いた詩人であつたからである。

一、芭蕉の發句には極めて感覺的な所があり、しかも極めて複雜な感情をよみ込んでゐる。

一、芭蕉の發句は極めてよいユーモアを有つてゐる。

一、芭蕉は子供を注意して見よと敎へたといふが、彼れの作には溫い童心の溢れたものがある。

一、芭蕉は孤獨に浸り切つた。そして寂しさを主とし友として、涙の多い五十年の生涯を送つた。

一、芭蕉に解りにくい句の多いのは、物を言ひ切つてしまはないためであらうが、或は芭蕉自身がさういふ解りにくい人であつたからであるかも知れぬ。

一、芭蕉の旅情を詠んだ句に、彼れが詩人としての特色が最もよく現はれてゐる。

前課に對する聯絡の關係は、云ふ迄もなく自然に出來てゐるので、當人自身の作によりその人を知つた後に、隣接して、その人物や作に對する他の批評を聞かうといふのである。

解題

島崎藤村。小說家、詩人。名は春樹、藤村は號。明治五年二月、長野縣西筑摩郡神坂村に生れた。明治二十年明治學院に學び、二十七年北村透谷、馬場孤蝶、戸川秋骨等と雜誌「文學界」

を創刊して、始めて文壇の人となつた。後仙臺の東北學院に教鞭を取つたが、三十二年信州の小諸義塾に赴任し、七年間そこに居た。この小諸時代に詩集『落梅集』、隨筆『千曲川のスケッチ』を書き、ついで『藤村詩集』(合本)を出した。小說は、三十四年に試作『舊詩人』を書き、ついで『水彩畫家』を書いたものの、まだ小說家として認めらるゝに至らなかつたが、小諸を去つて東京に移つた三十八年に『破戒』を出して、一躍大名を成した。次いで『並木』を出し、四十一年には『春』、四十三年には『家』の二大作を出した。大正二年佛蘭西に遊んだが、同五年七月歸朝して『新生』、『嵐』等を書いた。同十一年には『藤村全集』が出た。尙ほ彼れの感想隨筆紀行には『新片町より』『平和の巴里』『戰爭後の巴里』『海へ』等がある。

左に高須芳次郎氏の『日本現代文學十二講』から、藤村論の中の一節を引用する。

藤村はかうして二大長篇(春と家)に於いて成功した。同時に彼れは短篇一つを書くにも輕卒な事をせず一筆をも苟くもせぬ風を示した。『綠蔭叢書』第四編として出した『微風』の中にある『出發』『突貫』其の他の短篇なども、皆緊張した心持で書かれた佳作である。が一面から見ると、名人肌のために餘りに凝り過ぎるといつたやうなところがあつた。文章が餘りに彫刻的にキチンと纏り過ぎて、何となく む者に窮屈な堅苦しい感じを與へるやうなところが、既に此の頃にきざして居た。

小說家としての藤村を最もよく知つたのは中澤臨川であらう。臨川は藤村を評して日本のツルゲエネフだと云つた。それは詩人たると同時にリアリストたる事、平明に人生を實寫して「眞」を摑むと共に其の一部を感情で補つてゆく事などが、ツルゲエネフと共通してゐるからである。藤村は想よりも文に長じた人であるが、それを彼れ自らも知つて、徹底的に人生の研究者乃至從軍記者として押通さうとした。そしてある程度まで其の目的を達した。彼れが「藝術家となる前に人たれ」と云ひ、「すぐれた文學は生その儘に物を見得るといふ時に產れたものであることを忘れてはならぬ。」と云つたのは、其の邊の用意に疎かでなかつたことを證するものである。要するに藤村は優れた技巧家で印象派的自然主義の代表者である。

釋義

【旅人の生涯、漂泊者の生涯】 廣い意味では漂泊者をも旅人の一部と見ることが出來るであらうが、狹い意味でいふと、「旅行家」は家を成し職を持つてゐる者、卽ち一定の場所に住み、一定の生業をもつてゐる者が、暫らく家を離れて他鄕他國に遊ぶのをいふので、「漂泊者」は家を成さず職を持たずして、處定めずあちこちと流浪する者のいひである。卽ち先づ「さすらひ人」「ルンペン」ともいふべきであるが、ルンペンでも其の時々に多少は何等かの仕事を持ち、また持たうと願ふのが普通であるのに、芭蕉は、俳諧がたま〳〵身過ぎになつたといふだけで、謂

はゆる生業を持たず、又持たうともしなかつた。住所とても、一時の足だまりとするだけで、丁度西行法師が氣に合つた所にだけ長逗留をしつつ、草の庵を結び捨て結び捨てゝ諸國を遍歷したやうに、又波に漂ふ小舟が、風の吹きまはしで或る處に暫らく泊り〳〵するやうなものであつた。こゝに目を着けて、芭蕉の生涯が旅行者の生涯であつた、のみならず更に進んで漂泊者の生涯といふべきものであつたと、芭蕉自身の用ゐた味ひ深き語を用ゐて批評した所が、此の作者の眼識といふべきであらう。

【漂泊の思ひやまず】『奥の細道』の冒頭に「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず」と書いてある。「道の記」は道中の記錄といふこと。旅行記を意味する古語で、こゝでは『奥の細道』のこと。

【芭蕉に行かうとするもの】芭蕉に心を向けて其の心持を理解し、或は芭蕉式の生活に生きようとするものといふ程の意。

【言葉の光】譬喩的、象徴的な表現で、その言葉の趣、力が發して一道の光明を現じてゐるといふこと。

【やがて死ぬの句】元祿三年の夏、金澤の人秋の坊が幻住庵を訪ねて來た。芭蕉は喜び迎へて一夜を俳談に興じて、「我が宿は蚊の少なきを馳走かな」と詠んだ。「やがて死ぬ」の句はその翌日

秋の坊を麓まで見送つて得た句で、「無常迅速」といふ前書がしてある。蟬の壽命は僅かに三日といはれるほどで、如何にも短命なものであるが、あの力強く陽氣に鳴きつゞけてゐる所を見ると、明日にも死にさうな樣子は更に見えないといふと。漂泊者がはかない身を持ちながら、世の無常迅速をも知らぬげに、旅から旅へとさすらつて、その時〳〵の生を樂しんでゐるのが、丁度それに似てゐるといふのであらう。「精神の光景」は一寸妙な言葉だが、英語の spiritual scene といふやうな味で、「漂泊者の漂泊に生きてゐる心持は丁度此の通りのものさ」といつて、かう具體的に指摘されると、すつかり打たれて、ほろりとする、といふやうな意味である。

【霖雨】リンウ。長く降り續く雨。ながあめ。ここは梅雨期に降り續く雨のこと。

【さうでなくとも】梅雨以外にもといふ意。

【日光と、霖雨と、氾濫と、風と、濕氣と、地震と—斯う數へて來ると】何と、何と、と、前に列擧したのを、列擧したまゝ續けて「……地震とを數へて來ると」と云はずに、「と、と、と」と中止し、それを一緒に「—斯う」と括るから、纏まつて、力強く、面白くなるので、修辭學に謂ふ括進法の味である。圖解すれば

……日光と
……霖雨と
……氾濫と
……風　と　斯う數へて來ると
……濕氣と
……地震と

かうなるので、長い列擧の後を締め括るには非常に效果的な詞姿である。作文や演說の上の注意として敎へておきたい。

【自然で無常迅速の思ひをそゝらないものはない】 自然は英語の nature 卽ち天地、自然現象のこと。「自然で」は自然にしての意。無常迅速は佛敎語で、一切の物は電光朝露のやうにひまもなく生滅變轉して曾て常住不變のものがないといふこと。「そゝる」は唆るで、誘ふこと、あれが見えぬのか、これでも氣がつかぬのかと、しきりに刺戟を與へるといふこと。雅言の文章に改めると、「吾等の周圍に於いて親しく見る自然現象にして無常の世相を悟らしむる刺戟とならざるものなし」といふのである。これについては、本讀本卷五、二五課「人間生活と自然」を參照されたい。

【深川の大火】 天和二年の冬、深川六間堀なる芭蕉庵が燒失して、芭蕉は辛く身を以て逃れた。そしてこの火災は芭蕉をして、猶如火宅の悟を深くし、一所不住の決心を堅うせしめた。前に引いた『奥の細道』の「予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれ、漂泊の思ひやまず」も、恐らくこの頃の事を指すのであらう。「旅人と我が名呼ばれん初時雨」と詠んだ芭蕉の生涯は、この頃から開けてゐるやうに見える。

【精神上の旅人】 肉體上の旅人に對した比喩で、芭蕉が肉體的には處定めずあちこちに流浪してゐたやうに、精神的趣味的にも、常に崇拜する人を定めずして、いろ〳〵の詩人歌人の間を飛び移つてあるいたといふこと。今、西行國に居

るかと思ふと、今度は定家鄕へあこがれ行き、次ぎには萬葉州に行き、今度は海を越えて李白が島へ、杜甫城へ、そして又寒山寨へといふ風に、始終あちこちと目的の人をかへて音づれたといふ譬。作者の面白い思ひつきである。

【西行】 本抄卷八、第二十三課「山家と金槐」及び本卷第一三課「紫式部と源氏物語」參照。

【定家】 歌人、俊成の子、爲家の父、後鳥羽天皇の親寵を得、元文の初年勅を奉じて藤原家隆等と『新古今集』を撰み、貞永年間後堀河天皇の詔を奉じて『新勅撰和歌集』を撰んだ。仁和二年歿、年八十。家集に『拾遺愚艸』『拾遺員外』がある。日記を『明月記』といひ、歌學の書に『詠歌大概』『秀歌大體』『顯註密勘』『每月鈔』等がある。

【李白、杜子美】 本卷第二〇課「本阿彌光悅」の部參照。

【寒山】 支那唐代の隱士、天台始豐縣の西北七十里に隱れ、巖窟を以て住居とした。常に國淸寺に庖厨を司る拾得と交遊したので、世に「寒山拾得」と並べ稱せられた。深く佛敎の哲理を味はつてゐたが、その言行が常規を逸するので、時人は狂夫の名で呼んだ。寒山拾得は後世畫題として用ゐられ、之れに關する和漢の名家の遺作が多い。その詩は寒山詩と呼んで禪味と野趣とを以て喜ばれ、豐干、拾得の詩と併せて三隱集の名がある。

【動搖の上に靜坐する精神的の生活】 あの詩人から、此の詩人へ、彼の人から此の人へと、始終河岸をかへて渡りあるきながら、其の間に於いて大地震に逢つてもビクともせぬ、しつか

りした自家特得の立前を築き上げたやうに見える、といふこと。

【漂泊は芭蕉の心を活かした…】好きな物を見せると、眠つた心が目をさますといふ。すべて人は性に合つたものに出逢ふと、心がピン〳〵と活きて來るものである。芭蕉の心は漂泊にあこがれた、從つて漂泊は彼れの心を躍らし、彼れの句に命を吹き込んだのである。けれども好みに驅られてはつい無理をするもので、殊に生來が弱く、持病に痔疾を持つてゐた彼れは、漂泊の旅をつゞける間に、少なからず身を傷めたことであらう。

【奥の細道の旅】芭蕉四十六歳の春、元祿二年三月二十七日に江戸を發つて奥羽北陸を巡り同年九月三日大垣に着し再び伊勢へ出立するまでの旅行をいふので、その間諸國の山川を跋渉し、名勝古蹟を尋ね、佳景を愛で、歌枕を探つて吟詠をとゞめること五十一句、歌仙を卷くこと二十七回、この間の紀行が卽ち『奥の細道』である。

【旅くせやの句】不自由な轉々の旅の間に得た寢冷えの癖が、此の名所の草庵に落ちついてもう半年からになつても、秋になるとまた起こつて惱まされるとであるといふ意。旅に得た病が癖となつて、暫定の宿を得ても、秋になると無殘や山氣に襲はれて、また寢冷えに惱まされるわ、といふやうな味。

【この旅癖】寢冷のこと。わざと廣く云つたのが面白いのである。但し寢冷と同時に、冷えに伴ふ下痢の事などをも匂はしたのであらう。

【大阪の道修町】「ドシヨウマチ」と讀む。芭蕉が元祿七年九月二十九日の夜半發病して、道修町の花屋仁左衞門の離座敷に移つたのが十月三日、こゝで惟然、支考、去來等の手厚い看護を受けたが、五十二歳を一期として遂に世を去つた。

【日常生活の細目】「細目」は英語の details などを思ひよせた詞遣であらう。こゝの日常生活は貴族大身の生活ではない、下流細民の、その日〳〵の生活の細かしい消息といふこと。

【海士の家はの句】「いとど」は「こほろぎ」を意味する京都附近の方言。旅中の觸目をそのまゝ詠んだので、細民の生活に通じて居ればこそ、かういふ瑣末な事物を見のがさぬ注意深さがあればこそ、かういふ句が出來るのであるといふこと。漁師町を通ると、海人の軒先などに、捕つて來たばかりの小蝦が笊の中に入れてある。そのピン〳〵はねてゐる處にまじつて、いとゞの蟋蟀（こほろぎ）までが、一しよになつてピン〳〵やつてゐる。こいつは面白い、漁師町でなければ見られぬ圖だわい、といふのであらう。「家は」の「は」は、海人の家では餘所で見られぬ光景が見られるといふので、特に取り出した「は」である。小海老は活きてピン〳〵はねてゐるのであらう。「いとゞ」はその漁師町の方言を取つてこほろぎの事を云つたのであるが、同時にかすかに「いとゞ面白し」なか〳〵面白いといふ意をも匂はしたのであらう。

【さすがに芭蕉は囚はれて居なかつた】「さすがに」は、芭蕉ほどあつて、いかにも、といふ位の味。「囚はれてゐなかつた」は、俳諧の規則

や習慣に束縛されて、誰れも歌ふやうな事を歌はず、規則、習慣を超絶して自分獨特の句を作つたといふこと。しかも架空な事は歌はず、どこまでも實生活を離れず、誰れも留意しない日常生活を材料として、そこから立派な獨創の作を築き上げたといふこと。

【象徴的】 英語の symbolical にあてられた譯語、平たくいふと符牒的といふ意味で、作中に現はす事物をば、更に深き高き意義を暗示する符號として取扱ふこと。青い鳥をさがし廻る子供に於いて理想を追ふ人間の姿を暗示し、檻の外に出たがる獸に於いて自由にあこがれる人間を暗示する類である。尙ほ本書第十五課「庭園に現はれたる我が國民性」の註參照。

【幻想】 英語の vision を思ひ寄せた詞であらう。空想をほしいまゝにしてまぼろしを見ること。本書第一九課「本阿彌光悅」の註參照。尙ほ此の「象徴的」「幻想」の此處に用ゐられる本義については、次ぎなる三句の解釋を參照せられよ。

【あやめ草の句】 『奥の細道』に出てゐる句。大體の事情は、芭蕉は仙臺で畫工加衛門と知合になり、その案内で近傍を見物したが、別かれに臨んで加衛門が紺の染緒をつけた草鞋二足を餞した。これが餘程芭蕉の氣に入つたものと見えて、「さればこそ風流のしれもの、爰に至つて其の實をあらはす」と、上機嫌のユーモアを飛ばして、さて此の「あやめ草」の句をつゞけてゐる。芭蕉が仙臺に入つたのはあやめ葺く日の五月五日で、それから四五日逗留したと書いてあ

るから、此の句は多分八九日の頃の作であらう。で、大意は草鞋の緒が菖蒲の花の色の紺とは洒落れてゐますね。これでは家々で軒端に葺くあやめ草を、勿體ない、足に結はへるといふものですわ。旅に、季節に、相應はしいおはなむけを、いや難有う〳〵といふ意。

【よく見ればの句】 江戸深川、芭蕉庵での作。現はれた意味は、おゝよく見ると、薺が白い花を見せて居るわ。何も無いと看過ぐしてゐた垣根のところに、といふのであるが、よく考へると、その中に、見る影もない花に動いてゐる造化の活機、微小の動植物も皆持つてゐる存在意義、春光の普遍、といふやうないろ〳〵の深い意味が聯想されて來る。象徴的とは、一つはこんな所を指したのであらう。

【我がきぬにの句】 『野晒紀行』の末部に、「伏見西岸寺任口上人に逢うて」といふ地の文があつて、次ぎに此句が書いてある。任口上人は藤堂家の一族、西岸寺の住職で、高德の聞えがあつたばかりでなく、季吟門の俳人で、風雅の嗜みもあつた。芭蕉は今桃の名所の伏見に遊び、そこの名物高德の任口上人にも逢つたので、あゝうれしいは伏見、處の名物桃の花の雫よ、わが着物にしみよかし、その花色衣によつて、長く桃花を偲ぶであらう、同時に長く高德の上人をしのびたいと思ふものを、といふこと。言葉の上では桃の花の雫せよと云つてゐるが、裏には上人の思出や面影よ、我が心に沁み込んで、長く上人を偲ばしめよといふ本意を暗示してゐるので、かういふ句の作りぶりを象徴的の境地に

進めたとは云つたのであらう。

かう味はひて見ると、「象徴的」「幻想」といふ事の意味も自然理解されて來るやうに思はれるが、尙ほ改めて云ふと、若し平凡作者が月並に歌ふならば、唯だ、「御厚意のきれいな草鞋を穿いて行くのがうれしい」「なづなの花がやさしく垣根に咲いてゐる」「高德上人の慕はしさよ」と、それだけ歌ふべき所を、芭蕉は目の前に在る物を緣として、眼前には無い大きな意味の事物を幻影に描き、而して目の前の小さい物を、ほんの符牒に使つて、遙かに大きい陰のものを暗示させた。例へば、紺の染緒の草鞋によつて、紫の菖蒲の花を幻想し、「足に結ぶ」と云つて、世間では軒に結ぶ折からに、といふ意を見せたのは、自分の深い感謝の念と、五月初旬の世間の光景とを象徴したのではないか。現はれたのは唯だ垣根に咲くなづなの花であるが、「よく見れば」の一句で、造化天行の活機が幻の樣に想像され、そして、その深い心持が冥々の裡に暗示されて居るではないか。文句の表面は唯だ花の露にひたる事を云つて、高僧に對する親炙想望の心持を空想し暗示したのも同じ意味であらう。また「細かに日常生活を味はつたばかりでなく幻想を抱いた詩人」といふのは、前に「日常生活の細目に通じた詩人」と云つたから、それなら唯だ目の前にある生活狀態を細かに知つてゐるばかりかといふと、さうではない、眼前實際の現象とはすつかり掛け離れた、恐ろしく飛躍的な空想をも描く人であつた、といふのである。

【芭蕉の感情の優しさが私達の心を捉へる】此

の三行は前の三つの發句を承けたのであらう。次ぎなる「牡丹」「白げし」の二句に對しても當てはまらぬことはないが、此の二句は、やはり次ぎなる感覺的香氣の材料として提出されたものと見える。感情の優しさといふのは、紺紐の草鞋を穿くとては「菖蒲を足につける」と云つたり、垣根の下に世に捨てられて、小さく咲いてゐる雜草の花を愛したり、花の雫で着物を染めたいと云つたり、感情の動きがいかにも細かく優しくて、世ずれた處の更にない處女のやうだといふのであらう。

【牡丹蕊の句】 同じく『野晒紀行』に「二たび桐葉子がもとにありて、今やあづまに下らんとするに」とあつて、次ぎに此の句がある。芭蕉は貞享元年の冬尾張熱田の門人林桐葉の家に杖をとゞめたが、翌二年東國下向の時に詠んだ句で、大意は、牡丹の大きい花びらに圍まれて、花粉をもつた長いしべが立ち揃つてゐる。その中に深く分け入つて、好い氣持で、花粉の露を吸つてゐた蜂が、蕊を分け出でて名殘り惜しく立ち去る心地、それが私の今日のお名殘の心地です。お心づくしの厚遇に醉うて立ち去りともない友の家を、强ひて立ち出づる名殘の心地です、といふこと。感謝の心、名殘惜しい心を、實にこまやかに言ひ現はしてゐるが、單に芭蕉自身の情を現はすのみならず、牡丹のかをり、蜂の動作を、今鼻に嗅ぎ、まのあたり見るやうに思はれるので、さてこそ感覺的とは云つたのであらう。而して文句がいかにも生き〳〵して、牡丹の香氣が鼻に迫つて來るやうに思はれるので、

香氣を放つとは云つたのであらう。

【白げしにの句】同じ『野晒紀行』の中、「杜國におくる」と前書して、今の「牡丹蕊」の句の前にかゝげた句である。貞享元年、杜國が名古屋にゐた頃で、熱田の桐葉亭に立寄る前に、名古屋の杜國亭に立寄つた時の句である。句意の表面は、白芥子の花にとまつた蝶が、飛び立つ時に、片羽根を置いて行つたといふので、別れともなさに、生身の一部を切り取つて記念に留めた、といふ切なる心を「もぐ」「かたみ」の二語で現はしたのであらう。芭蕉は杜國を白げしに、自分を蝶に、而して此の句をもぎ取つた翅に比況したので、眞意は、蝶が白げしの花びらに抱かれて好い氣持で花液を吸つてゐる、丁度その樣に、杜國から暖かい介抱を受けて、厚意に酔うてゐた、その厚意を振りもぎつて行くのは、何とも云はれぬ切ない氣持である、どうぞ、形見に詠みおく此の句を、蝶が形見の翅とも思つて下さい、といふのであらう。而して此の句を讀むと、別れを惜しむ濃やかな心情が偲ばれるのみならず、けしの花に蝶の戀着してゐる樣子が、まざ〳〵と見えるので、感覺的とは云つたのであらう。杜國は芭蕉に大分親しまれてゐたと見えて、諸種の紀行文の中によくその名が見え、嵯峨の落柿舍に滞在中には、杜國に逢ふ夢を見たと書いてある。杜國は後に伊良子崎に流されてはかなく身を終はつた。

【濃情の域・感覺的の香氣】「濃情」はこまやかな、行き屆いた優しい心持といふ意味で、こつてりとあくどい情といふのではない。大體は無

形な心情の動きを微細に表はすのみならず、それを讀むと、その活き〳〵した容子を、目に見、耳に聞き、鼻に嗅ぎ、口に味はへる樣な心地がするといふ事。域は領分、限界。感覺は眼、耳、鼻、舌、身の感ずる形、色、音聲、香氣、味等の事。

【良寛】もと越後長岡の藩士。小川作左衛門といつた。二十歳の時、病に託して致仕し、剃髪して京都地方に遊んだが、後長岡市外の國分山に草庵を結んで、子供のやうな、乞食のやうな、仙人のやうな、藝術家のやうな、悠々自適の生活を送つた。毬つきを好み、歌をよくし、詩をよくし、書をよくしたが、いづれも彼れの特別な性格のあらはれで後世に珍重されてゐる。思ふに「感覺的」或は「複雜な感情の陰影」等の點から、二人の作を批評することは相應にむづかしいことであらう。しかし、とにかく良寛は芭蕉に比べて、その生活にも作品にも感覺的の分子が少なかつた。右に擧げた芭蕉の句に對して、良寛の次ぎの歌を比較して見ると、凡その趣がわかるであらう。

山里に櫻かざして思ふどち遊ぶ春日はくれずともよし。

紀の國の高野(たかぬ)のおくの古寺に杉のしづくを聞きあかしつゝ。

山かげの岩根もり來る苔水のあるかなきかに世をわたるかな。

【複雜な感情の陰影】單に喜、怒、哀、樂などいふ大まかな事でなく、「怒髪冠を衝く」とか、「涙袂をうるほす」とかいふ丈でなく、どの樣な場合にどんな風に腹立つたか、悲しんだかといふ、

其の場合でなければ顯はれることの出來ぬやうな、細かい心の動きの樣子を見せるといふこと。例へば今迄溫かい待遇を受けて、氣持よく過ぐしてゐた家を辭する心持を、牡丹の花瓣の中から蜂の這ひ出でる心地に譬へるやうな事を指すのであらう。

【感覺にまで迫る】 抽象的に、無形に、心で味はつてゐるだけでなく、まざ〳〵と目に見るやう、耳に聞くやう、鼻に嗅ぐやうに感ぜずには居られぬといふと。「迫る」といふは、まだ見るやうな聞くやうな心地がせぬか、これでもか〳〵と、責め立てられるやうだといふ味である。

【感銘】 作品を見て受ける心の感じ、印象とほゞ同義であるが、印象といふよりも、やゝ主觀的の味が濃くなるであらう。ある感じを深く心の上に記しつけられた其の跡のこと。

【人格…批評の行きどまり】 「人格」は俗に謂ふ人柄で、人々名々の持前立前の事である。長い間にわたる人々の思考、擧動、行爲の習慣の堆積した結果に出來た其の人の中心性質をいふので、廣い意味では、あらゆる人にそれ〴〵の性格即ち人格があるのであるが、狹い意味では美しい立派な性格の事のみを言ひ、「あの人は人格者だ」などいふ事もある。こゝは人々銘々の性格といふ意。「人格」の一語を批評の行きどまりと云つたのは、文章がどうだ、觀察がどうだ、など云つてゐる中は、其の次ぎ、その奥と進み入る事が出來るけれども、「あの男の人物人柄が現はれたのさ」と云つて了はれゝば、もう最後的、決定的で、何とも論の進めやうがなくなる

といふことである。

【俳諧】 もと誹諧とも書いたが、芭蕉の流派では俳の字を用ゐる事になつて、其の後すべて俳諧と書くことになつてゐる。此の語、由來は漢土で、彼國では好笑遊戯の詞の意味に用ゐられたが、我が國でも同じ意味に用ゐられて、まづ王朝の『古今集』に「誹諧歌」といふ一種別が設けられた。滑稽なる和歌の意味である。さて又短歌の上の句下の句を別人が詠みつぐ連歌といふものが、已に萬葉集時代から行はれ、もとは上の句下の句の二鎖から成るのを常としたのが、段々鎖の數を多くして五十句、百句、千句などの長い鎖を詠みつぐやうになつた。そして之れを「連歌」と呼んで多くは和歌まがひの上品な事を歌ふのを常とし、また滑稽的な品位の下つたものよりは、和歌に近い立派なのを本格として尊んだが、室町の末に山崎宗鑑が出で、

あらぬところに火をともしけり。
いかにして螢の尻は光るらむ、
春の野に慇懃講のはじまりて、
まづつく〴〵し袴をぞきる。

といふが如き滑稽本位の連歌、殊に秀句張りの言ひ懸けに中心興味を置く連歌を詠じ、それが「俳諧の連歌」(滑稽趣味の連歌といふ意)と稱せられて、一世を風靡する樣になつた。松永貞德が

腹筋をよりてやわらふ絲ざくら。
海棠かいや左樣にはなしの花。

の如きを始め、北村季吟、西山宗因等概ね此の流風を襲いだものである。彼等はかやうな滑稽本位の連歌に安んじつゝ、誇りつゝ、同時に之

れを茶前酒後の慰みとして滿足してゐたのであるが、芭蕉はこれに新たな生命を吹き込み、傳統的なる一種のユーモアは保留しながら、同時にその意義を深くし、品位を高めて、堂々と和歌其他の大文學と比肩する事の出來るものたらしめた。蕉風の開眼、樹立といふのは其の事で、かくして俳諧は滑稽、ユーモアは滑稽ユーモアながら、其の品位、意義、趣味に於いて雲泥も曾ならざるものとなつたのである。上に擧げた前代期の諸作或は芭蕉が幼時に作つたといふ「戌と申の世の中よかれ酉の年」などと、蕉風樹立後の「古池」や、「芭蕉野分」や乃至「行く春に和歌の浦にて追付きたり」、「夏衣いまだ蝨を取りつくさず」、「一つ家に遊女も寢たり萩と月」などを比べると、此の間の消息がわかるであらう。同時に此の論者が「貞德あたりから創まつた滑稽文學に思ひ比べて見給へ」と云ひ、又「俳諧といふ言葉一つにも蕉門の諸詩人が全く別の意味を附與した」と云つた言の意味がわかるであらう。即ち「俳諧」といふ語は、もとは滑稽といふ意味であり、また專門俳家の間には、專ら宗鑑貞德等に弄ばれた「俳諧の連歌」の意味に用ゐられてゐるのであるが、こゝでは極めてぼんやりと、一個の單語として、又發句のことや俳諧の連歌の事などの全體に、それとなく用ゐられたやうに見える。

【ユーモア】 英語の humor. おどけ。洒落。滑稽。をかしみ。

【支考の十論】 支考姓は各務（かがみ）、東花坊と號した。美濃の人、芭蕉十哲の一人。芭蕉の歿後美濃風

の一派を起こした。俳書數十種の著があり、特に俳論を以て世を風靡した。『十論』はその著『俳諧十論』のことで、正德四年の刊行、俳諧に對する支考の所見を窺ふことが出來る。享保十六年二月歿、年六十七。

【先入主となる】 最初に見聞した事柄が記憶に殘り、それが主人となり幅をきかして、後からの見聞が正當に理解されないこと。

【貞德】 松永貞德（ていとく）、京都の人。細川幽齋について和歌、連歌を學び、俳諧道の中興と稱せられた。北村季吟はその門人。承應二年歿、年八十三。

【初眞桑の句】 近江屋玉志は酒田の俳人、「亭」は家のことを俳家が洒落れて言つたので、芭蕉庵、落柿舍といふやうな固有名詞を玉志亭と云つたのではない。句の味は、主人側が座興の難題に「まづ御一句を願ひまする、句のない方は召上れませんよ。あッハッハ」と云つたので、芭蕉が此のユーモアに應ずるに即妙のユーモアを以てして、「おいしさうな初眞桑ではある、扨縱四つに割つて物さうか、それとも横に輪切りにしてめで申さうか」と、食ふ方法の切り方そのままを文學にした、その一擧兩得の工合や調子に云はれぬ面白さがあるのである。この二つは瓜をたべる代表的の二方法で、四つに斷つは縱てに四つに切つてバナヽの實のやうな形の四片を得ること、これは汁を逃さぬので一番うまい。輪切は汁が逃げるので味は劣るが、木瓜の紋のやうな形が目に美しい。

【雪の日にの句】 此の句の初五、其角が『いつを昔』には、「山中に子供と遊びて」と題して「雪

の日に」とあり、元祿二年正月十七日に認めた翁の手紙には「山中の子供と遊ぶ」と題して「初雪に」とある。二種に傳へられたのであらう。題を見ると、山中で雪降りに子供と遊んだ時の句であることは分るが、意味はわかりにくい。多分子供と一しよに雪達磨でも作つて、「さア〳〵今度は髭だ〳〵、兎の皮を切つて來て作るんだよ」とでもいふのであらう。文法的には兎の皮にひげを作ることとも、人の顏に兎の皮のひげを作ることとも取れるが、雪の日と限つてゐるのを見ると、多分雪の人像のひげであらう。此の句從來不可解とされて、角田竹冷は「句意説明に苦しむ、作られた當時には十分解し得らるゝ句も歳月を經るに從つて意味の索然たるものが往々ある。此句も恐らく其の類であらう。」といつてゐる。

【いさ子供の句】 前の句に隣接して擧げてある句。「さあ〳〵子供達、一緒に飛びまはつて遊ばうぢやないか。あれ〳〵きれいな霰が愉快さうに飛びあがり、跳ねあがつてゐるよ」といふ意。霰の玉の、ころ〳〵と飛びまはるのにつれて走りまはらうといふのであらう。翁が子供と一しよになり、自然に同化してゐる樣子が、いかにも面白く現はれてゐる。

【童心】 子供心、幼な心。氣取らず、勿體ぶらず、考へ込まぬ無邪氣な心。

【良寛は老年になつて手毬をついて遊んだ】 一に童男、童女、二に手毬、三にお彈き、これが良寛和尙の三好であつた。良寛はよく子供と隱れんぼをしたり、手毬をついたり、お彈きを

したりして遊んだといふ。『沙門良寛全傳』に「禪師頗る大勝を博して賭物の煎豆を多く得」などある。

【水鷄笛】 クヒナブエ。水鷄を誘ふため、その鳴聲に似た音の出るやうに拵へた笛。

【よほどの寂寞と孤獨とを經驗した人達…】 此の邊、意味が深さうで説明しにくい。恐らく作者でなければ解らぬ消息があるでもあらう。が、ざつと考へると、ギリシヤのアリストートル以來、人間は、社會的動物(Social being)なりとも云はれて、相手なしには過ぐされぬものである。で、妻が無し、家庭がなし、世間人の大人に親交がなしといふことになれば、自然に無邪氣な子供に相手を求めるやうになるであらう。殊に世を拗ねた偉人の、一癖ある人生觀を持ち、孤高の氣位を持つてゐる人などは、世の俗人や、主義を異にする遠慮のある大人と交はることを好まずして、何の癖もない、理屈を云はぬ無邪氣な子供を愛するやうになるであらう、或は人よりも默つて素直に動く動物などを更に愛するやうになるであらう。同時に手の込んだ人間くさい藝よりは、あどけない、子供らしい、原始的の慰みを好む樣になるであらう。「子供の友達であつたといふ事は、一面に孤獨な生涯を送つた人であるといふことを語る」といひ、「餘程の寂寞と孤獨とを經驗した人達でなければ、手毬をついたり、水鷄笛を吹いたりして、心を慰めるところまでは行くまい」といふあたりの意味は、此の心理から、少なくとも一面の解釋が出來ると思ふ。

【孤獨であつた爲めに天分を伸ばすこと・・・】

世間に入り交はつて、多くの人に接してゐると、それらの人々との交渉の爲めに、自分の特色が雜ぜ返され、磨り減らされて、つい雜駁な妥協的、鼠色的になるものである。面壁九年したればこそ達磨大師の一種特別な悟りも開けたであらうが、あれが若し、市井に立ち交はり、圖書館の雜書渉獵に浮身を窶してゐたら、百科辭典の化物のやうな人間になつたでもあらう。かう考へると、自然に赴き「わび」の味を歌ふ芭蕉の天分は、孤獨であつた爲めに大成されたと見る事も出來る。又「俳諧の外雜談すべからず、雜談には居睡りして神を養ふべし」といふやうな流儀を持ち、人込みに立ち入らずして、自分獨自の離れた立場見識といふものを持つてゐると、世間人世といふものが見通ほせるやうになるであらう。豕を抱いて臭きを忘れるともいひ、林中に入つて木を見失ふともいふ。つまり離れるのが對象をよく見る所以でもあるのである。また人間は自分に緣の近い、親しみのある事のみを知り得るものである。魚は水中游泳の味を知り、鳥は林間飛翔の趣を知る。宇宙世相の暗い寂しい方面は、明るみ好き、賑やか質の人の知り得ぬところで、而して俗世間の榮華に背いて、夢にまで枯野をかけめぐる寂寥趣味の人のみの味得し得る所であらう。皆人の囃し悅ぶ鵜船に對して、鮎を追ひまはす賑やかな場所よりも、活動の幕を閉ぢた引揚げの淋しい場面に特に深い興味を感じたのも、一つは芭蕉が此の寂しい境涯から來た必然の現はれとも考へら

れる。

【おもしろうての句】 岐阜の長良川に鵜飼船を見た時の句。「鵜船も通り過ぐる程に歸るとて」と序してあるから、大雜沓後の大寂寞、歡樂を極めた後の特殊の哀傷味に心ひかれて歌つたのであらう。而して「面白うて」と「悲しき」との對照は、謠曲「鵜飼」に「ひまなく魚を喰ふ時は、罪も報いも後の世も、忘れ果てゝ面白や」及び「鵜船のかゞり影消えて、闇路に歸るこの身の名殘をしさをいかにせん」といふ二つの文句に思ひ寄せたのであらう。鵜舟の實景については、本讀本卷九、第十四章「白帝城」の部の『省勞抄』を參考して下さい。

【寂しさに居た芭蕉は云々】『嵯峨日記』の元祿四年卯月二十二日の條に、「今日は人もなくさびしいきまゝにむだ書きして遊ぶ。その詞、

喪に居るものは悲しみをあるじとし、
酒を飲むものは樂しみを主とし、
愁に住するものは愁をあるじとし、
徒然に住するものはつれ〴〵を主とす。

さびしさなくはうからましと、西上人のよみ侍るは、さびしさを主なるべし。・・・獨りすむほどおもしろきはなし。長嘯隱士の曰、客は半日の閑を得れば主は半日の閑を失ふと。素堂此の言葉を常にあはれむ。予もまた

うき我れをさびしがらせよかんこ鳥。」

とあるあたりに據つたのであらう。「寂しさに居た」といひ、「主とした」「友とした」といふ、要するに寂しさを愛して、之れを離るべからざる本領と思ひ、命とも思つたといふこと。

【蛸壺や】　原文には「手を打てば」の前に、「蛸壺やはかなき夢を夏の月」の句を引いてある。煩を避けてわざと除いたが、加へて說くのも面白いであらう。この句は『卯辰紀行』に出てゐる句で、「明石夜泊」と前書がしてある。貞享五年の春、吉野から高野を經、夏に入つて須磨の浦に平家沒落の跡を弔ひ、明石に來て泊つた時の句である。この邊の漁夫が蛸を取るには、小さい壺を海底に沈めておく。蛸はその蛸壺の中に入つて、やがて引上げられるのである。意味は深からうが曖昧で、凡そこんな事であらう。あゝ〳〵此の浦の名物の蛸壺よ。壺の中の蛸は、瞞して捕るが目的の壺の中を、金城鐵壁と心得て、海底までさし込んで來る夏の月影をば、あゝ涼しい明月よ、など思つてゐるであらう。壽永の平家もその如く、此の海邊を金城湯池と心得、やがて範頼義經に襲ひ落さるゝも知らず、月にあこがれ笛などを吹きすさんでゐたのだ。あゝ此の夏の月、はかない夢をまざ〳〵と見せてくれることではある。といふやうな意味で、蛸の運命を平家沒落の運命にからんだのであらう。それは紀行のすぐ前の句に「須磨寺や吹かぬ笛きく木下闇」と云つて、敦盛が靑葉の笛をきかせ、其の後の文に「其の代のみだれ、その時のさわぎ、さながら心にうかび佛につどひて、二位の尼君皇子を抱き奉り」などあるのを見ても察せられる。此の夏の月影が海底の蛸壺を照らす眼前の光景を見つゝ、平家滅亡の光景を幻に見た事を寫したのに對して、「名狀し難い程の心の深さを見せた」といひ、「現實と幻想とを」同時に

浮かべたといひ、又世間の無常空虛の味を暗示したといふのであらう。

【手を打てばの句】『嵯峨日記』に載つてゐる。元祿四年四月、嵯峨に遊んで去來の落柿舍に滯在した時、二十三日の朝未明の作である。曉近い頃であつたのであらう。同じ日記の此の句の次ぎに、「夏の夜や木魂に明くる下駄の音」といふのがあるのを見ると、此の二つは同じ時の同じ心持を歌つたので、早起きして、舍の近くを散歩した時の作と見える。歩きながら興を催して手をパン〳〵と打つて見る。水鷄笛を吹くお爺さんだから、手を打つ位不思議はない。打つと不思議や！　今迄夜と思つたのが、すゥッと明け白んで、月は白い形だけを空に殘して、謂はゆる有明の月となり、觸目一帶に晝の氣分が漂つて來た。といふので、打てば響くといふ樣な事の變化に間髮を入れぬ呼吸を寫したので、多分禪悟の光景などを思ひ浮かべたのであらう。即ちパン〳〵と手を打つ、その音を向うの山が受けて、同じくパン〳〵と木だました、と思ふと、夜の景色が、いつしか晝と早變りして、空には夏の月が有明となつて薄く殘つてゐる、といふので、山麓月下の拍手に於いて悟道禪機の味を想像するといふ所に、心の深さや、現實幻想の混淆やを偲ぶといふのであらう。

【月はあれどの句】『卯辰紀行』に出てゐる句で、「蛸壺や」の少し前に載つてゐる。翁が須磨へ來たのは四月の中旬の事であつた。此の句のあとに、「卯月中頃の空も朧ろに殘りて、はかなきみじか夜の月もいとゞ艶なるに、山は若葉に黑み

かゝりて、時鳥啼き出づべきしのゝめ」など書いて居るのを見ると、相應な眺めであつたのであらうが、源氏物語以來秋の名所となつてゐる所を、夏見ては、一向魂の無い、主人の無い景色の樣で面白くないといふのであらう。此の句に隣接させて、「月見ても物足らはずや須磨の夏」といふ句を載せてあり、又少し隔てゝ、「かかる處の秋なりけり(源氏の句)とかや。此の浦の實は秋をむねとするなるべし。悲しさ淋しさ、いはんかたなく、秋なりせば、いさゝか心のはしをも言ひ出づべきものをと思ふぞ、我が心匠の拙きを知らぬに似たり」など云つてゐるのを見ると、いよ〳〵其の意で、即ち月は艶に照らして、あるにはあるが、まるで主人のゐない所のやうだ、秋見るべき須磨を夏見るのでは、といふ意であらう。「留守」はもとあるじの不在な家を守る人のこと、或は守ることを意味したが、轉じてあるじの不在な事その事をもいふやうになつた。これは後者の意である。此の作者が此の句に對して「心の深さを見せた」といひ、「現實と幻想との混淆がある」といひ、「此の世の深い空虛が現はされてゐる」といつたのは、夏の一夜の現在に於いて秋の哀絶なる風光を偲び、源氏以來の傳說をしのび、秋の實を見せぬ悲しさ淋しさを偲んでゐるからであらう。

【短い詩形の約束】 五、七、五の十七字に作り上げねばならぬといふ俳句の形式のこと。「約束」は俳句、發句の形はかうあるべきものと、我れも人も、證書を入れたと同じやうに承認してゐるといふ意味。

【死んでしまつた言葉】 曾ては一般普通に用ゐたが、今は廢れて用ゐられなくなつた詞。修辭學に謂はゆる廢語(obsolete)。例へば「同じ」を昔は「おやじ」といひ、幼きことを「きびは」と云つたが、今は廢れた類である。

【題詞】 ダイシ。前書、詞がきのこと。句の前に、作のいはれを簡單に記した文句。

【秋深きの句】 翁が亡くなる半月程前の元祿七年九月二十九日、重病のため、芝柏亭の俳諧興行に出席が出來ないとて送つた句、「芝柏興行」と題してある。同好の打ちつどうた俳席を床しみつゝ、隣家の物音に耳をそばだてる心持を歌つたのであらう。秋の深くさびしい折から、君等が數多して面白く興じてゐることであらうと思ひつゝ、病を抱いてやすんでゐると、隣家の物音が心にかゝる、さて隣家は何をする人であらうか、といふほどの意。これが自宅での作なら、隣を怪しむといふことが、わけが解らなくなるであらうし、また無題であつたら、讀者をして想像に苦しましめるであらうが、「芝柏興行」といふ題詞があるので意味がはつきりするといふこと。

【芝柏興行】 興行は催すこと。東籠に「和歌興行盛也」とある。浪花なる芝柏の亭で俳諧の會を催したのである。當時翁は浪花の俳人伏見屋元道の家にゐたので、十月三日花屋に移つたのであつた。

【言ひ切るな】 此の通りの文句があるか否か知らぬが、遺語の中には「發句は隅々まで言ひ盡くすものにあらず」「言ひおほせて何かある」な

と云つてある。詩に餘情を貴ぶ心である。

【イブセン】 近代劇の創始者、一八二八年ノルウエーに生れた。二十三歳で處女作のローマ史劇『カタリナ』を書いた。一八五〇年首都クリスチヤニヤに赴き、翌年ベルゲンの國民劇場の作者兼舞臺監督となつた。五七年にはノルウエー劇場の藝術主任となり、前後十年の間に數篇の脚本を書き、數十篇の演劇を上演した。この間に劇作者としての修養を十二分に積んだ。一八六四年大陸に渡りローマ、ドレスデン、ミュンヘンの三都の間の旅を續けること前後二十七年、一八九一年六十三歳で漸く本國に歸つたが、この時には既に近代社會劇乃至心理劇の父、歐洲劇界の帝王者としての榮冠をかち得てゐた。一九〇六年歿、年七十八。著作は初期の詩篇の外に戲曲すべて二十五篇ある。『人形の家』『民衆の敵』『鴨』『海の夫人』『建築師』等は我が國にもよく知られてゐる。

【道の記】 旅行記のこと。こゝでは旅行記の中に挿入してあるのは皆面白いといひ、その一例として『奥の細道』の中なる一句「あか〳〵と」を擧げたのである。

【あか〳〵との句】 「途中唫」とあつて金澤から小松に行く途中の作である。大意は秋の夕日は赤い光を放ちつゝ、早くも西に傾いて、わびしい旅人に思ひやりもなく刻々に沈んでゆく。同時に野の末からは秋風が吹きつのつて身に沁みるといふこと。謂はゆる言ひ切らぬ餘情の句で試みに言ひつくすと、赤い〳〵色をした秋の夕日が、旅宿のあてもなく、野路をたどる旅人の

難澁を顧みげもなく、さつ〳〵と傾いて、同時に夕風の一段と身に沁みて來る淋しさわびしさよ、といふやうな心である。「つれなく」は期待につれ添はない意で、こゝでは思ひやりのないこと。

【錫元に切りこむ】 斬合合戰に相手の身近く迫ることで、事物に接近し、其の心核精髓をつかんで言ひ現はすことの喩。

【馬をさへの句】 野晒紀行の中にあり、「旅人を見る」と前書してある。貞享元年の十二月に尾張を吟行した時の作。雪の朝の眺めの面白さ、旅人はもとより、不斷なら目にも留めまじき馬までが、一つの風情になつて、つく〳〵と見とれさせるといふこと。芭蕉は雪が山野を、旅人を美化するのみならず、馬までを面白くする所に興味を感じ、此の文の作者は、翁が一個の旅人として他の旅人に見入つた所に興味を感じたのである。

批評

以上、語句を釋する序に可なり詳しい批評をも試みたが、尙ほ二三の補足を試みると、此の一篇は芭蕉の人物と句の味とを、隨筆風に且つ說明し且つ描寫したものであるが、そのおもなる味は、俳諧を知りつゝ同時に俳諧以外に立つてゐる人の、自由な、囚はれない、深い同情心と廣い鑑賞力との結果なる點にあるであらう。もう一つは、種類はちがふが、創作家の心を以て、

他の特異な創作家の心持を忖度した點にあるであらう。本篇の含む所十三四節、その叙述の要を摘むと、左の如くで、

一、芭蕉の一生が旅人、殊に漂泊者の生涯であつたこと。

二、日本の自然が、かやうな漂泊的旅人を生むに適してゐたこと、即ち芭蕉が日本といふ特殊の風土の極めて自然なる産物であつたこと。

三、芭蕉の漂泊性は身體精神兩方面に通じてゐたこと。

四、芭蕉が日常生活の細目に通じて、微妙に感情を働かしたこと。

五、その精緻な觀察による微妙な表現を、象徴的、幻想的の境に進め高めたこと。

六、彼れの句には、深い高い表現の中に、微妙な愛嬌のユーモアを含んでゐること。

七、芭蕉が子供を愛し、無邪氣な子供心で、幼い愛嬌の句を詠じて居ること。

八、彼れが子供を好んだのは、孤獨寂寞の結果であつたこと。

九、彼れの孤獨がその天分の大成を助けたこと。

十、翁の句に於ける精神的の深さ。

十一、彼れの句の解しにくい一つの理由は、説明的でない點にあること。

十二、もう一つの理由は、物事を言ひ切らず説き盡くさぬ點にあること。

十三、芭蕉が詩人としての特色は、最もよく旅情を詠じたものに現はれてゐること。

さつとこんな事になるが、更に要をつまんで引きつゞけると、芭蕉は漂泊性を根本的特色とした詩人であるが、此の特性は日本の國土の影響による自然の結果で、彼れは此の特性を身心兩面に通じて豐富に具有し、遍く諸國を歴遊しつゝ、國民の日常生活を精しく觀察しては、之れを微妙に表現し、折々は其の表現を象徴的幻想的の域に高め、また其の中に特殊の滑稽味や子供らしい無邪氣さを含めた。彼れが子供を好んだのは孤獨の結果で、その孤獨はまた大いに彼れが天分の大成を助長した。彼れの句には精神的の深さがあるが、その意味の解りにくい主なる原因は、彼れが物事を説明せぬ點、及び言ひ盡くさぬ點にある。芭蕉の句はいろ〳〵の方面を豐富に含んでゐるが、その詩人としての特色の最もよく現はれたのは、その根本特性なる漂泊的旅情を詠じたものにある。といふ事になるであらう。更に煎じつめると、(一)芭蕉の根本特色たる漂泊性は日本といふ國土の自然に産んだものである。(二)彼れの人及び作はいろ〳〵

の面白い意味の深い方面を具へてゐるが、(三)一番の味はひは、やはり、その根本性の直接に現はれた旅情の句にある。といふことになるであらう。

もと〳〵思ひ浮かぶまゝに書き繼いだ隨筆ではあるが、筆路を辿つて、記述の筋をつなげば自然にこんな工合に一種の連絡組織をも見せて居るので、こんな所が名匠の筆路に見る一種特別の味ともいふべきであらう。

餘訓

西鶴近松を以て元祿時代に興味を持つたものとすれば、芭蕉は此の時代の肉慾生活——賑やかな膩ぎつた現金的な生活を厭離し、之れに背を向けて閑寂の趣味を求めたものである。彼れとても初めから世を厭うたのではない。彼れ自らも「或時は仕官懸命の地を羨み」といひ、「或時は進んで人に勝たむ事を誇り、是非胸中にたゝかうて之れが爲めに身安からず」と書いてゐる。彼れは主取仕官もした、土木の役人ともなつた、禪の修行も醫者の修行もした。俳諧仲間と一緒に芝居も見物したらしい。其の愛藏の中には『源氏物語』『白氏文集』の如き濃艶な文學もあつた。けれども彼れの素質は元祿の活社會の競爭には適せなかつたであらう。主取も土木の監督も、人並以上には出來なかつたであらう。彼れはいろ〳〵と煩悶の末、遂に浮世を見すてゝ自然に歸り、花月を友とするやうになつた。「無能無藝にして唯だ此の一すぢにつながる。」といふのは、彼れの抱負を示して居ると共に、一面不得手な仕事に失敗したことの自白であつたであらうと思はれる。

しかも風雅に於ける、造化に隨ひて四時を友とす。見る所花にあらずといふことなし、思ふ所月にあらずといふことなし。思花にあらざる時は夷狄にひとし、心花にあらざる時は鳥獸にたぐひす。夷狄を出で鳥獸に離れ、造化に從ひ造化にかへれとなり。

元祿の平民生活は一種の復古で、又因襲を打破して造化にかへつたものである。彼等は平民の立場から太古の須佐男命の心事を學び、『源氏物語』の中の人物の所行を行つた。從つて其の肉本位なる造化復歸は、やゝもすれば夷狄鳥獸に近づく恐れがあつたが、芭蕉の氣高い性質は、同じく造化にかへつても彼等と共に鳥獸に近い生活を營むことを許さなかつた。かくして彼れは賑やかな人間を見すてて淋しく月花の造化にかへつた。思ふ所肉と金とにあらざるなき世に在つて、しづかに月花に思をやつた。而して喪に居る者が悲みをあるじとし、酒を飲む者が閑をあるじとし、愁に住する者が愁をあるじとし、徒然に住する者が徒然を主とし、哀に住する者が哀をあるじとするが如く、閑寂をあるじとして閑寂に住するやうになつた。

うき我れを淋しがらせよかんこ鳥。

芭蕉は一所懸命の修行をして漸く閑寂の味はひに安住したものである。故に彼れの心身行爲の一切が閑寂の味に充ち、其のつく息にさへさびし味が溢れて居た。從つて彼れの句は悉く其の生活の聲であり、其

の性格の反映であり、又其の精神上の自傳であつた。彼れは古池に蛙の飛び込むのを聞いては蛙と共に青どろの浮いた古池に飛び入る思ひがしたであらう。柳かげの涼しさに挿秧を眺めつゝ、田一枚植ゑる間を過ぐしたであらう。枯枝に烏のとまつたのを見て、自分も秋の夕暮の空にションボリとたゝずむ心地がしたであらう。須磨の浦の淋しき秋には、見渡しつ、眺めつ、見つして徒徊したであらう。友の塚を弔うては、はふり落つる涙を秋風にたぐへたであらう。やさしく澄んだ露を見ては、浮世の塵を濯がうと思つたであらう。古戰場の夏草を見ては、蝸牛の角目立てした勇者のはかなき夢のあとを憐んだであらう。我が身を木がらしと感じて、淋しき竹齋姿に獨りほゝゑんだであらう。旅の夏衣のしらみ取りに淋しき趣味を感じたであらう。山路の片隅に物げなく匂うて居る淋しき菫を床しんだであらう。花の間の明日檜を見て、元祿の天地に於けるわが侘び姿を思ひ浮かべたであらう。賑やかな櫻を見ては、げにありし世の樣々を思ひ浮かべたであらう、而して死に臨んでも尙ほ其の夢は、淋しく荒れた枯野をさまようたことであらう。元祿の社會に背いた芭蕉が淋しき感懷と聖姿とは、是等の句のうちに脈を打つて居るではあるまいか。

古池やかはづ飛びこむ水の音。
田一枚植ゑて立ち去る柳かな。
枯枝に烏のとまりけり秋の暮。
見渡せば眺むれば見れば須磨の秋。

塚も動け我が泣く聲は秋の風。
露とくゝ試みに浮世すゝがばや。
夏草やつはものどもが夢のあと。
木がらしの身は竹齋に似たるかな。
夏衣いまだしらみを取りつくさず。
山路來て何やらゆかしすみれ草。
淋しさや花のあたりのあすならう。
さまゝの事おもひ出す櫻かな。
旅に病みて夢は枯野をかけめぐる。

貞德に於いて歌道の初步たり、宗因に於いて茶前酒後の戯れであつた俳諧は、かくして芭蕉に於いて大丈夫の生命を托すべき神聖なる事業となつたのである。

芭蕉の句の有り難いのは、其の命がある爲めである、而して其の命があるのは彼れの實際生活の偽らぬ感じを深く現はした爲めである。彼れの句に於いては、彼れの全身に溢れ心底に徹した寂しみがあらはれて居るが、それに比べると十哲其の他の名匠の句は、妙は妙でも唯だ師翁の示した味はひどころを味はひ習つて美しい詞に現はしたといふ風があり、月並な餘處行きの思想を歌つて居るとは思はれぬまでも、とに

かく實生活の聲ではなく、腹の底の響きではないやうに思はれる所がある。芭蕉を去つて其角、嵐雪等に行けば、吾等は何となく『源氏』を去つて『狹衣』に行き、西行、長明を去つて定家、家隆に行つたやうな心地がする。芭蕉の發句は元祿の社會に背いて自然に赴いた者の最も深い、最も大いなる、最も眞面目なる、最も生命あるものであつた。（「新國文學史」）

挿　圖

（千住、象潟、かさね、小杉放庵筆）　圖は小杉放庵氏の「奥の細道畫册」中のものである。この畫卷は氏が「奥の細道」に記された蕉翁の足跡を尋ねて親しく各地を旅行し、行く先々に昔の面影を偲びつつ、蕉翁が旅行中の生活と心境とを淡々たる筆にあらはしたものである。

小杉氏、名は國太郎、舊號未醒。明治十四年栃木縣日光町に生れた。十八歳の時上京して故小山正太郎の門に入り洋畫を學んだ。文展には「柚」「水郷」「豆の秋」等の名作を出して注意を惹いたが、大正二年歐洲に遊び、歸朝後新興日本美術院の同人としてその洋畫部に重きをなし、後、同志と春陽會を組織して今にその重鎭となつてゐる。本來洋畫家であるが、水墨畫をもよくして一家の風をなし、瓢逸枯淡の筆致によつて世の推賞を受けてゐる。

四　老の姿はかはるとも

要旨　解題

近松門左衛門が、正保五年竹本座の爲めに書いた時代物淨瑠璃の名作『國姓爺合戰』の中の名高い一部である。

此の作一篇の筋は、明朝の叛將李蹈天が韃靼に通じて大明を亡ぼした。その結果、明の遺臣吳三桂は皇子を抱いて九仙山に隱れる、そして皇子の姉君栴檀皇女は舟に乘つて日本に渡り、九州平戸の浦に打上げられて、漁夫和藤內夫婦に救はれた。和藤內は明の遺臣鄭芝龍一官と日本婦人との間に生れた智勇無双の英雄兒である。和藤內は皇女をその妻に預け、明朝の恢復を計らうとして、父と母と親子三人唐土に渡つたが、先づ千里が竹林で韃靼の兵と戰つてこれを降參させた。かくして唐土に渡つて、わづかな手兵は得たものの、扨困つたのは歴とした味方と根城とが無いことで、思案の結果、ふと思ひ出したのは、昔一官が日本へ逃げる時に後に遺して來た錦祥女といふ娘が、今吳常軍甘輝といふ大身の名將が妻となつてゐることで、早速親

子三人連れ立つて、甘輝の居城たる獅子が城へと訪ねて行く。それからが此の本文にある通りで、折しも甘輝が不在なので、然らば娘に逢ひたいといふ。錦祥女はやがて樓門の上に立ち現はれる。こゝで樓門の上と下とで親子兄弟不思議の對面をしたが、甘輝に祕密の頼みがあるといふので、先づ母を人質として城内に入れ、男二人は樓門の前で甘輝の歸城を待つ。援軍の頼みが首尾よく聞かれゝば川水に白粉を流さう、首尾惡ければ紅を流さうといふ約束で。やがて甘輝が歸り、母は繩にかゝつたまま、甘輝に面會して援助を頼み入れたが、彼れは妻の緣に引かれて味方することを喜ばなかつた。やがて紅が流される。和藤内は城内に躍り入つて甘輝に迫ると、錦祥女が胸を擴げ、血に染んだ乳の下を示して、紅の流れの源はこゝだといふ。一同はあつと驚いたが、甘輝はやがて妻の眞心に感じて味方を誓ふ。母はやがて義理の娘に殉じて刄に伏す。それより甘輝、和藤内は吳三桂と力を協せて、幾多の苦戰快戰の後、首尾よく韃靼王や李蹈天を誅伐して、明の國運を恢復するといふのである。

場所が日本支那の二國に跨つて構圖が大きく、變化に富み、それに義理人情の葛藤を可なり自然に、同時に美しく賑やかに開展しつゝ其の間に我が國民性を發揚したので、未曾有の大當

りを占め、三年越し十七ヶ月間打通したと傳へられる。

教授上の趣意としては、三絃に合はせ操り人形に伴はせた、調子本位なる淨瑠璃文の特色、その種の文章の中でも老近松の特にすぐれた點、人情の急所灸所を生き〳〵と寫した點などを教ふべきであらう。又近松の作が元祿新興の氣運を表象して居ること、近松が淨瑠璃史三百年の間に屹立して、空前絕後の王座を占めて居る譯合などを教ふべきであらう。

近松門左衞門。此の作者名で知られた文豪は、本姓を杉森といひ、名を信盛、通稱を平馬と云つた。他に巢林子、平安堂、不移山人、日一具足居士など、いろ〳〵の稱はあるが、一番の通り名は近松門左衞門で、次ぎに巢林子（さうりんし）である。彼れの出生地には出雲國大原郡近松村、三河國、肥前國唐津、周防國山口、近江國三井寺の近松寺（こんしやうじ）、越前、北國、長州大津郡、長州萩、京都等、いろ〳〵の說があるが、萩、京都の二つが最も有力で、殊に京都が一番尤もらしいと云はれる。

彼れの父を信義と云つた。信義は越前宰相松平忠昌に仕へ、後に浪人して京都に住んだ。近松は此の信義の二男で、初め一條禪閤惠觀（昭良）に仕へ、後辭して近江の近松寺に學んだ。そ

の處女作は『花山院后諍』で、此の作を出した寛文十二年、即ち二十歳の時を以て、彼れは作者生活に入つたと推定される。それより、彼れは當時京阪淨瑠璃界の名手である井上播磨掾、山本土佐掾、宇治加賀掾等のために淨瑠璃を作り、殊に加賀掾のために多くの作を提供し、その傍ら歌舞伎の脚本をも作つた。彼れが特に厚意を寄せたのは淨瑠璃界の革命的麒麟兒竹本義太夫で、その請によつて書きおろした『出世景清』を始めとして、彼れが著名の傑作は多く義太夫のために書いたものである。彼れはまた上方劇壇當代の名優坂田藤十郎のために歌舞伎の脚本をも作つたが、藤十郎の死後は殆んど此の方面に筆を執らなかつた。彼れの淨瑠璃は大體時代物、世話物の二種に分類される。時代物は過去歴史上のおもだたしい人物、事件を取扱つたもの、世話物は當世の人情話、主として市井の男女の心中を取扱つたものである。即ち世話物は、大體心中物と云つてもよいのであるが、これは、多少の萠芽は前代にもあつたものの、大體近松の創始にかゝるもので、元祿十六年に出した『曾根崎心中』を以て其の嚆矢とする。而して彼れの世話物は曾根崎以下、『天の網島』『冥途の飛脚』『女殺油の地獄』『宵庚申』など、すべて二十四篇、その悉くが揃つて立派な傑作と稱せられる。時代物は世話物を除いた全部で、

これは大體叙事詩式の筋本位、賑やか本位のものであり、文學的價値に於いては、概して世話物に及ばぬが、その中では、此の章を含んだ『國姓爺合戰』を隨一として『曾我會稽山』と『雪女五枚羽子板』とが、世に「三傑作」と稱せられてゐる。故黑木勘藏氏の研究によると、近松の作者生活は五十三年、その間に少なくとも百十篇の淨瑠璃と二十八篇の歌舞伎脚本とを書いたといふことである。

彼れは初め京都に住んでゐたが、寛永二年五十二歳の時、竹田出雲のために竹本座の座附作者となつて大阪に移つた。それから專ら竹本座のために新作を出だし、正德四年九月竹本筑後掾（義太夫）歿後も、その後繼者のために名篇を提供した。彼れが最後の作は享保九年の正月に出した時代物『關八州繫馬』で、その年の冬十一月二十二日を以て長逝した。享年七十二。戒名を阿耨院穆矣日一具足居士と云つた。

釋義

【仁ある君も…】 原作『國姓爺合戰』第三段の冒頭である。出典は關根正直博士の調べ出された通り、曹植の文によつたので、それをわざと前後させ、和らげて、解りよくしたのであらう。例

四　老の姿はかはるとも

の冒頭を物々しく立派に飾つて、文章に品位を附ける爲めの格言引用で、引き離しての意義は明瞭であるが、どういふ趣意で引いたかははつきりしない。詳しくいふと、內容の本筋に對して如何なる繫ぎをつけるつもりであるかが、はつきりしない。先づ君臣關係の方からいふと、此の段のおもなる人物、殊に主取りをして其の主に離れるといふ、特別なる事情を持つた鄭芝龍、甘輝の二人について見ると、仁君に對する無用の臣どころか、寧ろ「忠臣も不仁の君には仕ふる能はず」といふやうな格言を引きたい位である。親子の關係も同じ事で、老一官に對する國姓爺、老一官夫婦に對する錦祥女、いづれも有益有爲の子達であり、また義理人情を盡くした美しい關係で、慈父に對する無益の子といふが如き片影をも見せてゐない。かたく〳〵此の格言と內容の事實との關係は、極めて空疎なしつくりしないもので、大作家たる老近松がこれを引いた趣意は理解しかねるが、或は唯だ君臣、父子の仲らひに緣のある古語を引かうといふ位の考で取つたのでもあらうか。或は古淨瑠璃に於ける冒頭の常文句たる「さる程にさても其の後」が、極り文句を用ゐるといふ以外に何等の意味もなく、無關係なあらゆる事柄に冠らされたと同じ意味で、漠然と立派さうな古言が用ゐられたのでもあらうか。或は赤壁の鼈で親子三人が逢ふといふ所から、ふと聯想して赤壁で戰つた曹操の子曹植の文章を取つたのでもあらうか。とにかく內容の本義に對する妥當な古言とは思はれないので、直言して識者の敎を乞ひたいと思ふのである。

因みに、古淨瑠璃に於ける冒頭（だし）に最も普通なる形式の一つは「さる程に扨も其の後」といふ文句を置く事と、もう一つは昔の格言や詩歌などを引く事とであつた。此の『國性爺合戰』五段の中、四段までは悉く古語の引用で冒頭を飾つてゐる。淨瑠璃の形式に關する知識として、こんな事をも、序に敎へておきたいと思ふ。

【大和唐土さまぐ〳〵に道の巷（ちまた）は…】「ちまた」は道股（ちまた）で、道路の股になつて分かれる分岐點なる辻のこと。この「道の巷」は、修身處世の道義の道と、歩み辿る道路の道と、卽ち無形有形兩方の意義を兼ねた一筆双叙の味で、我が國と支那とでは、人倫道德の道も別なり、又歩み辿る道路も別々に分かれてゐるがといふこと。差し當たつての本義は、始めて來た外國唐土の、迷ひ易く分岐した道ではあり、非常亂世の正しく身を處し難き折ではあつたけれども、忠孝誠實の義人達には、おのづから神の加護があつて、處世の分別にも迷はず　道路にも迷はずして、其處で落ち會はうと兼ねて約束した遠い〳〵赤壁山の麓に、不思議にも首尾よく辿りついたといふこと。これ丈の意義と趣味とを、此の簡單な文句に美しく含まして居る老近松の文才を、鑑賞すべきであらう。同時に吾等の母國語、やまと詞の偉力を味はふべきであらう、

【赤壁山】支那湖北省武昌府嘉魚縣の西七十里、楊子江岸にある山。三國誌の古戰場として名高い處、又蘇東坡の前赤壁賦、後赤壁賦の二名作によつて、風流境として名高い處。此の赤壁の

勝地は、湖北省黄州府城の西北漢川門外にあつて赤鼻山ともいふ。

【親子三人】 一官と和藤内とその母親。

【呉常軍甘輝】 明の五常軍散騎將軍で、獅子が城の主である。妻の錦祥女が義を重んじ自殺するに及んで大義に歸し、國姓爺等と共に逆臣李昭天及び韃靼の兵と戰ひ、李踏天を殺し韃靼兵を驅逐した。この甘輝は實在の人物で、鄭成功の股肱となり、その畫策に參して功多く、大擧して南京を攻め、瓜州を破り鎭江を取つて金陵に至つたが、清將梁化鳳と戰ひ敗れて捕へられ、屈しないで殺された。獅子が城は假作の名であらうといふことである。

【鯱魚】 伊勢の海に棲息し、頭は虎に似て背に鋭い刺があるといはれる海獸。昔からその形を摸して宮殿、樓門などの棟の端につけた。こゝもそれである。

【石壘】 セキルヰ。石のとりで。

【繩を引く】 眞直に長くつゞいてゐる樣の形容。

【黄河】 楊子江に次いで支那第二の大河。源を青海に發し、甘肅省に入り、湖南、山東の二省を貫流して渤海に注ぐ。全長二千五百哩。

【聞きしにまさる要害は…】 「要害」は味方に必要にして、敵に有害なる位置構造のこと。「冴え返る春の夜の」は、一旦暖かき春になりながら、またぶり返して、冬らしき寒さが鋭敏に感ぜられる霜夜の凄さといふ意。大意は、かねて險に據つた要害堅固の名城とは聞いてゐたが、目のあたり見れば噂以上、想像以上のすばらしい構へで、しかも其の城廓の樣子は、一旦春になり

ながら、料峭と身に沁む春夜の寒さに霜が置いて、軒の瓦がきら〳〵と物凄く光つて居る。殊に名城の堂々たる品位を見せて居るのは、棟先の兩端なる鯱魚で、その天空に尾を揚げて反りかへつた有樣は、天つ御空に鰭ふる如く、冴えわたる星空に沖つて仰がれ、地についた方の莊嚴美では、大石を積み重ねた壘壁のイヤ高いこと〳〵！ それから其の城壁をめぐる堀の水の深く湛へた藍の色が、繩のやうに長く遙かにつづいて、其の末端の大黄河に落ち合ふ構圖の大きさ！ 上下四方の是等の要害や莊嚴美を領しつゝ、入口の樓門が、錠をおろされて物凄く靜まり返つて立つて居る。と、長く云へばかういふ味だが、それを七五本位の名調子で、簡潔に美しく暗示した面白さ。かういふ處が近松の文章の絶妙なる一面だが、

やまともろこし　さま〳〵に、（七五）
みちのちまたは　わかるれど、」（七五）
聞きしにまさる　えうがいは、（七五）
また冴えかへる　はるの夜の」（七五）

といふ風に、七五の調子を中心根幹として、その間々に、

しもにきらめく　のきのかはら、（七六）
せきるゐたかく　つきあげたり、（七六）
ほりのみづあゐに似て　なはを引くがごとく、（十九）

の如く、七六、十九といふが如き、いろ〳〵の違つた調子を交へて、リズムに變化を與へ、變化を與へつゝ、其の間にヴライティを踏まへたユニテイの大統一味を見せてゐる所、實に無類

の面白さで、他のあらゆる淨瑠璃作者の企て及ばぬ所であつた。こゝなどはホンの序の口で、言ふにも足らぬ所であるが、之れを頭に入れておいて、後の樓門のくどきあたり（一官兩手をあげて、あゝこれ〳〵、のあたり）を、ようく讀み味はつて下さい。

「鯱魚天に鰭ふりて」など、鑄物の鯱魚に命を吹き込んだ天才のすばらしい筆力、何といふ面白さであらう。

【銅羅】 ドラ。樂器の一種。からかねで作り盤狀をなし、ばちでうち鳴らすもの。多く佛家に用ゐられる。

【箭窓】 矢狹間とも書く。狹間は城の櫓、塀等にあけて、そこより外面を望み、又は鐵砲や矢を放つに便したる窓。矢を射る狹間の意で矢狹間といつた。幅五六寸、長さ一二尺の長方形の孔である。

【弩】 昔、石を彈き飛ばして敵兵を斃すのに用ゐた武器。

【石火矢】 昔の兵器、今の大砲の前身ともいふべきもので、專ら攻城に用ゐた。彈は初めは石を用ゐたが、後には鐵や鉛を用ゐた。

【和國】 日本のこと。支那に乘り込んでの記事なので、わざとかういふ音讀式の詞をつかはしたのであらう。

【如何は、せんとぞさゝやきける。和藤內】「いかゞは」で句讀を切つたのは、淨瑠璃の節を面白くする爲めの工夫である。讀み方、謠ひ方、語り方、話し方を面白くする工夫に、わざと文法の常軌をはづして、文法的には切るべき所をつゞけ、文法的にはつゞくべき所を切る一つの方法がある。謠曲、淨瑠璃を始め、あらゆる歌謠、辯說にして、凡そ藝術的の表現をしようとするものに、此の種の味を試みぬはない。此の近松の一章も、其の方面の味を示すために、わざと語り本そのまゝの句讀を存したのである。前卷の謠曲や平家などと共に、特にその心用意あらんことを乞ふ。たゞ「せんとぞ囁きける」と云つて、誰れにさゝやいたと書かないのは、すぐ次ぎに「和藤內聞きもあへず」とあるから、わざと前に省略した簡潔の筆である。

【和藤內】 ワトウナイ。鄭芝龍一官の子。明國の滅亡を聞き、肥前平戸より父と共に明に航し、獅子が城の主甘輝等と結んで軍を起こし、進んで五十餘城を拔き、更に吳三桂等と南京城に迫り、李蹈天を捕へて酷刑に處し、韃靼王を擊退して永曆帝を立てた。近松の作、『國姓爺後日合戰』には、國姓爺日本風を好み、後甘輝に意見せられ、怒つて甘輝と絕つて官を辭し、東寧島に去つて島主となつた。その後甘輝が永曆帝を伴つて國姓爺の城門に來るに及び、甘輝と和して永曆帝を保護し、韃靼軍の來襲を擊破したと書いてある。

【親しみだてして】「だて」は「立たせ」のつまつたので、めかすの意。懇意めかし、親しさの押賣をして、といふこと。

【不覺を取らんより賴まれうか賴まれぬか一口商ひ】 興奮した心持の句を、力强く一氣に讀みつゞける味はひで、長文句をわざと句讀なしにしたのであるが、勇み肌の張り切つた心持が、躍

るやうに氣味よく現はれてゐる。「一口商ひ」「卽座の敵」「行逢姉」「頼まれぬ心底」は、普通ならば働き詞のブレデ〻ケートを添へて、「一口商ひを試みん」「卽座の敵となる迄なり」「行逢姉たるに過ぎず」「頼まれぬ心底有難からず」などいふべき處を、わざと名詞止めにして、簡潔な力强き味を見せたので、淨瑠璃文に於いて一つの型をなし、歌舞伎の脚本などに於いて頻りに用ゐられるやうになつた一種の特別な修辞である。特に注意して、歌舞伎劇の文章などを味はへる折の栞にしたいと思ふ。

「不覺」は不覺悟の意で、「不覺を取る」は認識不足で油斷して失敗すること。「一口商ひ」は諾否の返事を商賣に譬へた隱喩で、買ふか、買はぬか、否か、應か、附屬の文句なしに、一言で極めろといふこと。「卽座の敵」は、一語を放つ、その一刻に敵となること。「行逢姉」は面白い詞だが、前から兄弟と知つて懇意につき合つてゐたのではなく、偶然ぶつかり合つて姉と知つたといふ、當座、出來合ひの淺い關係だといふこと。此の邊の詞、文句のピン〳〵と活き〳〵して火花を發するばかりの活躍ぶりを味はつて下さい。

【日本の風も懐かしく】「胡馬北風に嘶く」などいふ支那の諺を、それとなく巧みに書きかへたのであらう。

【竹林の虎狩に從へし島夷】此の作の前段に、和藤内が親の老一官夫婦と親子三人同船して唐土に着陸したが、物騒の折に怪まれじとて、老一官と和藤内母子の一組と、二手に分かれ、赤

壁山下に落ち合はうと約束して急ぎ行く。扨和藤内は母を伴ひ行く程に、千里が竹といふ大竹藪に迷ひ入つた。暫らく行くと猛虎が一匹暴れ出でる、同時に敵李蹈天の部下共虎狩りの一行に行き逢つて、奮闘の結果、彼等を降參させ、日本名を與へて手下とした。その歸順した敵兵どもを「島夷」とは云つたのである。事實は島どころではない、支那大陸の兵卒共であるが、日本を本尊と見、支那を小國扱ひして「島夷」とは罵り去つたのであらう。而してかういふ日本本位の大氣焰が、一つは此の作の大衆に悦ばれる一理由とはなつたのであらう。「元手」は資本。

【なんの人頼み…聟の甘輝と一勝負と】例の威勢を添へるための名詞止めで、普通ならば、「人頼みをなさん」「甘輝と一勝負せん」といふべき處を、下略した修辞の味である。

【心入】注意の意を注ぐと同じ味で、特別に心をくばる親切心のこと。心を深入りさせて人の爲めを計ること。

【胤一つ】男系が同一、父が同じといふ意。

【我が恥ばかりか日本の國の恥】日本人の誇りを感じさせて、彼等の血を湧かすべき文句である。

【韃靼】ダッタン。清朝の發祥地、本據たる滿洲のこと。俗に滿洲を韃靼ともいひ、滿洲人を韃靼人ともいつた。事實、韃靼は明の北にある大國、今の蒙古の地であるが、江戸時代には、韃靼も靺鞨も滿洲も、皆同じものと視られてゐたのである。

【大義を思ひ立つからは、私の恥を捨て…】

人の雜兵も、味方に招き入るゝこそ、軍法の、もとと聞く】　普通文法的には、

大義を思ひ立つからは、……一人の雜兵も、味方に招き入るべきで、それが（……招き入るゝのが）軍法の本と聞く。

と書かねばならぬ所である。かやうな折返すべき處を、掛持にして一度で間に合はせるのが、括り書きともいふべきもので、古くいへば『古事記』以來『源氏物語』『枕の草子』以來、許されて、廣く行はれた一種の修辭である。云はゞ簡潔な味を出來す爲めの一種の許容文法ともいふべきもので、今日の文章にも時々あらはれるものである。

【大方にて成るべきか】　並大抵の心得で出來るものか。

【心ををさめ案内せよ】　はやる心を押し鎭めて取次を乞ふがよい。

【開門々々と叩きしは】　「カイモン」は實に威勢の好い、幅のある、大きい、立派な詞で、此の場合、これ以上のよい詞はあるまいと思はれる。小泉八雲のラフカヂオ、ヘルン氏が書いた「耳無し法一」といふ怪談に、怪物が夜半盲人法一の門を叩く所を "Kaimon! Kaimon!" と呼んだと書いてある。八雲氏がどういふ心でさう書いたか、またその語をどうして思ひついたか知らないが、愚考には多分此の語が英語の "Open the gate!" などでは迚も現はし切れぬ力と味とを持つてゐると思つた爲めであらう。かういふ事によつても、日本語（國語化された漢語をも含めて）にすばらしい威力趣味のあることが

知られるので、こんな事をも物の序に學生に教へたいものである。

【城中響く】　城一ぱいに響きわたるといふこと。城中に響くとは味がちがふ。例の七五調だが、威勢のよい詞である。

【大王】　韃靼の大王。

【推參至極】　語義は目上の前へ、押しかけて行くといふこと。無禮至極の意。目上を訪問することを、謙遜して「推參した」といふこともあるが、こゝは無禮を極めた訪ね方といふ意であの。

【披露】　ヒロウと讀む。披き露はす意で、文書の公開、ひろめ、上申等いろ〳〵の意に用ゐられるが、こゝは上申の意。「取らす」は「くれる」といふ輕蔑の詞。

【人傳に】　人を介して間接に。

四　老の姿はかはるとも

【內室】　貴人の妻の敬稱。

【御臺所】　ミダイドコロ。臺盤所に同じく、食物臺なる臺盤を置く所。禁中では清涼殿の一室で女房の詰所をいひ、臣下の家では食物を調へる所をいふが、轉じて貴人の北の方の稱となつた。妻女が食物を調へることから來たのである。

【不敵者】　もと勢猛にして敵すべからざる意で、「大膽不敵」などつられ、多く人を人とも思はぬ亂暴者のことをいふ。

【高提燈銅羅鐃鉢を打ち立て】　銅羅、鐃鉢は共に樂器で、今日專ら佛家に用ゐられる。銅羅は銅又は紫銅で作り、形は金盥の如く、中央部に徑數寸の疣があつて、そこをばちにて打ち鳴らすもの。鐃鉢、假名で正しくは「ねうはち」と書く。響銅で作り、形は鍔廣の麥藁帽子の如く、

二枚打ち合はせて響かしめるもの。高提燈は長い竿の先につけた提燈。夜の非常警戒に高提燈を掲げる我が國の風俗や、寺院で鳴らすドラ、ネウハチなどを思ひ浮かべて、好い加減に然るべく取り合はせた近松の才筆であらう。「打ち立て」は高提燈を受けるか、どうか、はつきりしない。或は「油斷するなと、夫々高提燈を掲げて四邊を明るくし、」と切つて、又ドラ、ネウハチを賑やかに打ち立てた、とつゞくのでもあらう。若し又高提燈を受けるのならば、高提燈に對しては「うち」は添詞で、「立て」の方が主意をなし、ドラ、ネウハチに對しては「打ち」が主意を成して「立て」は賑やす意味の添へ詞となるであらう。縱横無盡に詞を使ひこなす大我儘者、大力倆の老近松だ、その邊はどうでも宜しく、のつもりであらう、從つて吾々も自由に解釋してよからうと思ふ。

【石火矢】 中世用ゐたる大砲の名。

【うちみしやげ】 「みしやぐ」は「ひしやぐ」に同じく、取りひしぐ事、叩きつぶすこと。ハ行マ行の通用である。

【妻の女房樓門にかけ上がり】 「妻」はもと夫から婦を、婦から夫を、双方で呼んだ稱であつたが、いつの間にか女の方のみをいふ事になつた。女房はもと室もちの身分ある女官の事、それが後に妻の意に用ゐられる樣になつたのである。こゝで重ねたのは、一つは調子の爲めでもあらうが、一つは女に品位をつける爲めで、初めの「妻」はたゞ「つれ合の妻君」といふ意味、「女房」は立派な品格を持つた女といふので、たとへば

「夫の亭主」「むすめのお嬢樣」といふ樣な味であらう。そして次ぎに使つた「夫の留守に女房に」の女房は、「妻たる者に」といふ改まつた意味であらう。「樓門」は二階作りにした門のこと。

【あゝ騷ぐな〳〵……なう〳〵門外の人々】 無駄なしに簡潔に書いてあるが、「あゝ騷ぐな」は味方の士卒を制する詞、「なう〳〵」は門外の老一官等に呼びかける詞。下手に書くと、「兵共に向ひ」とか、「門外の人に向ひ」とか書く所であるが、詞だけで相手をちやんと分かるやうに書いた所がうまいのである。又一つには淨瑠璃や芝居などの演劇ものでは、身振やセリフ廻などの謂はゆる科白で、そこを知らせるのが一つの呼吸なので、かういふ事をも、演劇鑑賞の參考として敎へておきたいと思ふ。

四　老の姿はかはるとも

【逢はんとは心得ずさりながら】 文法的には「逢はんとは心得ず。」と切つて、改めて「さりながら」を出すべき所を、わざとつゞけたので、一種の藝術的なる接離法の一つである。諧曲などにもよくあり、殊に、故市川團十郎などの得意とした臺詞まはしの一つである。

【雲踏さに】 日本語の趣味と漢語の趣味とを一擧にして兩得せんとする詞姿の振假名式添義法である。

【むさと】 みだりに、前後の見境もなく、うつかりと。安齊隨筆卷四に「俗に漫なる事をムサといふ。昔の詞には無左右といへり。左をも右をも思ひ量る事なくみだりなるを云ふなり。今は無の字を音に唱へて、無左右と云ふをムサトと云ふなり。又無左右といふを俗に誤りてムシヤ

ウとも云ふ」とある。むさのむが鼻にかゝる所からムザともいふ。そしてそれが「マザ〳〵ト」などに轉じたとも云はれる。

【一官も始めて見る娘の顏もおぼろ月、涙にくもる聲を上げ】 實に好い調子の名文である。初めの四句は、リズムの味を細かにいふと、

一官も　はじめて見る　娘の顏も　朧月。

五、六、七、五と七五本位に變化をつけた二十三字を悠揚と讀むので、その次ぎに

なみだにくもる　こゑをあげ

そこつのまをし　ごとながら

と、七五を刻んで追つて行く面白さ、そして複雜な事柄を簡潔に、しかも面白く解るやうに疊み込んだ面白さ、まことに言語道斷ともいふべきであらう。月と日とは淨瑠璃に普通な、例の極めて大まかであるが、前に「冴えかへる春の夜の」とあれば、いづれ餘寒の二月時分のつもりであらう。また朧の光によつて娘の顏を仰ぎ見、月にうつる父の顏を、樓上から鏡の面に寫し取つたと趣向してある所を見ると、いづれ十五夜の前後の圓に近い月影の頃のつもりであらう。「曇る」は「おぼろ月」の緣語により、枕詞風に承けたので、始めて見る一人娘の顏だ、はつきり見たいと思ふのに、生憎と月が朧ろに曇つてゐる、情なさに老の眼が涙に曇る、聲までが曇りを帶びて、咽ぶやうな涙聲をふりしぼつて扨いふことに、といふ味である。さすが老手、技巧らしい厭味は微塵も見せてはゐないが、此の「曇る」は月は空に曇り、目は涙に曇り、聲は悲みに曇る、この三つを含んでゐるので、

一筆三叙の離れわざを見せてゐるのです。かういふ事を細かに言ふと、くだ〳〵しくなりますが、近松の文章は實に活殺自在、何の氣もなく書いて居つて、歩々春を生じ、咳唾珠を成すといふ趣があるのですからね。私が曾て調べたことである、修辭學で詞姿（figure）といふ修飾形式が三百からある、その數多き三百餘種の詞姿が殆んど悉く、近松が傑作の三四十篇から取つた例で立派に說明がつくのです。どうか、斯ういふ方面にもよく注意して、此の國の名譽を負うて立つ大天才兒の筆の妙趣を味はつて下さい。

【逆鱗】 ゲキリン。天子の怒りのこと。韓非子の「說難」に「夫龍之爲ㇾ蟲也、柔可ㇾ狎而騎ㇾ也。然其喉下有ㇾ逆鱗徑尺。若人有ㇾ嬰ㇾ之者、則必殺ㇾ人。人主亦有ㇾ逆鱗、說者能無ㇾ嬰ㇾ人主之逆鱗、則幾矣。」とあるのに基く。

【成り果てし】 おちぶれはてた。賤しい者に成り成つた最後の果てが今の身なりといふこと。

【恥を包まず】 恥をかくさず。人前に出られたわけではない、殊に、名將の人妻になつてゐる娘に、このまゝの姿で逢へる義理ではないが、據ろなく、其の恥かしさをむき出しに來たのだといふこと。

【くどく】 口說くの略。繰り返して切に意中を訴へること。歎くこと。

【流石】 サスガ。しかすがの約。しかしながらの意。

【胡亂】 ウロン。此の字の廣東音で、胡說亂道、えびすの滅茶言といふやうな意味だといふ。怪

しく合點がいかぬこと。

【ハテ】 サテの韻通で同義だが、接續詞で同時に感投詞の味を兼ねた詞。さて解らぬことを言ふ人達ぢやー などいふ意を含んでゐるのであらう。

【はらり】 ずらりなどに似てゐるが、今まで一つに纏まつてゐたのが、パラリと散開して列を成すといふ意であらう。

【いやしやつめとも】 「いや、しやつめ共」である。しやつめはきやつめ、やつらと同じ。

【火蓋を切る】 火蓋は鳥銃の名所で、火皿の火口を被ふ蓋。火蓋を開いて點火の用意をすることで、鐵砲を打つ用意をしたといふのである。轉じては仕事に着手することにもいふ。

【日本へ身退く＝其の時は二歳にて】「身退く」は謠曲「船弁慶」に「傳へ聞く陶朱公は…功成り名遂げて身退くは天の道と心得て…」とある、あれを思ひ出でたのであらう。尙ほ例の接離（つまはなれ）の關係の味をいふと、文法的には切るべき「身退く」で切らないで、わざとすぐに「其の時は二歳にて」とつゞけて、趣をつけたのである。それから、

物語にも聞きつらん＝我れこそ
成り果てし此の姿＝恥を包まず

と、切るべき所をわざとつゞけた味、皆同じ事で、こんな處でも、藝術的な讀み方、語り方の味を知らせたいと思ふ。

【證據あらば聞かまほしと、いふより兵口々に證據々々】 親子のしんみりした話が是れから始まらうといふ處へ、雜兵どものかしましい差出

口は、いかにも邪魔らしく見えるが、是れは場面を賑やかにする劇作家が技巧のあしらひで、同時に、窮して通ずる面白さを見せる爲めに、わざと、いろ〳〵な障碍物を出したのである。雜兵等が、女主君へ忠義立てして「證據を出せ〳〵」といふ。一官は「事實だから事實といふまで、外に證據は無い」と答へる。雜兵どもは「さてこそ曲者！」と鐵砲を突きつける。荒武者の和唐内が腕をまくつて飛び出す。「其奴をも一しよにやつつけろ」と逸る。せり合ひ揉み合ふその間に、一官の頭に天啓の如く閃いたのは、我れに在らずして、向うの娘の手に或はあらうかといふ、我が肖像である。かくして切羽つまつた闘爭を、兩手でおし鎭めて、

あゝ是れ〳〵證據はそつちにある筈

四　老の姿はかはるとも

と、調子までがゆつくりと落ちついて來る所が面白い。窮して通じた活の一路である。我れに求めた證據を、却つて向うの懷ろに見出だすといふ機轉の味で、同時に敵の刃で向うを刺す逆捩の味である。要するに、これまでのごた〳〵は此の一言を利かせる爲めに、わざと突發させ而して繼續させたので、かう見ると、近松の趣向といふものも、馬鹿に出來ぬもの、油斷なく氣をつけて味ははねばならぬものでせう。此の「一官兩手をあげて」から最後の「火繩もしめるばかりなり」までが、「樓門の場」と云つて、名文として、また名曲として、近松の作の中でも、特に名高い所です。

【兩手をあげてあゝこれ〳〵】「あげて」で切らずに續けた所が、例の接離の味。

【成人】 セイジンと讀む。

【疑ひを晴れ給へ】 「晴れ」は自他が違ふやうで變であるが、「晴ラセ」を約めたつもりで使つたのでもあらう。或は「疑ひが晴れるやうにして下さい」といふ心持を活かしたのでもあらう。一寸文法を超越した使ひざまである。「晴れ給へ」で切らずして、他人の詞にすぐつゞけて「なう其の詞」などは、此の場合の急な呼吸を實によく活かして現はしてゐる。

【月にうつろふ父の顏、鏡の面に近々と寫し取つて】 これは無論繪空事で、有り得べき事ではない。實物を見てはつきりしない顏が、ガラスに寫して見たところで、何のはつきりしよう。鏡中の影と鏡との間には、鏡と正身の老一官との間と同じ距離があるべき道理で、そんな事をも知らぬたわいのない趣向のやうではあるが、かういふ處は理窟を拔きにして、むしろ情の味、又むしろ道理を超越した荒唐味、奇怪味を悅ぶべきであらう。例へば謠曲「鉢の木」の、生木をたいて暖を取る荒唐味のやうなものである。生き〳〵して綠を誇り、蕾を見せてゐる梅、松、櫻の生木をたいたとて、何の暖かからう、先づ第一にいぶるばかりで燃えまいぢやないかと云へば尤もな理窟だが、理窟を離れて、祕藏の品を犧牲にしてまで人をもてなす情合を味はへれば、やはり面白く味はへられるので、こんな事は、暫らく理性の鎌首を立てさせずに、うつとりとして、恍惚として見るべき處かと考へる。

【綠の髮、鏡は今の老いやつれ】 普通にいへば、肖像の方はつや〳〵しい黑い髮の毛を持つた壯

年の父、鏡に映つた父は、老いさらばうたやつれ姿」といふところだが、これを面白く言ひ換へたので、黑を似寄りの風情ある詞の綠にかへ、髮の毛を頭髮の中の或る部分の名である鬢にかへ、映つた姿をばその姿をうつして持つてゐる所の鏡で代表させたといふやうなわけで、細かにいふと、一々修辭上の技巧を見せてゐるのである。

【なう懷かしや戀しや＝母は冥土の苔の下】

【父は爰にましますよと＝繪圖では近いやうなれど】

【我が身さへつらかりし＝よう生きてゐて下さつて】

いづれも文法的に離すべき所を、わざとつゞけた藝術的な語り方の味である。「冥土の苔の下」は、苔の下なる冥土、卽ち墓の下なるあの世の意、調子の爲めに詞をあちこちにしたのである。この「なう懷かしや戀しや」から「聲も惜まぬ嬉し泣き」に至るまで、文句の轉じ方の面白さ、續き方の自然さ、それから又、「いや、不思議な事を云はせたな」と驚くと、それがすぐにピタリと落ちついて、クラリ〳〵と轉じては續きつつ、動搖する感情を最高潮に運んで行く手振の絕妙さを御覽なさい。「母は死んで在さず」と云つて「父は日本にありとは聞くが」につゞく。それから日本は遠くて便りは聞かれぬが、東の果ての國と聞いて、明くる毎に東天の旭日を父と思つて拜むとつゞく。今度は「明くれば」から「暮るれば」につゞいて、「夜は世界の地圖を披く」は、思ひかけない奇拔だが、さて圖の上

を指點して、是れは我が居る郷國唐土、右に離れた島つゞきは、亡命の父います日出づる國の大日本と、かういへば、文句も思想もピタリと落ちついて、奇拔だと驚いたのが可笑しい位。今度は父の國の遠さに、「現世の對面は絶望し」と云つて、「いつそ來世で逢はう」とつゞく。面白いなと思ふと、更に上を越して「死なぬ中から來世を待つ」などは、奇拔でもあり、自然でもあり、誠に言語に絶した面白さで、扨「かゝる悲歎の二十年は、故國に在り名將の妻ともなつた私でさへつらかつたに」から、「遠い異國に亡命の老の御身のつらさはさぞ」とつゞいて、さて「其の艱苦に堪へ忍んで、よう生きて下さつた」の接續は更に面白い。「そのために父が拜める私のうれしさ」の轉じ方は、更に〳〵面白い。かくして事が窮まる、同時に文句も極まる。あとは言語道斷の嗚咽感泣があるばかり。女主人公の錦祥女が聲を惜まず泣く、而してその泣きは嬉し泣きであつた。讀者觀衆もその嬉し泣きを貰ひ泣くであらう。此の、内容と文句と歩調を合はせ、正奇のあしらひが一つになつて、美しい感情世界を繪よりも美しく見せてゐる面白さを味はつて下さい。我が老近松の爲めに、我が元祿文學の爲めに。

【心餘りて詞なく、盡きぬ、涙ぞあはれなる】

「盡きぬ」で切つたのは、例の餘意を殘す藝術的表現のためで、舞臺ならば、こゝで一種の三絃の手が入つて、特別な味を見せる所である。序ながら、淨瑠璃は唯だ文章を文章として讀むものではなく、三味の音に合はせ、人形の振りに

合はせつゝ、一種の調子で語られるものである。謠曲が能舞臺の上で、面を冠り裝束を着けた役者が、大鼓、小鼓、太鼓、笛に合はせて、舞を奏しつゝ謠ふもの、即ち建築、彫刻、繪畫、音樂、舞踊、及び文章の六大藝術から成る綜合藝術の一部であるやうに、淨瑠璃は三絃と人形と文章との三位一體の藝術である。從つて、その文章を仔細に味はへるには、人形の樣子、三味の音色を、いくらかでも想像しつゝ讀まねばならぬので、こゝに謂ふ「盡きぬ、涙ぞあはれなる」などいふ續け方、切り方の趣なども、多少さういふ方面を聯想しつゝ鑑賞したいものであると思ふ。無論普通教育の學校の教場で、俳優の聲色や、劇場音樂の眞似を、そのまゝ試みるのは穩かなる事ではあるまいが、文學として、文章としての眞價眞趣味を鑑賞し得る程度の暗示はすべきでありませう。

【こぼす涙に鐵砲の、火縄もしめるばかりなり】「火縄もしめる」などは此の場らしくて非常に面白い。また筋を運んで來た最後の結末としては、この主要感情の現はれなる「嬉し泣き」を中心として、あらゆる人物の心が統一された所が面白く、「燃ゆる火縄もしめるばかり」といふ有形の譬喩に於いて、のぼせ上がり、はやり立つた壯夫雜兵等の熱情迄が、しんみりとなつた心持の象徴された所が非常に相應はしくて面白い。

批評

以上「釋義」の中で、内容形式の兩方面にわたり、批評は可なりに盡くしてあるが、例により

二三の追加をする。

此の一章は『國姓爺合戰』といふ大きな組織を持つた偶人劇詩の詞章の一部で、引き離して、組織や段落を論ずべきものではないが、假りに之れを一つの作として見ると、內容の性質からは、獅子が城に着く迄の一段(二四頁の十一目迄)と、着いて後なる樓門の問答活劇の一段とに分かつべきであらう。けれども、常識的に大體の趣味からいふと、四段に分けるのが穩當かと思はれる。

さう見ると、その第一段は最初の四行で、冒頭の格言から城に着くまでの括り書きである。第二段は、城の要害の描寫から、城外に於ける老一官夫婦、和藤內、親子三人の相談の條で、二七頁の六行目「城中響くばかりなり」までを其の中に攝すべきであらう。先づ父の老一官が、すばらしい要害と旅にやつれた親子三人の孤影との對照に、悄然として絕望の詞を投げると、子の和藤內がいきり立つて、これ式の城一つぶしと躍り出でる。母がこれを止めて、女の嗜み、國の恥、大義を思ひ立つ大將の心得を說き聞かせる。和藤內が之れに從つて城中に案內する。かくして城內との交涉が始まるのであるが、三人に對する仕事の割り當て、卽ち三人それ〴〵

の働かせ振りは、役不足もなく、變化もあつて、實に申分なしといふべきであらう。

第三段は、城の內外の交涉談判の條で、「當番の兵士聲々に」から三〇頁の七行目、「既に危く見えけるが」まで、最後のしんみりした靜的光景を出す爲めの準備ともいふべき、動的光景の描寫の條である。和藤內が開門の要求に憤慨して番兵が推參呼ばはりをする。老一官が、さらば娘に逢ひたいと柔らかにいふと、更に怪しんで、火繩よ丸よと騷ぐ。そこへ娘の錦祥女が樓門に現はれ、彼れを制し、これをなだめて、門外の訪客の身の上を問ふ。父が打明ける。娘は思ひ當たりながら、念の爲めに證據はと求める。父は無いといふ。兵どもが又ひしめき騷ぐ。和藤內は又飛び出したが、今度の留め役は母でなくて父であつた。といふのである。澤山の人物を實によく働かして、賑かに筋を進めて居るが、こゝで殊に面白いのは前にも云つた通り證據を求め、鐵砲騷ぎをさせ、證據の無いのに窮させ、腕をまくつて飛び出させるといふ、目まぐるしいバタ〳〵騷ぎの波爛重疊の後に、窮して通じさせた趣で、更に面白いのは、彼れから要められた證據によつて活路を開いたこと、前には逸る和藤內を母が制したのに對して、今度は和藤內と番兵との間の危機を目の前に見つゝ、それには構はず、「あゝこれ〳〵」と、樓門の

上に呼びかけて事を靜めた意表、變化の趣向であらう。同時にかういふ天晴れの趣向が構へられて居りながら、それが少しも目立たずして、唯だ有るべき事があつたやうに考へ做される所が、近松の趣向まけせぬ一種の偉さを見せるものであらう。

第四段は、殘餘の全部、動的活劇を見せた後の靜的耽味の部分で、一章の中心興味である。先づ父が預けておいた肖像によつて疑ひを晴らせといふ。

晴れ給へ＝なう其の詞

父の詞に引きつゞけて、（句讀も切りあへず）其の御詞が證據だと、姿繪を開く。こゝに理窟を超越した切々の情がそれからそれへと展開して、嬉し泣きを惜しまず泣く。老一官も泣く、和藤內も泣く。無論母も泣く。心なき兵共も泣く。火繩までが泣くばかり。…しんみりと抑へて、鎭めて、統一した所、うまいものではありませんか。

釋義以來、これまで述べて來たのは、主として文章詞遣の味、趣向の味、人物描寫、劇的取扱の味などであるが、近松を讀むに當たつて特に注意したい事は、彼れの作が淨瑠璃文學の最高峰を示してゐる事、彼れが在來の淨瑠璃の精を取り、更に前代古文學の粹を集めて、昔の大

古典『萬葉集』や『源氏物語』や『平家物語』や謠曲やと雄を競ふべき大文學を創造した事である。もう一つ特に注意して味はひたい事は、武家時代以來長く久しく抑へつけられてゐた國民の感情生活が元祿時代に至つて、猛然として擡頭した、その情本位の時代相が燃え立つやうに彼れの作の上に現はれてゐることである。此の消息は寧ろ特に彼れの世話物について言ふべき事で、時代物にはまだ十分に現はし切らざるの觀もあるが、しかしながら思內にあれば色外に顯はるで、和藤內が身內に燃えさかる熾烈の情を叫びのけ、やつてのける處、錦祥女が親戀しの情を、詞をつくして身も世もあらぬばかり言ひつくす所などに、此の時代相の片鱗を見出だすことが出來るであらう。尙ほまた同じく元祿の子と生れながら、此の花やかな世相に眼を閉ぢ背を向けて、琵琶湖畔の石山の奧に幻の住居をひつそりと樂しんだ芭蕉の作に現はれた趣味と相對して、近松の作がどれほど違つた趣を見せてゐるか、違ひながらまたそこにどれほどの共通味を見せてゐるか、これも吾々に特別の興味を見出ださせる問題であらうと思ふ。

餘訓

近松門左衞門は井原西鶴、松尾芭蕉と同じく元祿時代の空氣を呼吸した大作家である。彼れは芭蕉より

は西鶴に近き進路を取つて時代の本流を寫さうとし、商人本位の人間を寫さうとした、而して西鶴と同じく稀有の大成功をなして、淨瑠璃文學大成の名譽を擔ひ、其の名によつて元祿文學を重からしめた。彼れはいかなる點に於て傑れてあつたか。

吾等は嘗て最大級の讃辭が幾何ほど近松に許され得るかを考へて見たことがある。古來我が國に淨山の文學者が出たけれども、最大、最高、最美、最初、most, best, first, greatest といふやうな最大級の讃辭を捧げらるべき資格のある者はめつたには無い。其の最大級の讃辭を受ける資格が近松にあるかどうか、若し有れば幾つ位受けることが出來るかといふに、吾等は近松に少なくとも四つの最大級が許されると思ふ。

第一は文章に就いてゞある。これは近松の文章に詞姿の豐富なる事で、彼れは此の點に關して「最も詞姿に富める」「最も多くの詞姿を使ひこなせる、」即ち most figurative といふ最大級の讃辭を受ける資格がある。

第二は彼れの淨瑠璃の史的價値についてである。近松の淨瑠璃は最も立派なる淨瑠璃であり、從つて近松は最も偉大なる淨瑠璃作者であるといふことが出來る。是れは改めて揭げるには餘りに解り過ぎた事であらう。

第三は彼れが前代及び同時代の文學に關する取舍統合の點に就いてである。近松は最も多く取つて最もよく支配したもの、簡單に云へば最もよく統括したものと云はれるであらう。彼れは廣く材料を集めたが、

その材料をばよく支配して自分の物にした。此の意味を一語で標示し得る恰好の言葉が無い故に、暫らく「統括的」といふ語を用ゐたのである。

第四は彼れの文藝鑑賞論についてである。近松は美感の性質、文學鑑賞の心理的狀態を始めて道破した者である。それは近松が藝は實と虛との皮膜の間にあると云つたのを指していふので、彼れは「藝といふものは實と虛との皮膜の間にあるもの也。虛にして虛にあらず、實にして實にあらず、此の間に慰みがあるもの也。」と。云つて居るが、之れを今の美學者や文藝批評家の言葉に直せば醇化、理想化の必要と實を離るゝ事の必要とを說いたものに外ならぬと思はれる。

近松の時代物と世話物。當時の道德家の趣味には反しながらも、武骨一點張の粗笨單純なる古淨瑠璃は近松の時代物に於いて一層完備の域に達し、彼れの世話物に於いて更に理想の域に達した。彼れの時代物は文章の美しき點、趣向の複雜なる點、及び人情の寫し出だされたる點に於いて、遙かに古淨瑠璃の上に在つた。しかしながら彼れは時代物に於いては具ふる所以を知つて略する所以を知らなかつた、脚色を複雜にし變化あらしめ、面白き事、可笑しき事、珍らしき事を賑やかに點綴する事を知つて、枝葉を芟除して中心の根幹を十二分に開展させることを知らなかつた。而して此の時代物に缺けた中心趣味の統一的開展を出來したのが彼れの世話物である。時代物に於ける彼れの代表的筆致を見るべき作は、彼れが大評判

を取つて三年越しの大入りを續けたといふ『國姓爺合戰』であらう。其の面白可笑しい事を寄錦的に絡み込んだ趣は、日本支那の數十年にわたる事を五段數十枚の中に書き込み、大明宮廷の女の花軍の下知に足利忠綱が宇治川先陣の下知もどきの文句を用ゐ、唐土の婦人に九寸五分を持たせ、國姓爺をして明兵に向かひ辨慶が勸進帳もどきの文句を讀ましめたのを見てもわかる。彼れの時代物は凡て拵へたもの、弄んだもの、何の一貫した人情があらう。要するに彼れの時代物は面白き文章と、筋の目まぐろしき變化とに人情の斷片的象嵌、唯だこれのみである。

近松は世話物に於いて此の弊を殆んど蟬脫して新しき面目を發揮して居る。しかしながら彼れは、世話物を書き初めてからも、尙ほ時代物を捨てなかつた。而して遊化自在なる此の大天才は筋本位の馬鹿げた昔話と、情本位の身につまさるゝ現在話とに筆と頭との使ひ分けをなしつゝ、七十二歳の十二月二十二日（享保九年）の終焉に至つたのである。彼れが五十九歳には『冥途の飛脚』に次いで『吉野都女楠』を作り、六十三歳には『生玉心中』についで『國姓爺後日合戰』を作り、六十五歳には『國性爺後日合戰』についで『槍權三重帷子』を書いたのを見ると、彼れが自在の文才を知ると共に、彼れが元祿思想に沈潛して、「唐の大和の敎へある道々、伎能雜藝滑稽の類まで知らぬことなげに口に任せ筆に奔らせ、一生を轉り散らした」世のまがひ者なることが明らかに思ひ浮かべられる。（『新國文學史』）

五　智惠の振賣

要旨　解題

『織留』の中の一說話である。『織留』は『日本永代藏』などと共に、西鶴が作の中の謂はゆる「町人物」の一つで、主として當時の町人の物欲生活を描いたもの、貧を防ぎ富を得る方面の說話や心得を說いたものである。田山花袋氏は金錢を立派な文學としたのは、我が國では西鶴を以て始めとすると云つたが、斯樣な主題を大膽に取扱つた點、取扱つて見事に成功した點に於いて、西鶴の偉大なる獨創の一面があるのである。

『織留』は『本朝町人鑑』と『世の人心』との二篇から成つてゐる。此の二篇は、西鶴の書き殘したまゝで刊行されずにゐたのを、門人の北條團水が兩部を取り合はせ、『織留』と名づけて刊行したので、委しくいへば『織留』六卷の中、最初の二卷に『町人鑑』を取り入れて、『織留本朝町人鑑』と名づけ、あとの四卷に『世の人心』を取り入れて『織留世の人心』と名づけたのである。此の書全部六卷、二十三話より成立つて居り、いづれも團水が謂はゆる「日用世を

わたるたつきに心を得べき龜鑑たるべきもの」で、此の章は、委しくは「何にても智惠の振賣」といひ、その下に「毎年師走のはたらき男」「猫の蛋取手がはり」と割註がしてあり、卷三『世の人心』の末章を成してゐるのである。

西鶴は寛永十九年に大阪に生れた。一説によると、もと平山藤五といふ町人であつたといふことで、初め鶴永と號し、三十四歳にして西鶴と改め、四十九歳にしてまた西鵬と改めた。初め西山宗因について俳諧を學び、一時大阪談林派の中心人物となつたが、極めて速吟で、三十六歳にして獨吟千六百句を興行し、三十九歳にして四千句を興行し、四十三歳の貞享元年の六月五日には、住吉の社頭で一日一夜に二萬三千五百句を獨吟して二萬堂と號したと云はれる。天和二年四十一歳にして小説の筆を執りはじめ、『好色一代男』『好色二代男』『好色五人女』『日本永代藏』『武家義理物語』『世間胸算用』等多くの名作を出した。彼れは芭蕉、近松と相竝んで、元祿文學の三偉人と稱せられ、殊に、元祿時代を寫實したる點に於いて三者の中の第一人と云はれる。彼れの作の特色は、人生の善惡兩面、殊に愛慾生活に對する鋭利な描寫、無類の癖を持つた簡潔なる筆致、寫實の陰に漂ふ一種の皮肉、何よりもあらゆる記叙描寫に於ける特有の俳諧

味にある。彼れの作には好色物、町人物、武家物等いろ〳〵あるが、其の特色の最もよく現はれたのは好色物で、これを教科書に掲げることの出來ぬのは遺憾である。此の「智惠の振賣」の如きも、その理由から、わざと無事平穩なものを選んだので、彼れが天才的特技を見るべきものではないが、微かながらも、其の面影を偲ぶよすがとはなるであらう。

教授すべき要旨は、西鶴が文章筆致の特色、その取材描寫の呼吸、其の作に於ける時代の現はれ、近松、芭蕉と關係せしめての西鶴の味等で、特にこの課の一章だけについていふと、當世錢儲けの算段をさら〳〵と輕く鋭く書き流してゐる間に、奥深い諷示皮肉の、ちら〳〵と覗いてゐる趣などであらう。

前課に對する連絡の關係については、近松、西鶴と、元祿の二高峯をつゞけて讀む味はひ、淨瑠璃に現はれた近松の溫かい人生描寫から、浮世草子に現はれた西鶴の冷やかな皮肉な世相記錄に移る味はひに注意すべきであるが、前課といふよりは、むしろ第二課以後の四章、「幻住庵記」「芭蕉の事」「老の姿はかはるとも」「智惠の振賣」、これらをつゞけて讀んで、元祿文學の面影を知り、更に時代の特色を知ることが肝要であらう。

釋義

【振賣】 原作には「何事も智惠の振賣」と題してある。「フリウリ」は商ふ品物を提げ又は擔いで聲を立てつゝ賣り歩くこと、或は賣り歩く人。振り〳〵賣つて歩く義であらう。また「フレウリ」といふ語もあるが、これは商品を吹聽して呼ばはつて歩くといふ意味であらう。

【尾閭】 大海の底にあつて、絶えず水を漏らすといふ穴。「閭」は聚の意で、萬川の流れ尻にあつて水の集まる所なる故に尾閭といふ。莊子秋水篇に、「天下之水莫レ大二於海一、萬川歸レ之而不レ盈、尾閭洩レ之而不レ虛。」とあるのによる。

【人間に一つの口あり】 この「一つの口」は一寸曖昧で、「尾閭」といふ詞や、尾閭があらゆる川から注ぎ入る水を洩らす所である事などから考へると、肛門の事のやうに思はれるが、「一つの」といひ、次ぎの句に「朝夕喰物かぎりもなし」と云つて居る所から見ると、やはり物食ふ口のことで、多くの食物が無數に集まつて來ても、それが一噛み噛んで、ドクリと呑み込まれると、すぐに影が消え失せるといふ意味に譬へたのであらう。

【身過ぎは八百八品】 「身過ぎ」は生き身を存らへ過ぐして行くたつきのことで、「過ぎはひ」「口過ぎ」「なりはひ」「生計」「活計」に同じ。「八百八品」の「しな」は「種類」「いろ數」の意、「八百八」は物事の多い事を言ひ現はす俚諺的通語。「八百八町」「八百八島」などいふ類語がある。口調から來たので、數をしかと限るのではない。

つまり、世渡りの道は限りなく多いといふことであるが、この「八百八品」を一種の名詞止めにして、そこに餘意を含めたので、普通に言ひ現はすと、「世渡りの道は八百八品と、限りもなく多く、或は世襲により、或は得手によつて、名名の身に附いた職業があるものだが、其の職業を熱心に勤めねばなりませぬぞ」といふ事を、簡單に括つて書いたのである。「油斷」は懈怠の意、注意を怠ることで、『涅槃經』その他の佛書にある油鉢の譬から出たといふが、どうであらう。本居宣長(の說であつたと記憶する)は、緩寛の意の「ゆた」から出た音便の「ゆだン」で、ゆつたり〳〵、のらりくらりする意だと云つてゐるが、その方が本當かと思ふ。

【今時は正直をもつて・・・・】 「いまどき」はわざと俗語を用ゐたのである。當時としても一種の大膽な用語であるが、西鶴が文章の一つの特色は、俳諧ぶりを本位とし、俗語、雅語、漢語を自在に使ひこなして、立派に調和させる所にあつたので、此の「いまどき」「渡世いたさぬ」なども其の特色の一つの現はれとして味はふべきである。「骨をくだく」は無論骨折つて勉强することであるが、「身の骨を」につゞけるには、どうしても「くだく」でなければ落ちつかないのでかう云つたのであらう。かういふ一寸した所でも、名家の妥當語活用の呼吸に注意するやうにしたい。「天理に叶ひ」は、「學ぶや祿その中に在り」「かせぐに追ひつく貧乏なし」で、一心に働きさへすれば生きて行ける、これが天道の許した人間の生活原理で、此の原理に合格すると

いふこと、即ち「お天道樣の思召に叶ひ」といふやうな意。「それ〳〵の渡世いたさぬ」は、無論農は農、工は工、商は商と、それ〳〵世渡りが出來ぬといふ事がない、といふ意であるが、語法的には少し變で、理窟をいふと、「いたし得ず」といふことなし」といふべき所、このまゝにしても、「いたさず」と終止段に極めべき所である。更に細かい事を云ふと、かういふ場合には「致す」「仕る」などいふ第一人稱的の禮儀詞を使はずに、第三人稱的の詞を使つて「渡世せずといふことなし」といふべき所であらう。けれども西鶴の破格、文法違ひは天下御免の有名なもので、そこに又一種の味もあり、此處も亦その一つであるが、こゝで「いたさぬ」と云つたのは、百姓、町人、工匠等を卑く見て、「かせぎさへすれば、彼等が渡世致しがたいといふ筈がない、」といふやうな心であつたのであらう。

【人の足手かげにて】謠曲「隅田川」の梅若丸の詞に「都の人の足手影も懷かしう候へば、この道の邊りにつきこめて、驗に柳を植ゑてたまはれ」とある、それに思ひ寄せたのであらう。それを從來の諸註には「手足の影」といふ意味に解したが、まことは足と手と影との三つといふ意で、都の人ならば、その足で蹈まれるだけでもうれし、手をかざして回向でもして貰へば更に難有し、又素通り姿の影がさすだけでも悅びだから、といふ意味であるが、こゝもそんな心で、大名の城のある都會とか、船つきの港とかいふ人口の多い、人の群集する所では、住む人、往きかふ人の足や手や影やによつても、生

活の途が開けて來るといふのであらう。例へば、作者がそこまで考へたか、どうか知らぬが、他の間接な複雜な事は暫らく措いても、足があれば下駄が賣れる、手があれば手袋、ステッキが賣れる、人影が集れば茶屋が立つ、と、まあこんな意味かと思ふ。「隅田川」については『省勞抄』卷八、三八六頁參照。

【過ぎはひの種もあるぞかし】此の「ぞかし」も西鶴の文章特得の調子の一つである。無論「ぞかし」は平安王朝から用ゐふるされた詞であるが、西鶴がそれを度々用ゐ、特色のある用ゐ方をしたので、そこに特殊の趣味が出來たのである。明治文學の中でも、尾崎紅葉、幸田露伴、樋口一葉などいふ人々は好んで西鶴式の文致を眞似たもので、彼等の作にもよくこの「ぞかし」が出て來る。注意されるやうに。

【されば山城の…】その一例に、今は京都市の一部に取り入れられてゐる、あの伏見の里を御覽なさい。私などは、もう此の七八十年も見て居るが、といふので、五十二歳で死んだ西鶴が無論此の町の七八十年の經過を見得るわけはないが、或故老の話のつもりにして書いたのである。此の一センテンスも一寸詞足らずの照應を缺いた文章のやうに見えるが、例の俳諧ぶりに端折り書きをしたので、目を詰まして丁寧に書くと、伏見は昔は繁昌した處であるが、今は表通りの本町筋だけが、名殘の面影を見せてゐるだけで、すつかりさびれ切つてゐるが、それでも其處に住む無數の人達が、これといふ渡世をしてもゐないやうで、それでとにかく暮らして行

く所を見ると、成程、千戸あれば、持ちつ持たれつで共暮らしが出來ると、よく蘆にも云つたものと、うなづかれる、といふべき處である。「千軒友過ぎ」は蘆のつもりであらう。「過ぎ」は「すぎはひ」のすぎで、暮らすこと。「ぞかし」は例の西鶴調。

【さかしうなつて】賢く、注意が細かによく氣がまはるといふ意味ではあるが、コソクなつたといふやうな味を含めてある。儲かる事には競爭者が多くなる、買手に油斷がなくて容易に儲けさせてくれぬといふやうな事であらう。

【埒のあくこと】氣がかりな事の滯りなく辨ずること。もと奈良の春日神社の祭禮の行事に、神主の祝詞が濟むと、隔ての埒を開いて、諸人の神輿の前に近づくを許した事から起こつたので、障碍の撤廢されて融通の利くやうになる意味である。事が辨ずる。始末がつく。

【手前に人をもたぬ者】我が家に人手のないもの。手不足の者には都合がよいといふこと。

【表具屋】表面外觀の體裁を手落なく整へるといふ意味であらう。國語である。經師屋(きやうじや)、張師(はりし)、裝潢匠などもいふ。糊、刷毛をもち紙、布などを貼りて、掛物、額、障子などを貼ることを渡世とするもの。

【腰張】壁や襖、障子などの下部に紙、布などを貼ること。

【年德棚】年の始め、その年の惠方に注連(しめ)などを引きわたし、種々の物を供へて歲德神を祭るために作つた棚。年德神棚ともいふ。年德神とは其の年を支配する神で、陰陽師の祭る所、その

神のある方を明きの方(あかるく開けてゐて、塞がつてはゐない方角といふ意)といひ、又惠方ともいひ、その方角にあたる神に詣でることを惠方詣りといふ。惠方、吉方、兄方などいろ〳〵に書くが、エハウがもとで、よき方角の意、それに惠、吉、兄などいふ緣起のよい漢字をあてたのであらう。

【世時になりける】「世」、「時」、「時世時節」などいふのが普通で、「ヨドキ」は耳馴れぬ言葉であるが、多分西鶴が好みの用語であつたのであらう。或は元祿時代の流行語であつたのかも知れぬ。

【是等は世帶の事にて、中より下の人の爲めにもなりぬ】世帶は所帶の轉で、もと身に帶ぶる所の財產の意。今は「世帶」と書いて、よくシヨタイと振假名して讀むことになつてゐるが、こゝはセタイである。中下は中流社會、下流社會の意。以上は暮らし向き、身上持に關する事だが、と云つて、やがて非生計的な贅澤な物好きに關する猫の蚤取りに轉ずる準備をしたのである。それから序に、此の

【なりぬ】であるが、直ぐ前にも「釣りて歸りぬ」とあり、やがてまた「身過ぎの種とはなりぬ」「口廣くいひまはりぬ」と澤山ある。これも西鶴が用語の癖、一種のマンネリズム(mannerism)といふもので、文法的に必ずしも「ぬ」でなければならぬのではない。言はゞ「なりつ」でも、「なりたり」でも、「なりき」でも、「なりけり」でも、何でもよいのだが、此の我儘文豪に慣用されたので、そこに一種の味を生じ、彼れの隨喜

者に愛用される事にはなつたのである。それから前に擧げた「ぞかし」や「世時になりける」の

【ける】 も同じことで、やがて出て來る

聲立てゝまはりける。
大道へふるひ捨てける。
つら〳〵貌を眺めける。
何の仔細もなく拔きける。
埒が明かぬと申して歸りける。

などを見ると、解ることであるが、これらは文法的にいふと寧ろ「まはりけり」「捨てけり」「眺めけり」と終止式、ピリオド留めにせねばならぬ所であらう。また是等が一々文法家が除外例として許容する餘意を殘す爲めの連體段といふでもなし、すべては天才の我儘な好みといふもので、唯だ其の天才の力倆で、文法を捩ぢまげて、そこに自分流なる面白い一種の興味を成立たせたのである。破格の名文などいふものは、多くこんな處に生ずるものであるが、かういふ事については一方法格に拘泥して杓子定規の排斥をせぬやうに、同時に天才が勝手に仕散らかした横車式氣焔の煙にまかれぬやうに注意せねばならぬのであります。

【取りましよ】 普通ならば「取りませう」と云ふ所であるが、わざと左樣な男の振れさうな聲を眞似て、文の興を添へたのである。

【手白三毛】 前脚の白い三毛猫。

【一疋三文】 贅澤な物好き隱居で、毛色を好んで一匹のみならず、何匹かを飼つてゐたのであらう。それが言外に暗示してある。

【名譽に取りける】 流石上手と名譽を歌はる、

資格があるやうに巧みに取つたといふ事。英語ならば deservedly といふ樣な味で、巧みに取つた結果として得る名譽を、先取りし、anticipate して文章を活かしたのである。鞭うつた結果として流す汗を先取りして、「汗馬に鞭うつて急を報ず」といふのと同じ修辭上の味。

【うたてがり】 いやがり。

【そも〳〵何としてか分別仕出だし】 西鶴流の我儘な文法超越の筆で、例の一桁はづした端折り書きである。文法的に書き整へると、よくも考へつけたもの、「何とてしか分別仕出だしけむ、よく分別し出したもので、それがまんまと身過ぎ金取りの種になるのだから面白い」といふので、即ち丁寧に目を詰ませると、

一、何として考へ出したのであらうか。
二、よくも考へ出したものである。
三、その考へ出した思附が生計の種となるのである。

の三段を成すべきもので、文法家はいろ〳〵言ふでもあらうが、そんな事は西鶴に取つて空吹く風で、彼れは恐らく云ふであらう。此の三段を一括する離れ業が規則通りに地道を歩く文法追隨者に出來るものか。このひね味が解らなくッちや、おれの文章の俳味が解らないよと。これは西鶴ばかりの事ではない。已に前に述べた芭蕉が「幻住庵記」の最後の文句、

いづれか幻のすみかならずやと、思ひ捨てて臥しぬ。

近松が『國性爺』の

一人の雜兵も、味方に入るゝこそ軍法のもと

と聞く。

など、皆これと同じ桁はづしの括り書きである。否々芭蕉、近松だけではない。謡曲や『平家物語』、のみならず『源氏物語』に『枕の草子』『大鏡』などに皆此の格はづれの妙味といふものが幾らもあるのですからね。どういふかういふ特殊の文章を馬鹿にせぬやうに、同時に囚はれぬやうに御注意を願ひます。

【年がまへなる】 年構へで、年輩の、相應に年をとつたの意。西鶴の好んで使つた詞であるが、年をとつて、やかましい面構へ、身構へをしてゐる、といふのであらう。

【皮立付】 獣皮で仕立てた立付袴のこと。立付は立附、裁附、裁着など、いろ〳〵に書く。たちつけ袴の略。又たちつけ、たツつけ、かるさん（輕袗）伊賀袴、もんぺいなど、種々の稱がある。膝から下を狹く脛につくやうに仕立てた袴のことで、膝から下の廣がつた袴の裾を狹く裁ち切つて、脛に附くやうに仕立てたといふ意味であらう。「もんぺい」は恐らく裳の上に着るの意であらう。「大巾着」に「皮立付」は、事實のまゝを寫したのでもあらうが、ユスリ、カタリらしい、人威かしの利きさうな相貌を、わざと仰山に描いたのである。

【人の身上】 身上は身の上にかゝはる事をいひ、轉じて身代、財産の事をもいふが、こゝは兩方を含んでゐるのであらう。

【口廣く言ひまはりぬ】 廣言を吐き散らして吹聽してあるいたといふ事。法螺を吹くことで、口幅ッたくともいふ。「まはりぬ」は例の西鶴

の筆くせ。

【いかなる虎落大明神のおとし子にてもあるらん】 モガリはもと、竹を筋違ひに組み合はせて結はいた敵防ぎの柵の事で、轉じては乾し物を掛けはづしする枝つきの竹竿の事をもいふが、更に轉じては、辯舌を巧みにして人を瞞し惑かす横道者、ユスリ、カタリの類をもいふやうになつた。同じ『町人鑑』の卷一に、「おそろしき虎落どもにかたられ」と書いてゐるが、こゝはその意味である。「大明神」は此の詐僞、脅迫、ユスリ、カタリといふ惡德を人化し神化したので、一種の擬人法。西鶴が他の處で酒を人化神化して「御神酒大明神の御託宣なり」と云つてゐるが、それと同じ味で、彼れがユーモアの味を見せた筆である。「おとし子」は落胤、俗にいふおとしだねで、私通の結果生れた子、特に貴人が卑しい女の腹に宿らせた子どもをいふ。詐僞ごろつきの大明神樣が、畏れ多くも何處かの賤しい人間の婦女子に手をかけて生ませなすつた落胤でもあらうといふ皮肉の滑稽である。此の「にてもあるらん」も恐らく文法超越の括り書きであらう。こゝは正しい法格からいふと、前に「いかなる」といへば、「落子にてやあるらん」と承けねばならぬので、こゝは要するに法格を正して丁寧に書くと、

一、どんな詐僞の神の落胤か知らん。

二、きつと詐僞の神の落胤でもあらうよ。

と、二重に云ふべきを一つに束ねて

どんな詐僞の神の落胤でもあるだらう。

と云つた味である。こんな所を見ても、西鶴と

いふ男、正格に文法は知らなかつたのであらうが、とにかく一筋縄に行かぬ才筆の持主で、此奴の文章の解釋味讀が容易でないといふことが解るであらう。

【つら〳〵貌を眺めける】 つく〴〵と樣子を凝視つたといふ位の意、ボカンと呆れて、驚いて、目を見張つてゐる趣である。「貌」は西鶴が書いた通りにしておいたが、「顏」では盡くせないので、顏を中心とした容貌全體を意味するつもりであらう。「貌」は例の和漢の趣味一擧兩得の振假名修辭であるが、西鶴は細心にかういふ文字使ひを好んだ男で、多分『遊仙窟』や白氏文集などに見えた王朝式のよみ方を取つたのであらうと思ふ。

【過ぎにし秋の頃】 こゝですつかり筆を改めて、何喰はぬ顏をして砂魚食ひの失敗談に移り、それをば極めて自然に、前の皮立付のモガリに結びつけて來た所が、わざである。

【あばれける】 騷ぎふざけること。「ける」は例の作者のくせ。

【咽を苦しめける】 言葉通りに取れば、「人が咽喉をいぢめた」といふことになるが、實は咽ゆゑにさんざ苦しみぬいたといふ事を味に利かせたので、次ぎなる

【鼓三味線も鳴りをやめて】 が、人々が、鼓三味線を弄ぶ興味を失つて、といふ事を、樂器自らが聲をひそめたやうに書いたのと同じやうな味である。

【抜けることなく】 雅文調ならば、「抜くることなく」か或は「抜げずして」と書く所だが、わざ

と俗語に碎けた所が、此の作者の文章の一つの味である。

【つれ〴〵に書き殘せし云々】 兼好法師が『徒然草』に書いた足鼎の話のこと。仔細は『徒然草』の第五十三段に、かう書いてある。

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名殘とて、各々あそぶ事ありけるに、酔ひて興に入る餘り、かたはらなる足鼎を取りて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻を押し平めて顏を差入れて舞ひ出でたるに、滿座興に入ること限りなし。しばしかなでて後、抜かんとするに大かた抜かれず。酒宴ことさめていかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば頸の廻り缺けて血たり、只だ腫れに腫れ滿ちて息もつまりければ、打割らんとすれどたやすく割れず。響きて堪へ難かりければ、爲べき樣なくて三足なる角の上に帷衣を打懸けて手を引き杖をつかせて、京なる醫師のがり率て行きけるに、道すがら人の怪しみ見る事限りなし。醫師の許にさし入りて對ひ居たりけん有樣、さこそ異樣なりけめ。物を言ふもくゞもり聲にて聞えず。「斯かる事は書にも見えず傳へたる敎もなし。」と言へば、また仁和寺に歸りて親しき者、老いたる母など枕上に寄り居て泣き悲しめども聞くらんとも覺えず。斯かる程に或者の云ふやう、「たとひ耳鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。たゞ力を立てゝ引き給へ。」とて藥のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てゝ頸もちぎるゝ許り引きたるに耳鼻は缺けうげなが

ら脱けにけり、辛き命まうけて久しく病み居たりけり。

【工夫者】智慧まはりのよい機轉者。前には皮立付を着た年がまへの男とか、虎落大明神のおとし子とか、惡口を云つたが、今度は人助けの機轉な大手柄をする所だから、褒め口のシノニムをつけて「工夫者」とは云つたのである。

【しやくる】張りつ弛めつして、だまし〳〵引くこと。祝詞の「新年祭」に「岩根木根蹈みさくみて」といふ文句がある。「しやくる」は、あの「さくみ」と同義で、凹凸緩急の變化のあることをいふのであらう。

【才覺】才のはたらき。工夫。機轉。

【物言ひ堪忍せぬ男】おしやべりで、何か胸にあるとだまつてゐることの出來ない男。「物言ひ勘忍せぬ」は曖昧だが、多分言ふ事について、我慢の出來ぬ、といふ意であらう。

【我等も】「私」と一人にすべきを、わざと複數にした修辭。仲間を多く見せて感情を和らげるのであらう、論文などで自分一人の事を「吾人は」といふのと同じこと。

【左前】物事が思ふやうにならぬこと。物事が逆になつて行くこと。運のわるいこと。衰へかゝること。

【立所居所】どこでもかしこでも、立つにつけ坐るにつけ、する事爲す事悉く、などいふ味で、兩端を擧げた重ね詞。

【損銀】ソンギン。損失となつた金錢の意で、銀貨本位に見たのである。

【賣掛せねば】ウリカケ。後で代金を受取る契

約で物を賣り渡すこと、又はその代金。かけ。現金でなければ取引してくれぬので。

【二十貫目】貫、貫目は昔の錢勘定の單位、大體一千文のこと。知行などでは一貫が時によりて田地一段、二段、或は三段位に相當したといふ。

【分限】もと人の身分、分際の意味であつたが、轉じて分際の特に優れた貴人若しくは富豪を意味することになつた。こゝは富豪財產家の意。

【女房衆の親許、銀持の出家に弟】「女房衆」は前の「我等」と同じく、本來「奥さんの」と單數にすべきを、わざと複數にしてあたりをよくしたのである。妻の里方、出家の弟と云つたのは、西鶴が、例の人情の弱點を匂はした皮肉であらう。嫁の里方は聟に對して氣がねをするもの、殊に親なれば(兄弟ではさう行かぬが)娘の身の上を考へて、聟のいふ難題も大抵は聽くであらう。出家は血緣の俗的係累が無いから、割合に金離れが好い。殊に兄ならば文句もいはうが、弟なれば、兄の無理を聽くであらう。こんな人情を匂はしたものと思はれる。此の才覺者について成功話ばかりを並べず、釣針を拔いた機轉に讀者をあつと云はせつゝ、同時に金の才覺で行き詰つた失敗話を添へて、貧は四百四病の外とや、金の問題にはさすがの智惠者もと、讀者に首をひねらせる所が面白いのである。

批評

以上例によつて批評まじりの釋義をして來たが、以下例によつて追加の短評を試みることに

する。西鶴の諸作は、『日本永代藏』『武家義理物語』『新可笑記』などと、一部々々或る名題の下に取纒められてはゐるものの、一部の中の一章々々は、概ね獨立した個々の物語であるから、其の一章を引き離して論ずるのも、無理な事ではない。唯だ此の我儘天才の無軌道にも似た大自由の文章、大破壞にして同時に大建設でもある破格の文章が、誠に取扱ひにくゝて困るのである。

先づ組織段取の區分からいふと、此の作は原則の部、實證の部の二つに分けることが出來るであらう。原則の部は、最初から三二頁の九行目「過ぎはひの種もあるぞかし」までで、人間は生きねばならぬ、生きる爲めには食はねばならぬ。食ふ爲めの職業は無數にあるが、正直に働きさへすれば食ふに困ることはない、といふ根本原則を示した所である。或は、次ぎの四行、「千軒あれば友過ぎぞかし」までをも、此の第一大段、原則の部に取り入れてもよいであらうが、假りに此の四行をば、前を承けて後を起こす繋ぎの冒頭として見ると、それから最後迄が第二大段實證の部、卽ち實例によつて前の抽象的立言を證據立てる部分と見るべきであらう。

原則の部の第一大段は、また若干の小段に分かたれる。その小段は二つとも、三つとも、四

つとも、五つとも見られるであらうが、こゝで文章としての面白味、殊に西鶴文としての特殊の味は、先づ漢文古典の格言を物々しく引いて、それを俳諧味の滑稽に承け落した味である。此の大事の小化、典雅の俗化、眞面目の滑稽化、正面の側面化、これが一段俳諧の一特性ではあるが、殊にその極端を見せたのが西鶴で、精神的には、これが西鶴文學第一の骨髓であらう。彼れの『一代男』は『源氏物語』を俳諧化したものであると云はれる。而して其の俳諧化の仕振は、例へば『源氏』の螢の卷に、兵部卿宮が暗夜の一室に螢を放つて玉葛姫を見るといふ風流の工夫が書いてあるのを、俳諧化して、『一代男』に、世之助が女の放屁する所を煙管の火皿で押へたと書き替へてゐる。亡友山口剛君の說によると、是れは「ホタル」を「屁タル」に變へた俳諧化だといふことであるが、西鶴の筆致は大體此の調子である。抑も冒頭に古言を引くのは我が文章に品位を添へたいが爲めである。世々の文章家の古言成句の引用は、大抵此の趣意によるので、例へば「世亂れて忠臣を識る」と云つて、元弘に於ける楠公の旗あげを書く。「眼は千里の遠きを照らせども、己れの睫毛を見ること能はず」と枕言して、中國征伐に氣を配つてゐた信長が、膝許の光秀に油斷して弑された事を書く。「大禹は寸陰を惜みき」と云つた次ぎ

に、吾等は須らく分陰を惜しむべしと言ふ。これが多くの文章の格言成句の引き方であるが、西鶴の古言扱ひはすつかりこれらと趣を異にして、弄ぶが如く、嘲るが如く、意表のドカ落ち式に承けて、而して冷然とすましてゐるのを常とした。疑ふ人は試みに『永代蔵』の初め二三章を御覽なさい。「人の家にありたきは梅櫻松楓」と、殊勝氣に『つれ〴〵草』の文句を引くから、風流な事と畏つて後を見ると、「それよりは、金銀米錢ぞかし」と來るでせう。用心せよ「國に賊家に鼠」と出るから、成程謂はゆる社鼠城狐だ、なと思ひつゝ、眞面目に次ぎの句を待ち設けてゐると、

後家に入聟、いそぐまじき事なり。

と、ドカ落ちに茶化すのですからね。かういふ事を豫め考へて此の文章を見ると、ハ、アと頷けるでせう。引く所は大莊子の格言、大海の底に於ける廣大な穴のことで、日本の古典ならば、大祓の祝詞なる速開都姫の領じ給ふ「荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百會」とでもいふべき嚴かな大存在であるが、それをば、飯も汁も、納豆も飴ちよこも、八百八品めちや〳〵に入る、あの小さい人間の口で、しかもそれをおどけた調子で受けるのである。此の皮肉な取り合

はせ、書き振り、此の文に於いて先づ之れを味はひたいと思ふ。

次ぎに第二大段の最初の四行、これは此の大段の中の序分とも見るべき部分で、それが前の大段を承けて後段を起こす扱ひぶりは、先づかういふ調子である。「正直に働きさへすれば食ひがねをする氣遣ひはない。繁華な城下や港などの様に、餘處から人の澤山入つて來る處は、其等の人の出入につけて、生計の種が湧いてくるのだ」と、先づ前段に書いた後を承けて、「現に伏見の里などを見ると、淋れ出してから、もう何十年にもなつて、他國から入つて來る人などは殆んど無くなつてゐるが、それでゐて、何商賣をするともつかず、どうにか暮らして行く者が無數にある。これを見ると千軒友過ぎとはよく云つたもので、人の數が好い加減集まりさへすれば、外から入つて來る者がなくとも、居る者お互のやり取り丈で結構生きて行けるものと見える」とかう云つたのである。それから、「しかし此頃は人間が小賢くなつて容易な事では暮らせない。殊につらいのは節季の師走である。此の世智辛い世の、殊にせつぱつまつた節季を巧みに切りぬけて生きて行つた工夫者の工夫話を二つ三つしませうか」と、かう轉じて、つづけたのが、次ぎ〳〵の例話である。即ち此の第二段は、大別するとまた、最初の序分の四行

と、例話なるあとの殘部全體との二つになるのである。而して例話の部分がまた、手短な五つの小話列擧の部(三四頁の九行目まで)と、皮立附の工夫者の物語との二つになるであらう。そして此の六つの例話の進み方が、また馬鹿に面白く書けてゐる。

その面白味の要點は順序立と繁簡精粗の變化とであるが、大體初めには中下階級の暮らしむきの話、次ぎには贅澤、物好き、特殊の事情の話と、かう順序して、扨先づ興味の薄いものから簡短に形つけて、段々に委しくして行く。「竈の上塗」はホンの數字、その項目を擧げただけ。次ぎの「釜みがき」と「餅米洗ひ」は、手間料の説明がついて、各〻二行の二十餘字。第四の表具屋話は、材料、種類から手間賃、仕事の仕振までが寫されて、數行百數十字。それら世帶以外の物好沙汰に移つて「猫の蚤取り」になると、一種の面白い叙事文を成して、七行二百字。

漸層の筆扱ひを、かう段々にせり上げて來た上で、さていよ〳〵最後頂上なる皮立附の大虎落(がり)になると、今度はそれ丈で、三段返しの大組織になつて、先づ此の男が大法螺の口上振と態度とを寫す。そこへ一寸した釣舟遊びの挿話を鏤めて、そこへ前の皮立附の工夫者を通りかゝらせる。それからが第三段で、珠數を通す機轉の工夫に滿座をあつと云はせる。そこへおまけ

に損銀埋合せの談合を追加して、これにはさすがの工夫者にも兜をぬがせる。此の話に費すところ二十數行の七百數十字。かう見ると、興味本位に、漸層式に排列して、段々粗より精に、簡より繁に進み入つた趣、一寸汽車旅行の趣あらしめて、簡單な驛々は、名を知るだけにとゞめ、由緒に富んだ名處には長く逗留して存分に見物させるやうな趣、そしてそれ〴〵の話にそれ〴〵異つた味ひあらしめて、世相人心は先づ此の通りのものサと、にこりともせず冷やかに間世を眺めてゐる作者の面影は、味ではありませんか。

最後にもう一言。「幻住庵記」から「芭蕉の事」、「老の姿」、「智惠の振賣」と、四課つらねての元祿は隨分長いものでした。しかし是れは此の代表的三大作家の文章を、つゞけて固めて讀むことによつて、我が文化的昂揚の歷史的大時代「元祿」といふものを、理解味讀さして戴きたい爲めであります。芭蕉は俳諧に、近松は淨瑠璃に、西鶴は浮世草子に、その本領とした文學の種類はそれ〴〵に違ひました。芭蕉は派手な肉慾の世界に背いて淋しい自然の懷ろに、近松は古今の人情を歌ひ、殊に元祿人に復活した情の生活を讃美せんが爲め、偶人三絃の交響する

盛り場に、西鶴は肉に金に專注し神往する元祿の世相人心を冷靜に描寫する小說の世界に、各〻赴く所を異にしました。芭蕉はさびしい、枯れた文句を、小振りに途切れ〳〵に連ぬる中に、寂寥な神祕世界を尋く暗示し、近松は調子づいた、振幅の廣い、力に富んだ文章に輝かしい人情の光りを見せ、西鶴は人を人とも思はぬ觀察の白眼振と、冷たいが何とも云はれず美しい文章とによつて、レントゲンに掛けたやうな當世を見せました。此の三人の爲す所、赴く所、安んずる所は、かやうに著るしく違つて居りますけれども、獨自の秀でた立前によつて感情に復活し、文藝に復興した大元祿を、身を以て寫した點に於いては其の揆を一にして居ります。講讀の序を以て、こんな事情にもぼつ〳〵觸れていたゞきたいと思ひます。

餘訓

いつの頃からか、西鶴に深刻といふ批評が下されてゐるが、國文學の中で、此の語の最もよく當て嵌まるのは西鶴である。其の筆致は鋭く冷やかにして力がある。簡潔にして而も要點をのがさぬといふ所があり、世の實際の現象は、美しからうが、醜からうが、穢からうが、事實は此の通りさ、まあこれが人生だよと云つたやうな所がある。近代の作家のやうに、眞面目に人間本來の欺かざる面目を示すの、假面を剝ぐ

の、獸性を描いて見せるのといふやうな自覺のあつたのではないが、現前の事實をさらけ出して、巧く其の要を報告して、作と讀者と世の中とを目八分に冷かに眺めて居るといふ趣がある。

尾崎紅葉氏は我が古來の文人の作の中、其の文章のかけても及ばぬのは西鶴だと歎ぜられたと聞いてゐる。西鶴の文章は時代に關係なく古今の文章の間に竝べても第一流の名文であるが、あれが幼稚な文章のみ行はれたあの時代に突如として現はれたかと思ふと、一層驚嘆に値する。

そも〳〵文章の妙は題材に對する作者の情味馴熟して、其の思想が譬へば蠶の絲を吐くが如く、水の低きにつくが如く、自然に流れ出づる所にある。此處に人格の匂ひも、心のたどりも、氣分の陰影も、感觸の彈みも現はれるので、此の要關を外にして組織を說き詞姿を論ずるは、文章論の末に走つたものである。西鶴は此の點に於いて、殆んど申分なき境地に到達して文章道の三昧に入つたと云つてよい。彼れは漢學者其の他の文章論に累はさるゝことが無かつた。其の題材は二三十年耳目に熟して其の胸中に醞釀されたものである。其の文體は二三十年自在に驅使し來たつた檀林の發句を中樞として、其の中より脫化したものである。彼れは手に入つた自家特有の文體を以て、色讀體達した當代特有の人情世界を寫した。彼れの文章に於ける美所妙所は皆此の間から生まれ出でたものである。

さりながら試みに彼れの文章の局部々々に於ける特殊の姿を取り出でて見れば、其の特色の第一に數ふべきは、簡勁といふ點である。謂はゆるテニハ抜きも其の一面である、斷叙も其の一面である。中にもテニハ抜きは從來西鶴が筆癖の骨髓と見做されて西鶴の模倣者の第一に眞似たものであつた。此の句法は元祿以後の浮世草紙、其の他の文章に影響を及ぼしたのみならず、明治の文學に至つても數多の追隨者を得たものである。テニハ抜きは西鶴の創始したものではないが、彼れに於いて未曾有の面白味を發揮したやうに見える。

ぼつ切れの斷叙や名詞止めも、これと同じく彼れに於いて未曾有の面白味を發揮したやうに見える。

西鶴の文章には簡潔の妙があると共に詳悉の妙もある。斷敍の妙味があると共に連綿の妙味もある。連綿とは筆の及ばぬ限も無いといふ綿密な書き方であるが、綿密であつても調子がだれず、よく纏まつて讀者の想像に浮かぶやうに出來て居る。

西鶴に於いては、此の簡潔と詳密と、斷敍式と連綿式とが程よく絢ひ合はされて、自然にして而も變化に富んだ文章を成して居る。思ふに彼れは簡勁、斷叙の方面に於いては、清少納言に學び、詳密連綿の方面に於いては紫式部に學んだのであらう。しかしながらそれがひた模倣の猿眞似とならず、全くの西鶴式、元祿式となつて、前古未曾有の味はひを備へた事は、西鶴の爲め、又元祿文學の爲めに誇るべき所である。

簡勁に次いで第二の特色と見るべきは撚絡式の妙味である。西鶴の文章が、前句に後句をからみ、現在に過去を絡み、世話に時代を絡み、醜穢を美麗に撚り合はせ、卑俚を典雅に、悲慘を好笑に絢ひ合はせ、巧みに他の感情を和らげつゝ、面白く相合し、相離れ、相轉じて行く趣は、實に國文學中の奇觀である。撚絡式は『源氏』にも謠曲にも大分用ゐられた、しかしながら西鶴の撚絡には、其の簡勁と相合して元祿の趣味を發揮した所に云ふべからざる味はひがある。簡勁が西鶴の文章に力を與へたのに對し、撚絡樣式は美を與へたとも云へる。

撚絡式についで西鶴に見えたいみじき技巧は諷諧の面白味である。……顏を解くといふ滑稽でもない、膓をゑぐる皮肉でもない、言葉を弄んで人を笑はす駄洒落でもない、いはゞ作者の人生觀をほのめかした一種の穿ち、當面の事實に對する目障りにならぬ批評、邪魔にならぬ餘所言、味はひのある道草で、文章に彈みをつけて勢をなす效もあり、感情を緩和する效もあり、氣の利いた洒落にもなり、肩の凝らぬ教訓にもなるもの、假りに之れを名づけて諷諧の妙味といふのである。……思ふに是れは叙事の間に作者の批評や教訓を挿む方式の最も面白いものの一つであらう。（『新國文學史』より抄出）

六　旅ところ〴〵

要旨

前の數課に於いて、元祿三文豪の豐富な意味を持つた代表的文章と、明治の老大家の嚴かな教訓的の論文とを、つゞけさまに掲載した。此の課では、一つはその骨休めに、旅のたよりの小品三篇を並べて見たのである。初めの一篇は歴史的回顧の趣味のあるものをと思つて選んだ。後の二篇は自然美を紹介したものをと心掛けた。また文體からは、初めの二篇は口語式のを、最後の一篇は候式のを取つた。趣味を主とした簡單な手紙、はがきの書きやう、歴史美、自然美に對する目の着け方、取扱方、さういふ題材の手紙化、などいふ方面の參考になれば幸である。

行李カバン匆々忙々の間から、親しい人々に送る特別な音づれなので、略式本位にして「拜啓」「御健勝」「敬具」「謹言」等、前後の挨拶は大部分わざと略してある。

解題

三篇とも編者の作で『五十嵐力集』卷四『水莖』の中に收めてある。『水莖』は『我が書翰』、

『甲鳥園書簡集』、『水莖』等の諸篇から成る一種の藝術書簡集である。

釋義　批評

【在】ザイ。在所、在鄕などと同じく田舍のことで、都會地からはなれた地方の稱。水戸在、岡山在、など云つて、都會名につゞける時は、その都會の附近の村落部といふ意。

【西山莊】セイザンサウ。西山は太田の西北なる峰つゞき、金砂山の山尾で、其の間五里にわたつてゐる。西山莊所在の里は字の名を新宿といつて、今は譽田村の管内であるが、義公が此の隱栖を營まれてから名高くなつた。義公の薨後はこの山莊を出家の住居として惠日庵と名づけたが、文化中失火して屋宇燒失し、今日傳はるものは、實は天保年中に烈公が乃祖の舊栖に模して修築されたものである。「莊」は「ゐなかや」の意、山莊、村莊、別莊などいふ。

【義公】水戸侯德川光圀のこと。寛永五年に生れ十三年七月從四位下、十七年三月右中將に任じ、七月從三位に進む。明暦三年二月大日本史の編纂に着手し、寛文元年八月封をつぎ、二年十二月參議となる。五年明の遺臣朱舜水を聘して師とした。元祿三年十月權中納言に任じ、翌年五月久慈郡太田鄕西山に閑居した。五年楠公の碑を湊川に建てた。十三年十二月六日薨去、年七十。天保三年從二位大納言を贈られ、明治二年更に從一位を贈られた。

公の計畫に成つた著述には『大日本史』、『禮儀類典』、『扶桑拾葉集』、『新編鎌倉志』、『參考源平

盛衰記』、『參考太平記』、『參考保元物語』、『參考平治物語』、『常山文集』、『常山聯句』、『常山詠草』、『西山隨筆』等數十部ある。

【隱栖】 インセイ。世をのがれた閑居。憂世を避けたわびしい住居。

【大隈侯のいはゆる】 大隈重信侯。維新の元勳で、明治大正にわたる代表的大政治家。大正十一年八十五歳で薨去。此の「最も偉大なる貴族にして同時に最も偉大なる平民」の評語は、大正の初年に、世に水戸屋敷と呼ばれる小石川の後樂園で催された、溫交會の發會式に於いて、侯が會長として挨拶の冒頭に述べられたもので、編者の直接耳にしたところである。「偉大なる貴族」については説明の必要があるまい。「偉大なる平民」と云はれた大隈侯の趣意は明らかでないが、次ぎなる敷居ぬきの座敷を作られた逸話や、『水戸黄門記』などに於ける、公が微行行脚して民の疾苦を問うた話などが、一部の合理的説明を與へるであらう。

【黄門】 クワウモン。中納言の唐名。支那の隋朝で、黄門侍郎を納言と改稱したことがあるのに因る。義公は中納言であつた。

【一株の老梅をあしらつた丸窓】 「あしらふ」はとりあはせること、「あへしらふ」の略で、取りそへて風情を作る意。かういふ所は意味だけならば、「窓の前に一本の古い梅を植ゑてある」と云つても事足るところであるが、それでは殺風景で何等の趣味もない。此の句の風情は「一株」「老梅」「あしらふ」「丸窓」などいふ、味のある詞と、その連ねぶりとから出て來るので、こんな

所で、詞の風情趣味といふ事を敎へたいと思ふ。

【簀の子】 普通竹や木を編んだものをいふが、ここは單に緣側の意で、板の緣側、濡れ緣、竹の緣、何もないといふこと。

【敷居をぬきにして】 つけべき敷居を略して、といふ意。「ぬき」は俗にくだけた用語の味。二間はフタマと讀む。

【一種の床板】 トコイタと讀みたい。一種の床の間とも見立てべきといふ意。

【義公の理想】 半學者、半政治家、半仙人、半百姓の餘生を送るについて、かうもありたいと思はれた希望形式の意。例へば今迄は大名としてすばらしく立派な廣い書齋を持たれたが、これからは、何の飾りもない簡素な三疊位の室で、氣を散らさずにしんみり本を讀みたいと願はれたであらうその理想、今迄は百姓が土下座して遠方から拜んだもの、臣下は敷居を隔てゝ御意を伺つたもの、それでは面白くないから膝を交へ手を取る樣にして親しく話して見たい、と願はれたであらう、その理想といふやうな事である。

【接待】 もてなし。施しの御馳走のこと。

【心字の池】 心の字の形に掘つた池。昔の造庭法に於ける極めて普通なる一形式。

【見附の松山】 見附（ミツキ）はすぐ目につく所で、景色眺望の大切な部分を形づくつてゐるところのこと。即ち此の庭園を見れば、すぐ目について、而も此の庭の大切な背景を成してゐる松山といふ意。

【松山が大切な松を伐採されつゝある】

【背景を剝ぎ取られた孤立の西山莊の淋しい

姿】「松山」や「西山莊」を擬人した味の修辭である。第一は此の山が、手とも足とも命とも思つて大切にしてゐる松をば、利得に目のくらんだ人間どもに伐り採つて奪つて行かるゝといふ味。第二は、此の松の群立の背景があつて始めて此の莊が美しく賑かであつた、その松群を、追剝が人の衣を剝ぎ取るやうに、人に剝ぎ取られて裸立ちになつた淋しい〳〵姿、といふ味。

【蒲葵】 檳榔と蒲葵とは共に棕梠科に屬して、極めて類似してゐながら、實は別種の植物であるが、我が國にては誤り混じて、蒲葵をびらうと呼ぶことになつた。「びらう」が最も普通の呼名で、昔はあぢまさといひ、またびりやう、ほきともいひ、材木としては、たがやさんと云つてゐる。棕櫚科蒲葵屬の常綠喬木、熱帶產の植物で、我が國では日向、大隅、薩摩、土佐あたりの海島に產する。葉は掌狀で棕櫚の葉に似て大きく、四五尺にも達し、先端が尖つて下垂する。葉柄も亦四五尺に達する。棕梠の葉は本から分岐するが、蒲葵は本が續いてゐて尖端に至つて岐れるので、その葉が笠や、團扇を作る料となり、又屋根を蔽ふ料ともなる。木材は堅牢緻密で條斑があり、床柱や丸火鉢などを作る。

【鵜萱葺不合尊生誕の神話】 尊は神武天皇の父君である。尊の父君火遠理尊（海幸山幸の神話に名高い山幸彦尊）と母君豐玉媛とのお契り、及び鵜萱葺不合尊御誕生について『古事記』にかういふ事が書いてある。豐玉媛は產期が近づくと、天つ神の御子を海中に產むべきではないと云つて、夫君火遠理命の御許に御いでなされた。それ

から當時の習俗に從つて、早速產屋の造營に着手される。處は日向の海岸、今鵜戸神社を奉祀してある波打際の洞窟で、清淨な鵜の羽を萱草がはりにして、取いそぎ產殿を造られたが、まだ萱き了せぬ中に陣痛を催して來られたので、媛は夫君の尊に向つて、「凡べて別世界の者が子を產む時は、本の國の姿を現はして產みまする。妾も今本の身となつて產みませう。どうぞ妾を見ないで下さい」と堅く約束して產屋に入られたが、禁斷物の尙ほ見たさに、御產の苦しみの最中を覗かれると、こは如何に、あの嬋娟たる仙女の樣な媛が八尋の鰐になつて、のたうち廻つて居られるのであつた。尊はびつくりして逃げ退かれる。媛は產み了はると、「恥かしい處を見られた上は、もう御契りも是れ迄で御座ります

る」と云つて、海中の父の宮居に歸られた。鵜の羽の屋根を萱き了せぬ中に產聲をあげられたので、鵜萱葺不合尊とは申し奉つたのである。また靑島から今汽船三時間ばかりで着く、あの海岸の絕景の岩窟はその產殿の跡で、鵜の群集する所の家、鵜の羽で萱いた屋根の戸のあつた所といふので鵜戸神社とは名づけたのであらう。

【場所不相應】 靑島は熱帶地でもないのに熱帶植物が茂つてゐるから云つたので、此の植物のあるが爲めに、此の島が特別保護地に指定されてゐるのである。

【出雲の宍道湖の嫁が島】 湖はシンヂコと讀む。松江市及び八束、簸川の二郡に跨つた淡水湖。大橋川、天神川の二川によつて東流して中海に通ずる。周囲十三里。嫁が島は湖の中に浮かん

だやうに見える小さい平たい島で、中央に社と鳥居と松との、透いて見える趣が、一寸此の青島に似通つてゐる。

【髻華】 本取(もとり)の花と書いた字の示す通り、古、冠又は髪の上にかざした飾で、草木の枝又は造花などを用ゐた。

【箱庭】 ハコニハ。底の浅い箱の中に庭園又は山水の模様を作りなしたもの。盆庭の一。

【珍らしい、恐ろしい】 理由は次ぎの節に書いてある。珍らしいは主として島の形や目馴れぬ植物のあること。恐ろしいは、奥に入ると、ザマザマしい熱帯植物の交叉して、ぞッとさせるやうな怪奇の様子。

【行客】 カウカク。ゆきゝの旅客。旅人。

【愛護を要む】 傷めたり折つたりしないやうに要求する。可愛がつてくれよと頼む。

【ザラ】 澤山あつて珍らしからぬこと。おしなべて然ること。恐らく砂石穀粒などをザラ〳〵パラパラと撒き散らすことから來たのであらう。

【内部へ分け入つて見ると】 寫眞の左端なる記念の假橋を渡つて海岸を數町行くと、左側一丁餘り入つた所に青島神社が、此の珍奇な熱帯植物に護られて美しく立つて居る。その社前から又右の方へ、藪の中をとほして細い道が切つてある。これは當時東宮であらせられた聖上陛下のお成について新にひらいた道だといふことであるが、それを二三丁目行くと、道は盡きて亘幹の蒲葵を基調とした大きな植物どもが、縱横に幹を枝を交へて、一寸氣味わるさにぞッとさせる趣がある。私はそこから戻つて海岸を一めぐりして歸つて來たのであつた。

【此の春】 大正八年。

【行啓】 太皇太后、皇太后、皇后、皇太子の御出まし。天皇の時は行幸。上皇、法皇、女院の時は御幸(ゴカウ)といふ。

【木綿の花】 古く婦人の頭髪の飾として木綿で製した造花。木綿はかぢの木の皮で製した白布。わざと古代めかした形容である。

【割れて碎けて云々】 源實朝の歌に「あら磯に浪のよするを見てよめる」とて、「大海の磯もとどろによする浪われてくだけてさけて散るかも」といふのがある。それを踏まへて、最後の「美しいしぶき」で變化をつけたのである。

【まがひ】 まがふばかり、卽ち見ちがへるほどよく似てゐること、又はもの。

六 旅ところ〴〵

【諸葛孔明】 諸葛亮。瑯琊の人、襄陽に寓居し常に自ら管仲、樂毅に比した。劉備三たびその廬を訪ふに及んで恩義に感じて仕へ、天下三分の策を立て、備を輔けて蜀漢を建て漢統を嗣がしめた。備の死後劉禪を輔け東吳と和し北魏と爭つたが、後魏の將軍司馬仲達と五丈原に對陣し病んで陣中に死んだ。年五十四。智略縱横同時に誠忠無比で、その蜀主に上つた「出師表」は、之れを讀んで泣かざるは其の人必ず不忠と迄いはれるものである。

【阿蘇山】 阿蘇山は復式火山の好い例にされる世界の名山である。その舊火口卽ち外輪山は世界最大の火口で、南北の直徑は約六里、東西の直徑は約四里に及んでゐる。本課に「世界一の大噴火口」とあるのは、此の事實に基いて大まか

に書いたのである。

『地學雜誌』に云ふ。「九州の地相地質を按ずるに、二帶の龜裂固からざる線路あり。その一は、琉球諸島より來り、薩州の開門岳、櫻島、日向の霧島山、肥後の阿蘇山等を經て、縱に九州の中央を貫き、北に延びて日本海に沒す。之れを縱帶とす。その二は、四國の北邊より來り瀨戸內海の方向に延び、ほゞ東より西に亙り、豐後の由布岳、久住岳、肥後の金峰山、肥前の溫泉岳を經て天草洋に沒す。これを橫帶とす。凡て地帶の龜裂多き所は、取も直さず地皮の弱點なれば、此の弱點に沿ひ、地心に閉ぢ籠めらるゝ酷熱の岩液涌き出でて鬱氣を散じ遂に噴火するに至るべし。されば噴出の勢最も熾なるものは、この二帶火山脈の衝突する所に在りて阿蘇山是れなり。又云、阿蘇山は群嶺數峰の總稱にして、その中央に當り、日常水煙を吐くものを中岳と云ふ。此の中岳の北西に三個の別峰あり、その一は四周殆んど嶂壁を以て圍まれ、その內に圓尖の小山を包めり、之れを往生岳といふ。その二は往生岳の西に峙つ、山頂窪み落ちて皿狀を爲しその北方の一邊を缺けり。之れをドベンが岳と稱す。その三はドベンが岳の南に在り、圓錐狀を爲して高く聳ゆ、これを杵島本岳といふ。杵島岳はこれ等三個の群峯の總稱なり。此の杵島岳の南に又別峯を爲して屹立するものあり、烏帽子岳或ひは五面山といふ。その最高點は海面を拔くこと四二〇〇尺なり。又中岳の東方を環るを高岳と稱へ、阿蘇山中の最秀點にして、海拔四八六〇尺に達せり。この高岳の東に、一低

所を隔てゝ孤立し、その嶺鋸の齒の如き者を根子岳或ひは七面山といふ。前記の中岳、高岳、烏帽子、杵島、根子これを五岳といふ。五岳の四周に一帶の平原あり、北を阿蘇谷と稱し、南を南郷谷と稱す。爰に村落ありて約五萬の住民あり。今地勢の大體を按ずるに、所謂五岳を取捲ける連山は一大噴火口の障壁にして外輪山と稱すべし。五岳はこの外輪山の中に噴出せる火口山なり。五岳四周の窪地は火口丘と稱すべし。而も此の窪地兩谷の溪水は、西方の一隅を切り破り、深谷を成して西流す、卽ち火口瀨と稱すべし。

（大日本地名辭典）

【阿蘇大權現】 大權現の本社、「阿蘇神宮」は官幣中社で宮地村に在るが、これは山頂に奉祀した奧の院ともいふべき小さい社で、大噴火口の五六丁手前にある。延喜式に阿蘇郡建磐龍命神社、名神火と註してあるのがそれで、式內阿蘇比咩神及び國造神を配祀し、三つを合はせて阿蘇三社と云つてゐる。

【懸崖】 ケンガイ。切り立てたやうながけ。きりぎし。斷崖。

【外輪の山々】 前述の五岳のこと。「外輪山」とは噴火口內から更に火山の噴出した時に、舊時の火口壁を指していふ。傾斜は外側に緩で、內側に急なのが常例である。

【綠の矮草を纏うて撫肩うるはしく見え候へども】 山を擬人した味。矮草はたけのひくい草。青々とした、低く刈りこんだやうな草を上衣につけた樣子といひ、撫でたやうなしなやかな肩の流れ加減といひ、いかにもやさしい女性美を

現はしてゐるが、といふ意。「撫肩はいかり肩などに對するので、いかつからぬこと。」

【俄然として一變致し候】「綠の矮草を纏うて撫肩うるはしく」といふ樣な倭詞本位の用語と、光景、俄然、一變といふが如き漢文本位の用語とが、變化をつけつゝ調和してゐる點に注意。

【磊々たる赭色の火口壁】「磊々」は、石の重なり轉がつてゐるさま。「火口壁」は、火口を圍んでゐる斷崖絕壁。外側が緩く傾斜して、內側の急峻なのが普通である。

【地球といふ大なる動物の身を切れる橫斷面】地球を人化したのであるが、火口壁はほんとに動物の肉層の切り口といふ物凄さである。

【地獄の庖廚】飲食物を調理するところ。黑屋の義であるともいふが、或ひは肉類野菜などを庖丁で割り取り、切りこまざく所から云つたのかとも云ふ。前に動物の生身の肉層の橫斷面と云つたので、それから地獄の寄鬼赤鬼などが、人間の肉を切つて煮燒きするといふ地獄の料理場を聯想したのである。

【天地の大きく、人間の小さき事】天地對人間の大小の比較は、滄海の一粟、九牛の一毛、須彌と芥子、何と云つても誇張し過ぎるとがない。

【懸崖の緣に立つべし……俄然として一變致し候……庖廚とも申すべきか。小さき事を悟り候】候文ではあるが、句の結尾が「べし」「べきか」「候」「候ひき」などいろ〳〵に變化するので、面白くなつたところ、云はゞ「變化ある候文」といふ趣に注意したい。

【恐ろしき尊さ】恐ろしきは自然の偉大さに威壓

された心持についていひ、「尊さ」は宇宙の測り知られぬ洪大無邊さ神祕さの前に頭の下がる心持についていふ。これは反對の形容詞を伴はせた味の修辭で、「慘酷な親切」「泰然として腰を拔かす」などと同じく、西洋で Oxymoron といふ詞姿、英語ならば earful dignity とでもいふべき趣である。

【茫然惘然】「茫然」はあつけにとられてぼんやりしたさま。「惘然」はあきれたさま。自然の偉大な光景に打たれて我れを喪つた心持の形容。

餘訓　一　手紙の法二章

吾等の考では、手紙を書くに極めて必要な事、常に忘れてならぬ事が二つある。それは、一、早わかりのするやう、二、相手に相應するやうにすることで、之れを手紙の「法二章」といつてよい。

暇つぶしの慰みに繪端書を弄ぶ場合などは別として、一般普通の場合をいへば、手紙は用を辨ずる爲めに書くものである。早わかりがしなくては役に立つ筈がない。ひねくれた書き方をしてはならぬ、無駄があつてはならぬ、要領を得ねばならぬ、文字が正しく間違はぬやうでなければならぬなどといふ事は、皆こゝから來る註文である。又手紙は詩歌や小說などと違つて相手の定つた文である。廣く世に示すといふよりは、狹く限られた人（多くは一人）に送る文である。目上、目下、同輩と區別すべき文である。呼び捨てで相應な場合もあらう。相對づくでよい場合もあらう。敬意を表はさねばならぬ場合もあらう。此の區

別がごつちやになると、相手に侮られる、我が品格を傷つける、向ふの氣に障る、從つて聽かれる事も聽かれなくなり、出來る事も出來なくなる、といふ結果になる。つまり特別の關係ある人物を相手の仕事ゆゑ、常に此の相應といふことから目を離さぬやうにせねばならぬ。（『實習新作文』）

二　旅の音づれ

およそ旅からの音信には三つの目的があるであらう。一つは今何處にどうして居るといふ、自分の近狀を知らせるため、一つは先方の安否を問ふため、もう一つは、新らしい境の珍らしい見聞を書いて、相手に樂しみを分かつためである。此の三つの目的のいづれかを達して居れば、書き甲斐があるわけであるが、しかし新らしい境の見聞を書くのでなければ、此の種の手紙の特得の趣味といふものが現はれないであらう。つまり旅の手紙の中心興味は、旅中の新觸目を書く所にあるので、それを書いて始めて書きばえがあり、貰ひばえがあるやうになるのである。旅は觀察である。新らしい經驗に目を肥やす修行である。そのつもりで、趣味の眼の曇りを拭ひ〳〵歩いて居れば、必ず新たな感想が起こるであらう。その感想を逃がさずつかまへて、せめて繪はがきになりとも姿をとゞめさせて、自ら樂しみ、知人にも其の樂しみを分けるやうにして御覽なさい。そこに趣味の眼も養はれ、活きた作文の稽古にもなり、同時に他人をも喜ばすといふ三德があります。（『中等新作文より』）

菅公の左遷

要旨

『大鏡』列傳の部「左大臣時平」の條の最初の部分で、表題に明らかなる通り、右大臣菅原道眞が、時平の讒言により、太宰權帥として左遷された顚末を記したものである。大體の順序は、

第一段。藤原氏の嫡流、年壯氣鋭なる時平との暗鬪により、讒せられて、遂に太宰權帥に左遷せられるに至つた事情。

第二段。菅家一族が一人々々別れ〳〵にして、方々に流されたこと、竝に菅公が筑紫に下る途中、播磨の明石に於ける述懷の一情景など。

第三段。筑紫の謫居に於ける菅公のわびしい住居、及び心事、竝びに詠歌の事。

第四段。菅公薨後に於ける神祕の數々。

解題

寛平九年、宇多天皇御在位十年にして御位を醍醐天皇に讓らせられた。新帝御年十三歳。翌

翌昌泰二年に大納言藤原時平を左大臣に、權大納言菅原道眞を右大臣に任じ、別に關白を置かず、左右の二人をして幼主を輔佐して文書を內覽せしめられた。道眞は儒家より興つて藤原氏の上に立つことを憚り、再三辭表を上つて「臣地非ㇾ貴種一、家是儒林、偏因ㇾ太上皇往年拔擢之恩一、自至ㇾ諸公卿今日昇進之次。一無ㇾ食以思以慮。人心已不ㇾ縱容一、鬼瞰必加ㇾ睚眦一」など云つたが、法皇は道眞の賢才を知つて許させられず、更に重任して、道眞をして政事を專決せしめようとなされた。寬平遺誡に「總じて之を言へば菅原朝臣は朕が忠臣に非ず、新君の功臣なり、人の功は忘るべからず、新君之を愼め云々」とあるのが此の間の消息を物語つてゐる。寬平遺誡は宇多法皇が醍醐天皇に對して訓戒の書を作り、國政の得失、群臣の賢否等を書き記して與へられたものである。

時平は道眞の才名が自分に超え、天皇、法皇の寵遇の厚いのを嫉んで、道眞が源光、藤原定國等と謀り、天皇を廢して皇弟齊世親王、(妃は道眞の女)を立てようとする異圖があると讒した。讒者の謀はまんまと成就して、延喜元年正月道眞は「右大臣菅原朝臣、翰林より俄に上りて止足の分を知らず、專權の心あり。廢立を行ひ、父子の志を離間し、兄弟の愛を破らんと欲

す。詞は順にして心は逆なり。是皆天下の知る所、大臣の位に居るべからず」といふ罪狀のもとに、太宰權帥に貶せられた。法皇は道眞を救はうとして夜を冒して禁裏に至られたが、時平の黨が宮門を閉ぢて入れ奉らなかつたので、折角の叡慮も無效に歸したのであつた。

『大鏡』は全部八卷、『榮花物語』と共にわが最初の假名の歷史で、兩書共に一名「世繼」又は「世繼物語」と呼ばれた。作者は古來藤原爲業と云はれて居るが、異說もあつて、要するにはつきりしない。

『大鏡』の記事は文德天皇の朝から後一條天皇の萬壽二年(道長薨去の二年前)に至るまで凡そ十四代、百七十五年間にわたる記事で、まづ文德天皇から後一條天皇に至る皇室方の御略傳を記し、次いで左大臣冬嗣より太政大臣道長に至るまで藤氏の大臣二十人の事を傳し、添へてその子孫の事及び錄足以來の事をも記してゐる。

體裁は從來の漢文の歷史や『榮花物語』(の上篇)などが編年體であるのに對し、紀傳體を用ゐたのは全く新しい試みである。大體『大鏡』が『榮花物語』と共に道長の盛運榮花を寫す事を主眼としたのは明らかな事であるが、『榮花』に比べると敍事が簡潔で力があり、また『榮花』

がひたすら藤氏禮讃を事としてゐるのに對して、『大鏡』が事實の眞相を明らかにし、侃諤の骨頭を見せようとした所に人を驚かすべき特色がある。此の書に於いて殊に異彩とすべきは、我が國の文學にまだ曾て無かつた問答物語の體を取つたことで、今迄の歷史が唯だ有つた事を有りのまゝに敍記したのに對して、『大鏡』が百五十歲翁の大宅の世繼と百四十歲の夏山繁樹及び靑侍その他の間にかはされた問答の形にして、芝居がかゝりに面白く十四代百七十五年間の歷史を寫した所が、此の歷史文學第一の命とすべきであらう。一言にして蔽ふと、「問答體といふ新式により、中心人物本位の列傳體にして、道義本位の力ある筆を揮つた最初の假名の歷史」、之れを大鏡の本領とすべきであらう。

釋義　批評

【醍醐の帝】『大鏡』本紀の部に、「御諱敦仁。これ亭子太上法皇(宇多帝)の第一の皇子におはします。仁和元年乙巳正月十八日にうまれたまふ。寬平五年癸丑四月二日に東宮に立たせたまふ。御年九歲。同じき七年乙卯正月十九日、十一歲にて御元服し給ふ。同じき九年丁巳七月三日位につかせ給ふ。御年十三。世をたもたせ給ふこと卅三年。延長八年九月廿五日おりさせ給ふ。おなじき八日うせさせ給ふ。みさゝぎ山科にあり。」とある。

【時平のおとゞ】本文には「この大臣」とあるが頭略の關係で、固有名詞をそのまゝ繰返したのである。基經の長子。おとゞは大臣のこと。仁和二年冠禮して正五位に敍し、次いで從四位下左近衞權中將となり、翌年藏人頭に補し、寬平中讃岐權守を兼ね、參議、左右衞門、檢非違使別當を歷て、五年中納言に任じ、右近衞大將、春宮大夫を兼ね、尋いで大納言に轉じ、又左大將に遷り藏人所別當に補し、從三位に叙せられた。醍醐帝御卽位の後道眞と共に政を執つたが、昌泰二年左大臣となり延喜元年從二位に敍せられた。道眞配流の後は政權全く彼れの一門に歸したが、七年正二位に敍せられ、九年に薨じた。年三十九。

七　菅公の左遷

勅して正一位太政大臣を贈られた。

【左大臣の位】時平は昌泰二年二月十四日、二十九歲で左大臣に任じ正二位を賜はつた。本來左大臣は官で、位ではないが、こゝは漠然と官の意に通じて用ゐたのである。

【菅原のおとど】菅原道眞。卽ち菅丞相、菅公、天神樣のこと。承和元年是善の子として生れ、宇多、醍醐の兩朝に仕へ、右大臣兼右近衞大將に任ぜられた。その間政績大いにあがり、朝廷の御寵任も年を追うて厚かつたが、左大臣時平の讒によつて延喜元年太宰權帥に貶せられた。配所に居ること三年、延喜三年五十九歲にしてその地に歿した。後延長元年、歿後二十年にして官位を追復せられ、一條天皇の時更に正一位太政大臣を贈られた。

【右大臣の位】 公卿補任昌泰二年に「右大臣正二位菅原朝臣(五十五)二月十四日任。」とある。

【世の政行ふべき宣旨下さしめ】 天下の政事を行へといふ勅命を下されたといふ事であるが、謂はゆる内覽の宣旨のことで、内覽とは攝政、關白又は特に宣旨を蒙つた大臣が太政官の文書を内見して萬機を宣行することである。宣旨(センジ)とは勅旨を宣べ傳ふること、又天皇の口勅を宣べ傳へる公文書をいふので、手續は内侍が勅旨を承つて藏人に傳へ、藏人がこれを上卿に告げ、上卿が外記に命じてその旨を記さしめて宣下するのが常である。「下さしめ」は敬語。

【才】 ザエと讀んで、廣くは學才器量のことであるが、和魂漢才など云つて、主として漢學の才の事をいふことになつてゐる。

【心おきて】 「おきて」は掟とも書いて、定めのこと。「心おきて」は心の活動の習慣、卽ち其の人に特有なる心のはたらきの定(さだ)めのことで、例へば或人の心は、よく理非曲直を辨へて、必ず正しきに就き、世の爲めを計り人を憐むやうに、ちやんときまつた癖が出來てゐるといふやうなこと。二つを取りすべていふと右大臣は學問もすばらしく出來、心掛も實に立派で、大事を託すべき人物であつたといふことである。

【御おぼえ】 天皇の御信任、御寵愛の事。おぼえは「思はれ」の意で、目上に對しては寵愛の意になり、下に對しては信用、人望の意味となる。

【安からず】 心穩かならず、不安を感じて來たこと。その不安が嫉妬となり、讒言となつたのである。

【さるべきにやおはしけん】 さうあるべき運命、前世からの約束ごとであつたのであらう。

【よからぬ事】 不仕合せなこと、不都合なこと。讒言配流の大不幸を丸く穩かに言ひ表はしたのである。

【太宰權帥】 ダザイノゴンノソチと讀む。帥は太宰府の長官で、正と權とがあり、中古以來は正帥には親王が成らせられ、權帥には大臣が左遷さるゝ時になる例で、又權帥は府務に與らざる例であつた。

【なし奉りて流され給ふ】 なし奉るは左遷した方からいひ、流され給ふは菅公の方からいつたので、やかましくいふと自他混同の句法である。正しくは「權帥として流した」、「權帥にされて流された」といふ風にすべきであらう。しかしかういふ喰ひ違ひの文は昔も今も澤山あるのである。

【おはします、ことの外】 こゝで暫らく立ち停まつて『大鏡』の言葉癖、卽ち慣用語法についてお話をしておきたいと思ふ。讀者は此のわづか十一行にも足らぬ冒頭の短い一節に於いて、「おはします」が引きつゞけて三度繰返され、(「おはしまし」までを加へれば六度)「ことの外」がまた引きつゞけて三度繰返されて居るのに氣がつかれたであらう。

この大臣左大臣の位にて、年いと若くておはします。菅原の大臣は右大臣の位にておはします。その折、帝御年いと若くおはします。右大臣は御心おきても、ことの外にかしこくおはしまし、左大臣は御年もわかく、才もこ

との外劣り給へるによつて、右大臣御おぼえ殊の外におはしましたるに、……。

この「おはします」「殊の外」の二語は、『大鏡』の作者が口癖に繰返した慣用語また愛用語の一種で、而してこれは普通な人並の意味に用ゐられて居るのみならず、しば〳〵特別の蔭を有つた皮肉の意味に用ゐられて居るのである。こゝでこれを繰返したのも、恐らく一つは此の鹿爪らしい同語の繰返しによつて、百五十歳翁の剽輕な滑稽な素振面影を寫すため、もう一つは僅か十五六歳といふいと若き帝樣、二十八歳といふ年壯氣鋭の、しかも門閥を憑み、嫉妬に燃えてゐる向不見の小人大臣時平、それに五十七八歳の圓熟し過ぎた謙抑質の溫和誠實な老道眞と、立役者の三人が斯う組み合はされては、悲劇の起こるのは當然瞭然の事である、といふ洞察の皮肉味を利かせるためであつたであらう。これを試みに現代語に譯して見ると、まあ斯ういふ味であらう。

まづこの時平公が我儘の利く上役の左大臣で、そしてお年が若盛りで入らせられまする。道眞公は遠慮せねばならぬ下役の右大臣で入らせられまする。そこへ持つて來て、帝樣が（後にこそ延喜の名天子と云はれなすつたが、まだ）至つてお年若で入らせられまする。（これで悲劇を生む因緣は、まづ三拍子揃つたといふものだが）かてゝ加へて、右大臣は學問がすばらしく御出來になり、平生の御心掛も格別に立派で入らつしやりまするのに、左大臣は年も若くて思慮は淺し貫目はなし、それに

學問も格別に劣つて居られますので、自然の結果右大臣に對する帝の御信任が格別に厚くなりました。これについて、左大臣が段々不安を感じ嫉妬に燃えて居るその中に……

百五十歳の老翁が勿體をつけて「入らせられまする、〳〵」を繰返し、「格別に〳〵」を繰返す所が、いかにも剽輕な爺さんらしくて面白く、同時に斯ういふ非親和的、背馳式の性質を濃厚に持つてゐる人達が、同時同處に三角關係を形づくつてゐるのでは！　と皮肉の心理興味を言外に暗示した所が面白いのであると私は考へる。一體かういふ言葉の繰返しは、普通の場合には修辭學上單調なる反覆として戒めらるべきものであるが、かういふ場合には特別の事情で、それが一段と活きて光つて來たのである。それもこれも、更に根本に溯つていふと、此の『大鏡』が普通の平敍形式の歷史ではなく、芝居掛りの問答式なるが爲めであるが、その事情は更に項を改めて、後に說明することにします。

【子ども數多】　男女合はせて二十三人あつたといふ。菅原氏系圖には男十一人、女三人を載せてある。

【撰取りし、ほど〳〵につけて、皆方々に流され】　その數多の男女の子達も、まだ親掛りの獨身ならば、せめて一緒に同じ國に流さるゝならば、哀れも少なからうが、娘達は夫を迎へて家を成し、男の子達は立身の程度こそ異なれ、各〻の器量人品骨柄につけて、それ〴〵立派に官位を持つて居られたのを、長男の右少辨高視は土佐に、次男の式部大丞景行は駿河に、三男藏人彖

茂は飛驒にといふ風にして、分かれ〳〵に流されたのだから、哀れさ氣の毒さがまた格別といふこと。

【あへなん】堪へなむの意で、我慢して、許し難きを許してやらうといふ意。

【おほやけも許さしめ】朝廷でも御許しなされた。「許さしめ」のしめは敬語。

【共にゐて下り給ひしぞかし。帝の御おきて極めてあやにくにおはしませば、この御子どもを】「あやにく」(生憎)は彌が上に憎いので、期待に反して逆にわるくなり行くこと。「この御子ども」の「この」は「かの」の意で、一句を隔てた前の成人した子達の事である。即ち大意は帝樣の御處分が生憎と期待を裏切つて嚴しかつたので、あの前に述べた成人した御子さん達を、父菅公と同じ地方へ流す事すらも御許しにならなかつたのである。といふことだが、こゝで一寸注意したいのは、文章聯絡の自然といふことで、此の「帝の御おきて」以下の句が、數句前の「皆方々に流され給ひき」にすぐ續いたならば、非常に順路平安に連絡して、何等のショックをも感ぜずに心安く讀めたであらうが、此の二句の間に、幼き君達丈には特に同行を許したといふ異脈の文句が挿入された爲めに、連絡の味を害つたといふ事である。かういふのは無論、幼き君達の同行を許された一文を除くがよいといふのではない。此の句が入るなら入るで、又穩かなつゞけやうもあるべき筈で、例へば「幼き子達を伴ふにつけても、離れ〳〵になつた大きい子供の身の上が更に〳〵案ぜられて……」

などすれば、また別種の連絡味が生じて來るであらうと思ふ。總じて『大鏡』は磨かれざる天才の作ともいふべきもので、處々にすばらしい名文があるかと思ふと、折々はまた情ないやうな惡文もあるのである。しかしそれは止むを得ぬことで、とにかく『大鏡』の大作たることを妨げるものではない。

【かたぐ〳〵】なにやかや、あれにつけこれにつけなどの意。

【東風吹かばの歌】拾遺集雜には「流され侍りける時、梅の花を見侍りて、贈太政大臣」と詞書がしてある。「こち」は東風。「なわすれそ」は忘るゝこと勿れの意。大體の意味は、やがて春風に綻びる頃ともなつたら、例のよい香をば、我が配流の筑紫まで送つてくれ、梅の花よ。自分が去れば、もう眺めるあるじもなくなるわけだが、主人がゐないからとて、春を忘れ咲くことを忘れてはいけないよ。」といふこと。極めて素直な穩かな、古今集以前の歌風を見せてゐる歌である。

【亭子の帝にきこえさせ給ふ】亭子の帝は宇多天皇。法皇、上皇を「おりゐのみかど」と云つたのである。「聞こえ」は御聞きに入れる、申し上げるといふこと。

【流れゆくの歌】みくづは水中の塵芥。しがらみは柵で流れをせきとめるため、或は土砂の崩るるを防ぐ爲め、或は水中を流るゝ雜物をからみ取るために、材を打ちわたして横に竹木を結びつけたもの。歌意は今迄は御引立によつて朝廷の大官となつて居りましたが、かく遠國に左遷